

の所産である。内耳土鍋は16個体あり、100・101は口縁部に3条の横ナデを残す。口縁部幅は図示したものをはじめ、5cm前後と広めの資料が多く、これらは15世紀後半ぐらいに比定される。

## (2) 土製品 (第172図)

一ツ家遺跡の溝3・4から土製円板が各2点出土している(126~129)。内耳土鍋の体部や底部片を割りとったのち破断面を丁寧に研磨する。そのほか一ツ家遺跡の溝5より埴塼に用いられたと考えられる、内面に鉄、銅滓や金の微粒が付着し、高熱で著しく歪みが生じた土師器皿(131)、内耳土鍋口縁部の破片(133)、同じく底部片(132)が出土した。いずれも滓付着部分の器壁の溶融・変形が著しい。鍛冶関係としてはほかに小池遺跡の竪9より轆の羽口の破片が1点(130)、溝45から3点出土している。

## (3) 鉄器・鉄製品 (第169~172図)

小池遺跡101点、一ツ家遺跡24点、総数125点を図化・提示した。奈良・平安時代の鉄器の項でも触れたが、溝からの出土品には古代のものがかなり混入しているが、明確に分離できないものもあるため中世に含めて提示している。なお奈良・平安時代の鉄器と同様、器種名や分類については吉田川西遺跡報告書に準拠した。

器種としては鎌・紡錘車・刀子・鍔鉋・釘・馬具・鍬・短刀・刀装具・武具などがあり、特に小池遺跡における短刀、刀装具や武具の存在が注意される。

### ①小池遺跡

住居址・竪穴状遺構出土品としては95住より釘(1)、183住からも釘(2・3・6)、刀子(5)、鎌(4)が出土している。267住から鎧の小札(7)、釘(8・9)が得られ、竪7から燧鉄に似た半月状の鉄板(10)、竪8からは釘(11~13)、大型の刀子(16)が出土している。竪12から釘(14・20・21・23)、鑄造製容器片(15・17)、馬具(22・24)、竪13では刀子か短刀の茎部(25)、短刀(27)、紡軸(26)がみられる。

土坑では土1022から釘(34・39)、土1046からも釘(29)、土1103では11類の刀子(30)が出土した。土1226からは釘(32・38)、土1233で口の開く管状製品(36)、土1238から釘(35)が得られている。また土1240には釘(33・40)、刀子(37)、土1567では釘(31)、土1857でも釘(28)がみられた。

溝状遺構では溝25から燧鉄(41)、釘(42~49)、Ⅷ類の鍬(50)、刀子(51~53・55)、短刀(54)、毛拔型鉄製品?(56)が得られた。溝27には大型・外湾刃の刀子?(57)、刀子(58・60)、長方形の鉄板(59)、鉸具刺金(61)、釘(62・63・71)がある。溝28からは釘(64)、溝30からは釘(65~70・73)、鍔鉋(76)、鍬(74・75)、刀子(72)、両刃の刃物(77)、紡錘車(78・79)、溝47では鎌(80)が出土した。

井戸2では釘(82~85)が出土している。検出面・排土からは釘(88~90・92・93)、刀子(96・101)、鑿?(86)、馬具?(100)、7と同形同大の鎧小札(94)、刀装具(87)、缶状の器?(98・99)が出土している。

### ②一ツ家遺跡

竪穴状遺構の出土品は竪2より馬具(103)が得られ、土坑墓1からは短刀(102)が出土した。

土坑出土品は土66から釘(107)、土83から同じく釘(106)、土240から茎部を丁寧に銅板で被覆した刀子(104)、土446から毛拔型鉄製品?(105)が出土している。

溝状遺構からは溝1より鍬(109)、溝2から釘(110)、溝3からも釘(116~118)が出土し、溝4では燧鉄(112)、釘(119)が得られた。溝5からは刀子(113~115・120)、鎌(121)、釘(122)が出土。

### ③鍛冶関係資料

奈良・平安時代と同様、両遺跡から鍛冶関係の資料として鉄滓が出土している。ただし調査範囲内では鍛冶遺構そのものの存在は確認されていない。

小池遺跡では土1351で7点 (228g)、土1358で62点 (131g)、土1359で52点 (738g)、土1756で1点 (12g)、土1892で9点 (92g)、溝25で18点 (612g)、溝27で14点 (456g)、溝30で1点 (102g)、溝40で1点 (92g)、溝42で1点 (100g)、溝45で17点 (1052点) が出土している。

一ツ家遺跡では豎4で1点 (94g)、土53で1点 (104g)、土229で1点 (7g)、土476で1点 (66g)、溝1で2点 (83g)、溝3で12点 (558g)、溝4で2点 (38g)、溝5で5点 (142g) が出土している。

#### (4) 銅製品・銭貨 (第169～175図)

##### ①銅製品

小池遺跡から3点、一ツ家遺跡から1点が出土している。18・19は小池遺跡豎12より出土したもので、19の上に18が重なり、一体となったものである。いずれも円形の銅板を加工し、打ち出しの装飾を施したのち鍍金している。鎧に用いられた菊座金物か中央に孔のあることを考えて総角付の環座、あるいは甲に用いられた菊座の金物とも考えられる。95は刀の鞘に取り付けられた金具であろう。

254は一ツ家遺跡の103住に混入していたもので、平らな断面形を呈する棒状の不明品である。上下を折損している。あるいは123・124の鉄器とともに平安時代に遡る可能性もある。

##### ②銭貨

中世の銭貨は小池遺跡で19点、一ツ家遺跡で520点、合計539点の出土があり、うち502点は一ツ家遺跡土1内の埋納銭である。内容的には北宋、南宋、明、朝鮮からの渡来銭と、その模鑄銭がほとんどである。なお一ツ家遺跡の溝2から出土した「寛平大寶」は皇朝十二銭であり、奈良・平安時代の遺物の項で触れた。

小池遺跡では85住から聖宋元寶 (初鑄1101年) 1点、92・97住から元豊通寶 (1078年) 各1点、123住から不明品1点、豎8から元祐通寶 (1086年) 1点、豎9から景德元寶 (1004年) 1点、土1229から開元通寶 (621年) 1点・熙寧元寶 (1068年) 1点、溝25から五銖 (隋581) 1点 (1) ・聖宋元寶2点、溝30から祥符元寶 (1008年) 1点・皇宋通寶 (1039) 1点、熙寧元寶1点・聖宋元寶1点・嘉定元寶 (1208年) 1点 (2)、検出面・排土から天聖元寶 (1023年) 1点・熙寧元寶1点出土している。

一ツ家遺跡では埋納銭については銭種・点数を別表に示した。そのほかは、柱列2から宋通元寶 (968年) 1点・景祐元寶 (1034年) 1点・熙寧元寶1点・元豊通寶1点、土1より宋通元寶1点・皇宋通寶1点・熙寧元寶1点・元祐通寶1点・淳熙元寶1点 (3)、土26から元豊通寶1点、土443から淳化元寶 (990) 1点、土478から元豊通寶1点、溝1から政和通寶 (1111年) 1点、溝3から皇宋通寶1点、溝5から咸平元寶 (998) 1点出土した。

全体的にみると、両遺跡ともに土器・陶磁器からみた中世遺構の年代観に矛盾せず、すなわち小池遺跡では11世紀～12世紀初頭の初鑄年のものが主体で13世紀中葉以降のものはなく、一ツ家遺跡では埋納銭に示されるように最新銭が宣徳通寶 (1433年) であり、15世紀代を中心とした遺構の時期と合致している。

特殊な銭としては小池遺跡溝25から出土した五銖がある。五銖の初鑄は漢代に遡るが、本遺跡出土品は銭径が小さく、隋五銖 (初鑄581年) と考えられる。近在からの出土例としては、塩尻市吉田若宮1次出土銭に同じ隋五銖が1点、後漢の五銖 (初鑄24年) 7点が存在する<sup>(註)</sup>。

近世の銭貨は一ツ家遺跡の土坑墓1から出土した寛永通寶2点がある。

##### ③鍛冶関係資料

小池遺跡から銅滓、一ツ家遺跡から坩堝が出土している。このうち鞆羽口と坩堝については土製品の項で述べた。銅滓は土1062で1点 (21g)、土1351で1点 (8g)、土1358で3点 (7g)、土1359で3点 (58g)、土1892で4点 (6g)、溝45で1点 (18g) 出土した。

註 銭貨、吉田若宮出土銭については永井久美男編 1994 『中世の出土銭—出土銭の調査と分類—』 兵庫埋蔵銭調査会、に詳しい。

## (5) 石器 (第23表、第176図)

本項では出土遺構、石器形態などから総合的に判断し、1) 平安時代、中・近世に帰属すると考えられる遺物および、2) 縄紋時代には帰属しないと考えられる遺物を一括して扱っていることを先にお断りしておく。上記の条件に当てはまる遺物は小池遺跡より13点、一ツ家遺跡より5点、計18点が出土している。それらのうち9点を提示し得た。なお個々の遺物の出土遺構、帰属時期については表を参照して頂きたい。

砥石状石器<sup>(註1)</sup>は小池遺跡より10点、一ツ家遺跡より2点、計12点が出土している。石材<sup>(註2)</sup>には砂質礫岩(1点)、砂岩(1点)、硬砂岩(1点)、粘板岩(1点)、凝灰岩(5点)、緑色凝灰岩(2点)、千枚岩(1点)が用いられている。上下端部に認められることの多い折れ面は研磨面に切られている場合が多いことから、折損もしくは折り取りの後にもさらに使用されたと考えられ、この石器のライフサイクルの一端とも想定し得る。

硯形石器<sup>(註3)</sup>は小池遺跡より3点出土している。いずれも粘板岩を素材としており、ムコウブチ・ヨコブチ・マエブチ部には線刻が認められる。4・5は節理面に沿った剥落のため全体形状の復元は困難であるが、ムコウノクリが僅かながらも残存することからムコウブチ左部と考えられる。6は左面の擦り切り面、上・下・右面の折れ面いずれも背・腹面の研磨面に切られており、線刻が平面形状に沿ってなされていることから完形品であると考えられる。

臼形石器<sup>(註4)</sup>は一ツ家遺跡より2点が出土している。いずれも安山岩を素材とした粉ひき臼の上臼と考えられる。7は供給口部より半折後、外周に沿って剥離がなされている。すり合わせ面は6分画の切線主溝型と考えられる。背・腹面に残る鑿状工具痕は切り合いの判断し得る部分においてはすべて外周に沿った剥離痕に切られており、剥離がなされた後に他用途の石器に転用されていた可能性も残る。8も供給口部を中心として約1/4が残存するのみである。7よりもやや風化が進行し、一部に外周部が残存するものの剥落が著しい。すり合わせ面は目なし型と考えられる。

鉢形石器<sup>(註5)</sup>は一ツ家遺跡より安山岩を素材とした1点のみが出土している。約1/8が残存するのみであるが、復元値は口径約170mm、口縁幅12mmを計る。内面に2条の線状痕が認められる以外は内面、外面、口縁ともになめらかな研磨面に覆われており、製作工程は伺い知ることすら困難である。

以上器種毎に概観してきたが、当該期に帰属すると考えられる遺物の多くは貝殻状剥離痕の発達しにくく考えられる素質な石材を素材としており、さらに製作工程の最終段階もしくは使用段階において研磨がなされたと考えられるものが多く、製作工程に不明な部分が多い。器形の形態学的分類に加えて調整技術をも加味した分類体系の構築が急務であると考えられる。

註1 明確な分類基準は設定し得なかったため、大まかに「直方体状を呈し、1面以上の研磨面を有する石器」を砥石状石器として扱った。

2 石材鑑定においては太田守夫氏より有益な御教唆を頂いた。記して御礼申し上げます。

3 硯形石器の各部名称などについては垣内光次郎氏の論考(垣内 1994)に従った。

4 臼形石器の各部名称などについては小山岳夫氏および佐々木宗昭氏の論考(小山 1991、佐々木 1986)に従った。

5 形態、調整などが従来考えられてきた石臼類すなわち、粉挽き臼、茶臼、搗き臼、石搗鉢などのいずれにも属しないと考えられるため、器形を復元した上でその形態名を冠して仮設した。

### <参考文献>

- 垣内光次郎 1994 「江戸高嶋硯の生産」『江戸時代の生産遺跡』 江戸遺跡研究会  
小山岳夫 1991 「第Ⅶ章第5節 石製品」『金井城跡』 佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター  
佐々木宗昭 1986 「第Ⅳ章第2節5・6」『大井城跡(黒岩城跡)発掘調査報告書』 佐久市教育委員会  
柴田 徹 1991 「考古学のための岩石鑑定ミニ図鑑」『東海大学校地内遺跡調査団報告2』 東海大学校地内遺跡調査団

第20表 小池遺跡中世土器・陶磁器一覧

No.	遺構名	図No.	種類	器種	特徴等	帰属時期	備考
1	85住		輪・青磁	碗	太めの蓮弁紋	13C中?	平安の住居
2	86住	1	輪・白磁	〃	Ⅱ類、口径約15.0cm	11C中～12C初	平安の住居
3	90住		輪・青磁	〃	細めの鎬蓮弁紋、間弁あるか?	13C中	
4	92住		輪・白磁	〃	V類	11C中～12C初	
5	95住	2	東海系	捏鉢	径約25.0cm、口唇沈線、白っぽい、中津川?	13C末～14C前	
6	〃	3	須恵質	播鉢	底部径約12.0cm、灰色粗い、播り目8本、指押え、底厚い	14C前?	堅13と接合
7	102住		輪・白磁	皿	Ⅸ類	13C後～14C中	縄紋の住居
8	104住		〃	碗	V類?、体部小片	11C中～12C初	〃
9	125住		輪・青磁	碗	蓮弁紋あるか?、不詳	13C・14C	平安の住居
10	126住	4	輪・白磁	〃	V類、口径16.0cm	11C中～12C初	〃
11	129住		輪・青磁	〃	細めの鎬蓮弁紋	13C中	〃
12	131住		土師器	皿	深い、薄い、口唇直下指押え、硬質緻密、橙色、非ロクロ	13C	〃
13	138住		輪・青磁	碗	底面厚い、見込みに沈線、角高台(やや五角形状に尖る)、高台とその内部露胎	13C中	〃
14	149住		輪・白磁	小碗	杯?、時期不明	?	〃
15	160住		輪・青磁	碗	細めの鎬蓮弁紋	13C	〃
16	167住		土師器	皿	浅い、緻密、軟質、非ロクロ	13C?	〃
17	183住		輪・青白	合子	小型壺の合子か?	12C	
18	〃	5	輪・白磁	碗	Ⅷ類か?、高台径4.4cm、見込みの釉を拭取る、高台を壊さないように打ち欠き割る	11C中～12C初	
19	〃		〃	皿	Ⅸ類(口禿皿)	13C後～14C中	
20	〃		輪・青磁	碗	同安窯系、櫛状紋、漬掛、高台近く露胎	12C中～13C初	
21	〃		〃	〃	劃花紋碗、2個体	〃	
22	〃		〃	〃	細めの鎬蓮弁紋	13C中	
23	〃		〃	〃	無紋、2個体	?	
24	〃		〃	〃	細めの鎬蓮弁紋、3個体あり	13C～14C中	
25	〃	7	〃	〃	細めの鎬蓮弁紋、厚めの施釉、高台径小さい約3.4cm、畳付け露胎	13C後～14C中	
26	〃		〃	輪花碗	口縁部小片	?	
27	〃	6	山茶碗	碗	高台低い、白っぽい、高台径約5.7cm	12C?	
28	〃		東海系	捏鉢	口唇丸み、口唇下外面押え、溝25に同じ形態あり(図No.45)、やや緻密、灰色っぽい	13C前?	
29	〃		〃	〃	高台部片、高台高1.0cm、尖る、体部下半ナデ、やや緻密、灰色っぽい	13C?	
30	〃		〃	〃	やや緻密、灰色っぽい、体部片2個体分	〃	
31	〃	9	土師器	皿	深く大きめ、厚い、口唇指押え・ナデ・尖らせる、底部丸み、非ロクロ、口径14.4・底径5.0・高3.6cm	〃	
32	〃	8	〃	〃	深い、作りが粗い、口唇直下ナデ、全面指押えによる成形、非ロクロ、口径約10.0cm	13C前	
33	〃		〃	〃	深い、作りが粗い、口唇直下ナデ、全面指押えによる成形、非ロクロ、口径約10.0cm	〃	
34	〃		〃	〃	浅い、97住と似るが削り不明、ロクロか非ロクロか不明、2個体	〃	
35	〃	10	〃	鍋?	径約30cm、上下さえ不明、脚?	13C?	
36	〃		常滑	壺	小片		
37	〃		〃	〃	小片、2点、古そう		
38	195住		東海系	捏鉢	口唇丸み、口唇下外面押え、溝25に同じ形態あり(図No.45)、やや緻密、灰色っぽい	13C前?	平安の住居
39	251住		輪・青磁	碗	細めの鎬蓮弁紋か?	13C中	〃
40	262住		輪・白磁	稜皿	白磁か?青磁か?	12C中～13C初	〃
41	265住		土師器	皿	深め、口唇指押え・ナデ・尖らせる	13C前	縄紋の住居
42	266住		輪・青磁	碗	同安窯系、外面櫛状紋、内面劃花紋	12C中～13C初	平安の住居
43	267住		〃	〃	細めの鎬蓮弁紋か?	13C中	
44	豎3	12	古瀬戸	卸皿	口径14.6cm	14C前	
45	豎6	13	〃	水注	口径約6.0cm、P5出土	〃	平安の遺構
46	豎8		輪・白磁	碗	Ⅳ類、大玉縁	11C中～12C初	
47	〃		輪・青磁	〃	鎬蓮弁紋、釉厚く紋様不詳	13C中	
48	〃	14	土師器	皿	口唇押え・ナデ、口径約11.6cm	13C中～後	
49	〃		輪・青磁	碗	同安窯、漬掛け露胎部あり、太めの櫛状紋	12C中～13C初	
50	〃		〃	〃	鎬蓮弁紋	13C中	

No.	遺構名	図No.	種類	器種	特徴等	帰属時期	備考
51	〃	26	古瀬戸	水注	堅6と同じ器種、個体は別	14C前?	
52	〃		東海系	捏鉢	白っぽい、底部から体部下半、削り1段	14C?	
53	〃	27	東海系	壺	東海系捏鉢と同じ胎土・成形	〃	
54	堅9		輸・白磁	碗	V類、乳白色	11C中～12C初	
55	〃		輸・青磁	〃	鎬蓮弁紋、間弁不明、3点、別個体	13C中	
56	〃	15	〃	〃	蓮弁紋	13C	
57	〃		東海系	捏鉢	口唇丸み、口唇直下弱い押え、粗い・灰色	13C中の前後	
58	〃	16	〃	〃	口唇やや角、口唇直下弱い押え、やや粗い、胎土灰色、口径約28cm	〃	
59	堅10		輸・白磁?	?		?	
60	〃		輸・青磁	碗	鎬蓮弁紋、間弁?	13C中	
61	堅11	17	輸・青磁	皿	見込み削り、櫛状紋、外面削り、釉調不明、底面露胎、底径5.2cm	12C中～13C初	
62	〃		古瀬戸	水注	把手か?	?	
63	堅12		〃	皿?	内面灰釉、外面下半は露胎	?	
64	〃	20	須恵質	播鉢	底径約11.0cm、静止糸切り(一定の生産を示唆)、外面横回転ナデ(ロクロか否か?)、緻密で白っぽい、摩滅著しく播り目単位不明	14C? (13C?)	
65	〃		輸・青磁	碗	蓮弁紋ただし鎬不明	13C中?	
66	〃		〃	〃	太目の蓮弁紋	〃	
67	〃	28	土師器	皿	深め、口径12.0・底径6.4・高2.8cm、横ナデ、底部凹凸	13C中～後	
68	〃	19	輸・白磁	〃	Ⅸ類(口禿皿)	13C後～14C中	
69	〃		輸・青磁	碗	内外面とも無文?、小片で不詳	13C?	
70	〃		〃	〃	蓮弁紋、小片で不詳、3個体あり	〃	
71	〃	18	土師器	皿	削りのように見えるが、へら状工具によるナデツケ、ロクロ、緻密、口径8.5・底径6.4・高1.2cm	13C中～後	
72	堅13		東海系	捏鉢	高台高1.0cm、高台から1段削り	13C前～中	
73	〃	3	須恵質	〃	底径約12cm、灰色・粗い、播り目8本、指押え、底厚い、95住と接合	14C	
74	土1005		輸・白磁	碗	V類、櫛描状紋、浅い沈線	11C中～12C初	
75	土1045		輸・青磁	〃	6個体分、いずれも細めの鎬蓮弁紋	13C中	
76	土1046		〃	〃	細めの鎬蓮弁紋	〃	
77	土1062	22	古瀬戸	卸皿		14C前	
78	土1080		輸・青磁	皿	体部中程沈線、体部外面櫛描状紋、白磁?	12C中～13C初	
79	土1098	〃	碗		小片のため不詳、蓮弁紋は見られる	13C中?	
80	土1103	23	山茶碗	小碗	尾張、口径8.6・底径3.6・高2.6cm	12C～	
81	土1140		輸・白磁	碗	口禿皿	13C後～14C中	
82	土1226	25	三筋壺	壺	肩に2本、体部に1・2・2本、自然釉、下半削り、非ロクロ、内面横ナデ、肩部指頭圧痕	12C後か	
83	土1228	24	輸・白磁	碗	高台先端欠、推定高台径6.0cm、見込み沈線、櫛描紋	11C中～12C初	
84	土1240	29	須恵質	捏鉢	底径13.4cm、砂底、白っぽい胎土、やや軟質、胎土95住に近い、摩滅著しい、底部薄い	14C? (13C後?)	
85	土1310	31	土師器	皿	ロクロナデ、浅い、口径8.7・底径6.4・高2.2cm、高さいろいろ	?	
86	〃	30	〃	〃	ロクロナデ、浅い、口径8.7・底径6.2・高1.7cm	?	
87	土1507		輸・青白	水注	型押紋、土1895と同一個体か	12C	
88	土1529		輸・白磁?	碗	内外面の釉調が相違	?	
89	土1564	32	土師器	皿	浅い、大、内面丁寧なナデ、口縁稜、口径約13.7・高約2.1cm	12C末～13C前	
90	土1818	33	〃	〃	口縁横ナデ、口径13.0・底径約8.0・高2.6cm	〃	
91	土1831	34	輸・青磁	〃	白磁か、体部中程沈線、見込み2本細い線	12C中～13C初	
92	土1858		〃	碗	太めの鎬蓮弁紋、間弁あり	13C中	
93	土1873		〃	〃	鎬蓮弁紋	〃	
94	土1877	35	古瀬戸	花瓶	鉄釉	14C前	
95	土1878		東海系	捏鉢	高台高1.2cm、削り1段、白っぽい	14C中	
96	土1883		輸・青磁	碗	無文か?	13C	

No.	遺構名	図No.	種 類	器種	特 徴 等	帰属時期	備 考
97	土1889	36	土師器	皿	ロクロ右回転、口径11.4・底径7.6・高2.5cm、燈明皿	?	
98	土1890	37	東海系	捏鉢	高台高1.5cm、口径28.6・底径13.3・高12.7cm、1段削り、口唇溝、口縁直下指押え	14C前?	
99	土1895	38	輸・青白	水注	型押紋、土1507と同一個体か、底径5.6cm	12C	
100	溝25	40	輸・白磁	碗	Ⅳ類、大玉縁、小片、口径12.6cm誤差あり	11C中～12初	
101	〃		〃	〃	Ⅳ類、大玉縁	〃	
102	〃	43	〃	皿	黄味がかった釉調、底径3.4cm	〃	
103	〃	42	輸・青磁	碗	高台から体部片、蓮弁紋があると思われる、釉厚い、濃緑、高台脇にノミ痕、底径5.0cm	13C中	
104	〃		〃	〃	鎬蓮弁紋、細め、間弁不詳、7個体分	〃	
105	〃		〃	〃	劃花紋?、淡い青緑色、透明感あり	12C中～13C初	
106	〃		〃	〃	無文	13C	
107	〃	39	〃	皿	見込み内櫛描状紋、底径4.0cm	12C中～13C初	
108	〃	45	東海系	捏鉢	口唇丸、直下押え、白、緻密、口径35.2cm、開く	13C前	
109	〃	44	〃	〃	口唇角、白～灰、緻密	13C前より古?	
110	〃	41	土師器	皿	非ロクロ、大・深、口径14.4cm	13C前	
111	溝26		輸・青磁	碗	鎬蓮弁紋、小片	13C中	
112	溝27	47	輸・白磁	碗	Ⅳ類?、角高台、底径推定6.4cm、畳付け内部露胎	11C中～12C初	
113	〃		〃	〃	V類?、体部下半露胎、見込み付近沈線	〃	
114	〃		〃	〃	内外面とも釉、沈線、Ⅷ類?、V類?	〃	
115	〃		〃	〃	見込みに沈線、V類?	〃	
116	〃		〃	〃	体部内面に櫛状紋、V類?	〃	
117	〃		〃	皿	輪花のように口唇をわずかにくぼめる	〃?	
118	〃	46	〃	〃	Ⅸ類、底部片、底径5.4cm	13C後～14C前	
119	〃		輸・青磁	碗	劃花紋、深緑の釉、透明感	12C中～13C初	
120	〃		〃	〃	鎬蓮弁か?、釉厚い	13C中?	
121	〃		〃	〃	無文	13C	
122	〃		古瀬戸	水注	4片	13C後～14C前	
123	〃	48	東海系	捏鉢	口唇溝、直下押え、白緻密、3点別個体?	13C末～14C前	
124	〃		〃	〃	高台高1.2cm、尖る、削り1段、白、緻密	〃?	
125	〃		〃	〃	体部片、白、緻密	〃?	
126	溝29	49	大 窯	皿	志野、長石釉	17C前	
127	溝30		輸・白磁	碗	櫛状紋	11C中～12C初	
128	〃	53	輸・青磁	〃	細めの鎬蓮弁紋、口径15.0cm	13C中	
129	〃	54	〃	〃	細めの鎬蓮弁紋、底径推定5.0cm	〃	
130	〃		〃	〃	ほか細めの鎬蓮弁紋2個体	〃	
131	〃	52	〃	〃	太い鎬蓮弁紋、口径15.6cm	〃	
132	〃		〃	〃	ほか太い鎬蓮弁紋?1点	〃	
133	〃		〃	〃	太い蓮弁紋1点	〃	
134	〃		〃	〃	底面厚1.4cm、角高台径約5.0cm、畳付けのみ露胎	〃	
135	〃		〃	〃	底面薄0.4cm、細高台径4.4cm、畳付け露胎、胎土赤	13C後～14C中	
136	〃		〃	杯	玉縁状のふくらみをもつ?	13C?	
137	〃		東海系	捏鉢	口唇溝、直下押え、白・緻密	13C末～14C前	
138	〃	51	土師器	皿	ロクロ、黒っぽい、口径11.4・底径7.6・高3.2cm	?	
139	〃		〃	〃	ロクロ、上とほぼ同じ、胎土は赤っぽい	?	
140	〃	50	〃	〃	口径約13.2・底径約6.9・高約3.0cm、非ロクロ?	?	
141	井戸2	11	古瀬戸	卸皿	口唇やや溝あり	14C前	
142	〃		〃	丸皿	灰釉、時期不明	15C?～16C?	
143	F区検	56	輸・白磁	碗	Ⅷ類、見込み釉掻取り、外面下半削り露胎	11C中～12C初	
144	〃		〃	皿	Ⅸ類、口縁片	13C後～14C中	
145	〃		輸・青白	梅瓶	体部片、渦紋	12C	
146	〃		〃	〃	体部片、沈線2本	〃	
147	〃	55	輸・青磁	碗	劃花	12C中～13初	
148	〃		〃	〃	劃花	〃	
149	〃		〃	〃	10個体分、細めの鎬蓮弁紋、小片	13C中	
150	〃		〃	〃	2個体分、太めの鎬蓮弁紋、小片	〃	

No.	遺構名	図No.	種類	器種	特 徴 等	帰属時期	備 考
151	〃		〃	〃	2個体分、薄手の作り、無文か	?	
152	〃		〃	〃	見込みに花紋、底部片	?	
153	〃		〃	皿?	1個体	13C	
154	〃		古瀬戸	皿	灰釉	時期不明	
155	G区検		輸・青磁	碗	1個体、劃花紋	12C中～13C初	
156	〃		〃	〃	2個体、細めの鎬蓮弁紋	13C中	
157	〃		〃	〃	3個体、不明	13C?	
158	〃		古瀬戸	小碗	鉄釉、外面下半露胎部あり、大窯か?	15C?・16C?	
159	H区検		輸・白磁	碗	見込みに沈線、V類?、体部外面下半露胎	12C中～13C初	
160	〃	57	輸・青磁	〃	鎬蓮弁	13C中	
161	〃		〃	〃	鎬蓮弁	〃	
162	〃		〃	〃	不明	?	
163	〃		常滑	壺	小片		

第21表 一ツ家遺跡中世土器・陶磁器一覧

No.	遺構名	図No.	種類	器種	特 徴 等	帰属時期	備 考
1	120住		大 窯	丸皿		16C	平安の住居
2	125住		輸・青磁	碗	龍泉窯	13C	古墳の住居
3	〃		?	皿	近世～明治	18C後～	〃
4	竪2		内耳土鍋		4点		
5	〃		?	?	土製の甕?		
6	〃		古瀬戸	皿	緑釉皿	15C	
7	竪3	59	内耳土鍋		完形	16C前～中	
8	〃	60	〃		残存率50%	〃	
9	〃	61	〃			〃	
10	〃	58	〃			16C中	
11	竪5	62	大 窯	丸皿		16C前～中	
12	〃	63	〃	皿		〃?	
13	土坑墓	64	土師器	皿	手捏ね	13C中	
14	〃	65	〃	〃	〃	〃	
15	〃	66	〃	〃	〃	〃	
16	〃	67	〃	〃	〃	13C前～中	
17	土14	68	東海系	捏鉢	灰色	12C後～13C初	
18	土26		輸・白磁	碗	V類?、櫛描	11C後～12C初	
19	土44	69	内耳土鍋		1個体実測可、他小破片	16C前	
20	土46		古瀬戸	鉢	折縁深皿、土48と接合	15C	
21	土48		〃	〃	折縁深皿、土46と接合	〃	
22	土56	70	〃		折縁深皿	15C前	
23	土61		内耳土鍋				
24	土66		〃		3点		
25	〃		大 窯	丸皿		16C前～中	
26	土83		内耳土鍋				
27	土372	72・73	内耳土鍋		3個体	16C前～中	
28	〃	71	土師器	皿	燈明皿		
29	溝1	74	古瀬戸	天目		15C後	
30	〃		〃	卸皿		15C中～後	
31	溝3	85	内耳土鍋			16C中	
32	〃	86	〃			〃	
33	〃	84	〃			〃	
34	〃	82	〃			〃	

No.	遺構名	図No.	種 類	器種	特 徴 等	帰属時期	備 考
35	〃		〃		ほか29個体		
36	〃	81	土師器	皿		?	
37	〃	79	〃	〃		?	
38	〃	77	〃	〃		?	
39	〃		〃	〃		?	
40	〃	75	大 窯	稜皿		16C前～中	
41	〃	78	〃	丸皿	灰釉	16C中	
42	〃	76	〃	碗		16C前～中	
43	〃		〃	鉢	灰釉施釉	16C	
44	〃		〃	丸皿	灰釉	16C	
45	〃		〃	〃	溝4(図No.88)と酷似	16C中	
46	〃		〃	天目	もしくは丸碗	16C	
47	〃	80	輸・青磁	碗	明代		
48	〃		〃	〃	鎗蓮弁、龍泉	13C中?	
49	溝4	90	内耳土鍋			16C中	
50	〃		〃		ほか4個体	16C前～中	
51	〃	87	土師器	皿		?	
52	〃	88	大 窯	丸皿		16C前～中	
53	〃	89	〃	〃		〃	
54	〃		〃	〃	図No.89と同一個体?		
55	〃		〃	播鉢			
56	〃	86	輸・白磁	碗	明		
57	溝5	101	内耳土鍋				
58	〃	100	〃				
59	〃		〃		ほか14個体		
60	〃	96	土師器	皿			
61	〃	97	古瀬戸?	天目			
62	〃	98	大 窯	〃			
63	〃		〃	〃	小天目		
64	〃		〃		天目か丸碗、3個体		
65	〃	99	古瀬戸	平碗	灰釉平碗		
66	〃		〃	〃	ほか4点		
67	〃	91	〃	鉢	折縁深皿	15C中	
68	〃	92	〃	〃	〃	14C中～後	
69	〃	93	〃	〃	〃	〃	
70	〃		〃	〃	〃、図No.92のタイプ		
71	〃		〃	〃	〃、底部、糸切り痕		
72	〃		〃	〃	〃、体部片		
73	〃		〃	皿	緑釉皿、2個体	15C	
74	〃		〃	壺?			
75	〃		輸・白磁	碗	古代末?		
76	〃		〃	〃	IV類?		
77	〃	95	〃	皿	IX類	13C後～14C中	
78	〃		〃	碗			
79	〃	94	〃	〃	鎗蓮弁紋	14C中	
80	排土		〃	〃	V類?		
81	〃		〃	〃	〃		
82	〃		〃	〃	見込みに沈線		
83	〃		近世陶器	丸碗		18C後～	



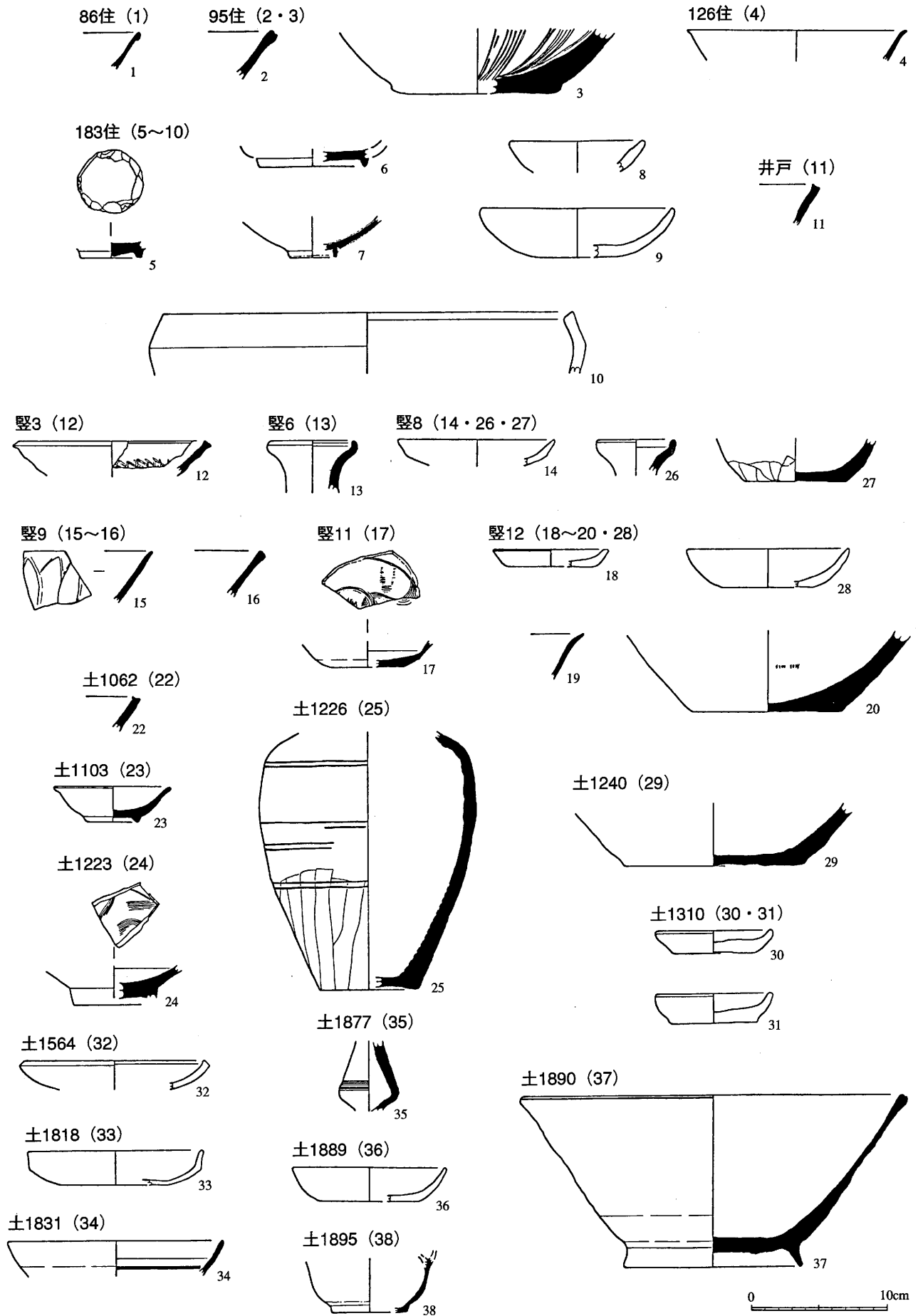
第22表 一ツ家遺跡埋納錢錢種一覽

No.	図No.	錢貨銘	初鑄年	王朝	枚数	No.	図No.	錢貨銘	初鑄年	王朝	枚数
1	4~6	開元通寶	621	唐	37	22	63~69	元豐通寶	1078	北宋	55
2	7	軋元重寶	758	〃	2	23	70~76	元祐通寶	1086	〃	41
3	8	宋通元寶	960	北宋	2	24	77~79	紹聖通寶	1094	〃	12
4	9	太平通寶	976	〃	2	25	80~82	元符通寶	1098	〃	4
5	10・11	淳化元寶	990	〃	2	26	83~89	聖宋元寶	1101	〃	15
6	12~15	至道元寶	995	〃	7	27	90	大觀通寶	1107	〃	7
7	16	咸平元寶	998	〃	10	28	91~95	政和通寶	1111	〃	15
8	17	景德元寶	1004	〃	5	29	96	宣和通寶	1119	〃	1
9	18	祥符元寶	1009	〃	7	30	97	慶元通寶	1195	南宋	1
10	19	祥符通寶	1009	〃	8	31	98	紹定通寶	1228	〃	1
11	20	天禧通寶	1017	〃	7	32	99~101	淳祐元寶	1241	〃	3
12	21~23	天聖元寶	1023	〃	29	33	102	皇宋元寶	1253	〃	1
13	24	明道元寶	1032	〃	1	34	103・104	正隆元寶	1157	金	2
14	25~27	景祐元寶	1034	〃	10	35	105	大定通寶	1178	〃	1
15	28~38	皇宋通寶	1038	〃	55	36	106・107	至大通寶	1310	元	2
16	39~41	至和元寶	1054	〃	7	37	108	大中通寶	1361	明	1
17	42・43	嘉祐元寶	1056	〃	6	38	109~113	洪武通寶	1368	〃	21
18	44・45	嘉祐通寶	1056	〃	10	39	114~116	永樂通寶	1408	〃	50
19	46~50	治平元寶	1064	〃	10	40	117	宣德通寶	1433	〃	1
20	51	治平通寶	1064	〃	1	41	118・119	朝鮮通寶	1423	朝鮮	2
21	52~62	熙寧元寶	1068	〃	45	錢種不明					3
枚数合計											502

第23表 小池・一ツ家遺跡中世石器一覽

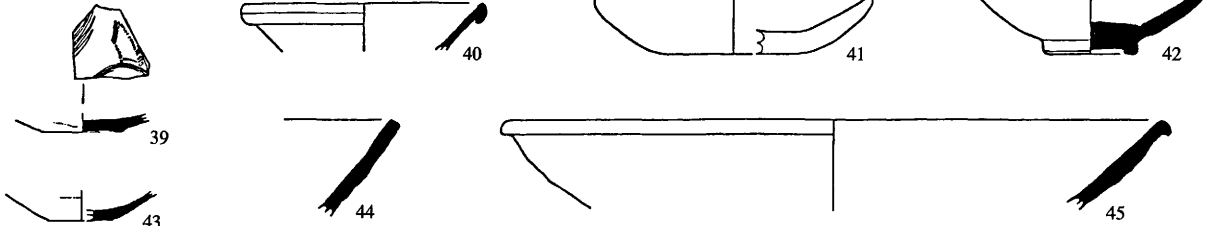
遺物No.	遺跡名地区	遺構No.	帰属時期	砥石状点数	砥石状重量	硯形点数	硯形重量	白形点数	白形重量	鉢形点数	鉢形重量	石 材	挿図No.
1	小池F区	93住	平安	1	99.0	0	0	0	0	0	0	砂 岩	—
2	小池F区	96住	平安	1	44.4	0	0	0	0	0	0	凝灰岩	—
3	小池F区	100住	平安	1	40.8	0	0	0	0	0	0	硬砂岩	—
4	小池F区	162住	平安	1	558.0	0	0	0	0	0	0	綠色凝灰岩	—
5	小池F区	183住	中世	1	74.5	0	0	0	0	0	0	凝灰岩	1
6	小池F区	豎12	中世	1	199.5	0	0	0	0	0	0	凝灰岩	—
7	小池F区	土1045	中世	1	50.0	0	0	0	0	0	0	砂質礫岩	2
8	小池F区	検出面	不明	1	23.8	0	0	0	0	0	0	粘板岩	—
9	小池F区	183住	中世	0	0	1	0.9	0	0	0	0	粘板岩	5
10	小池F区	豎8	中世	0	0	1	8.9	0	0	0	0	粘板岩	4
11	小池F区	土1035	不明	0	0	1	79.5	0	0	0	0	粘板岩	6
12	小池G区	159住	平安	1	87.5	0	0	0	0	0	0	綠色凝灰岩	3
13	小池G区	273住	平安	1	57.5	0	0	0	0	0	0	凝灰岩	—
14	一ツ家A区	溝2	中世	1	39.4	0	0	0	0	0	0	千枚岩	—
15	一ツ家A区	排土	不明	1	166.9	0	0	0	0	0	0	凝灰岩	—
16	一ツ家A区	溝3	中世	0	0	0	0	1	2715.0	0	0	安山岩	8
17	一ツ家A区	溝3	中世	0	0	0	0	1	10070	0	0	安山岩	7
18	一ツ家A区	溝4	中世	0	0	0	0	0	0	1	85.5	安山岩	9
総 計				12	1441.3	3	89.3	2	12785.0	1	85.5		

小池遺跡土器・陶磁器

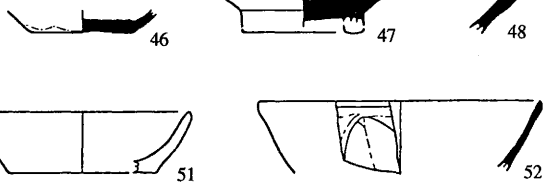


第166図 中・近世の遺物 (1)

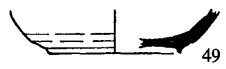
溝25 (39~45)



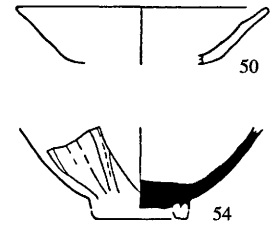
溝27 (46~48)



溝29 (49)



溝30 (50~54)



F区検出面 (55)

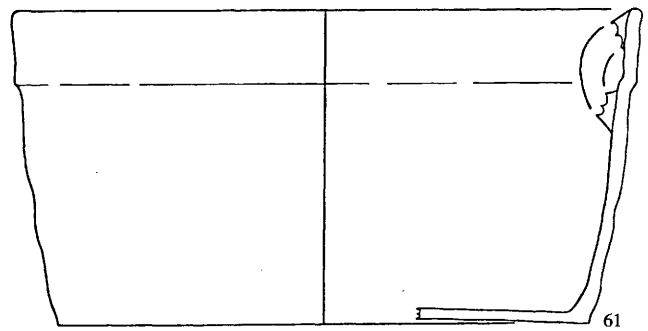
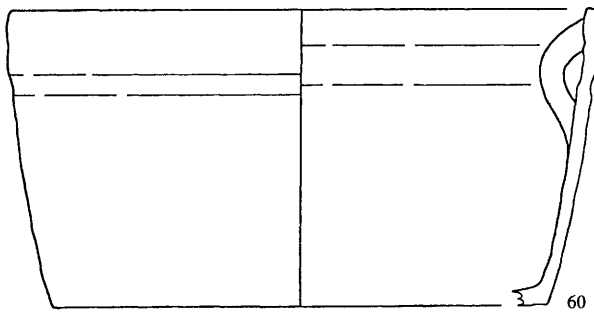
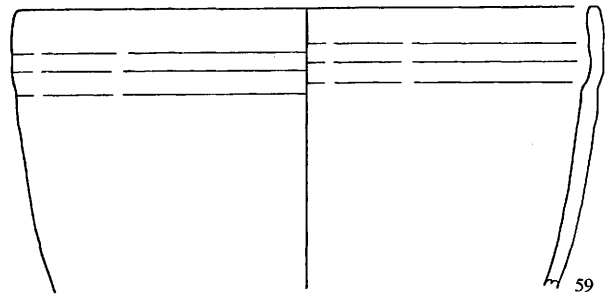
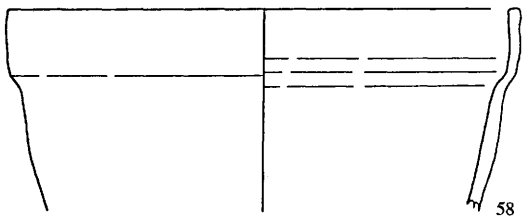


H区検出面 (57)



一ツ家遺跡土器・陶磁器

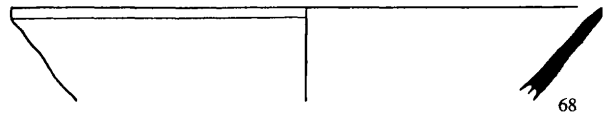
豎3 (58~61)



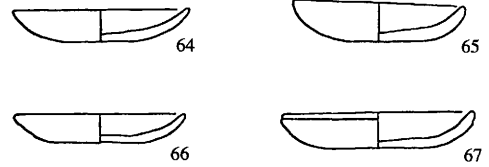
豎5 (62・63)



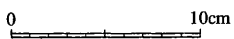
土14 (68)



土坑墓1 (64~67)

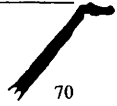


土44 (69)

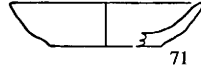


第167図 中・近世の遺物 (2)

±56 (70)



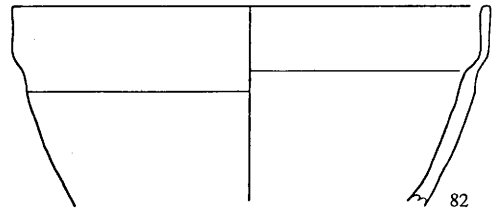
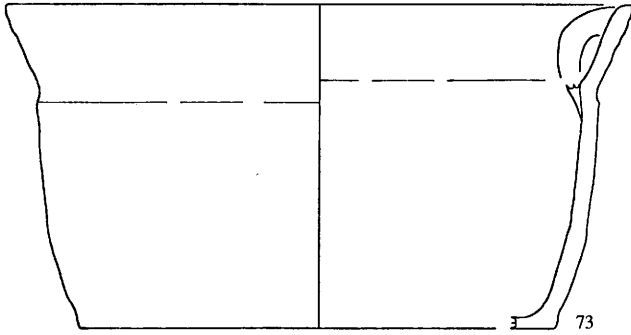
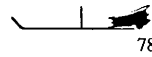
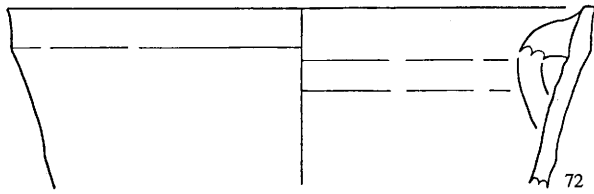
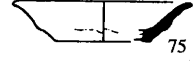
±372 (71~73)



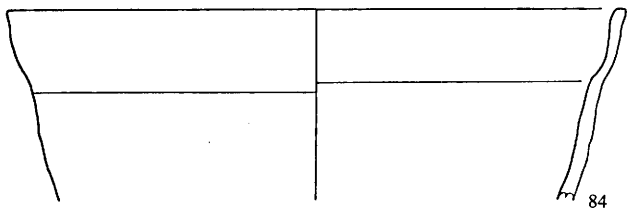
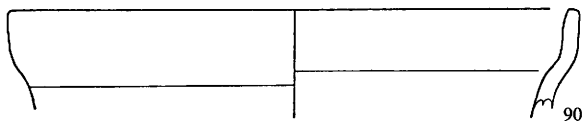
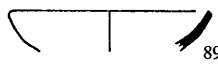
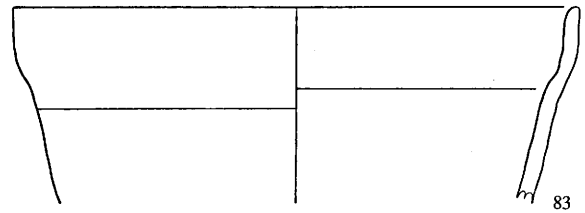
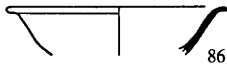
溝1 (74)



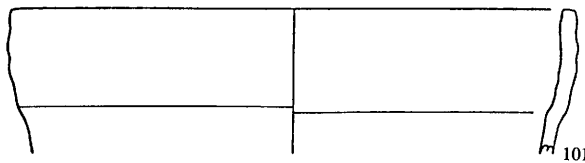
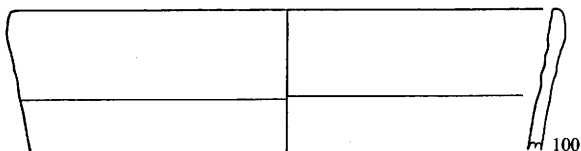
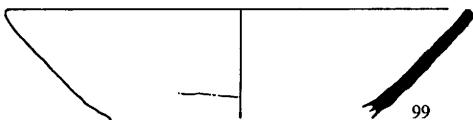
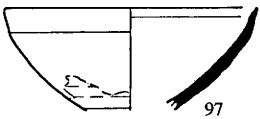
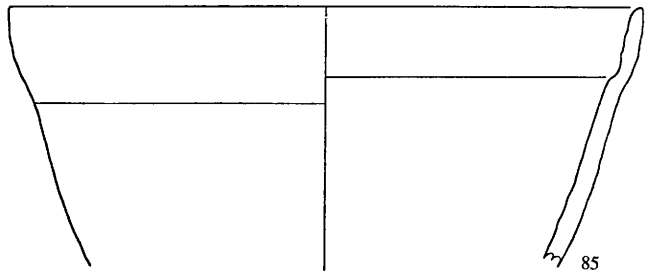
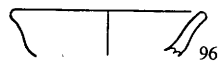
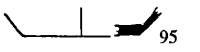
溝3 (75~85)



溝4 (86~90)



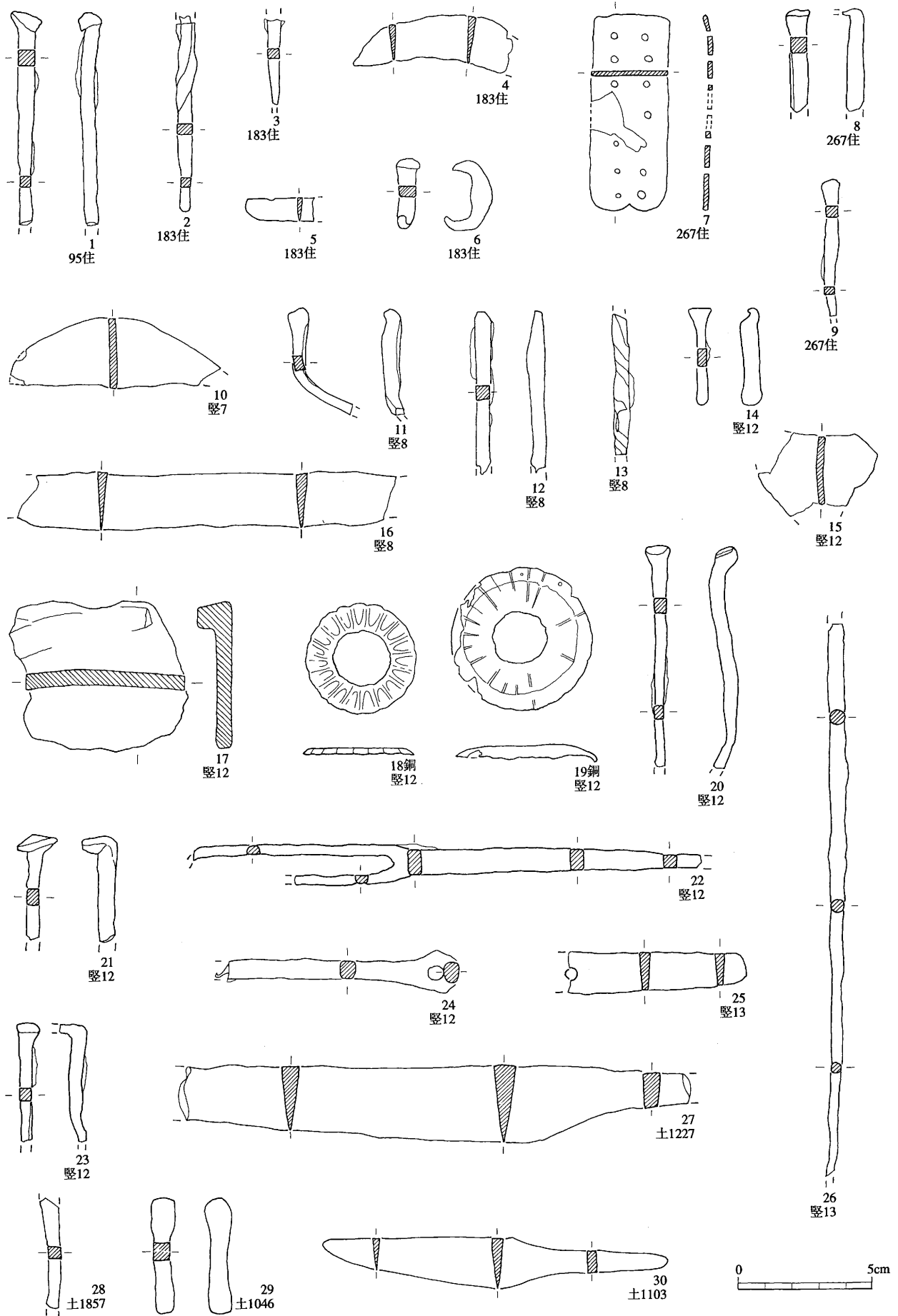
溝5 (91~101)



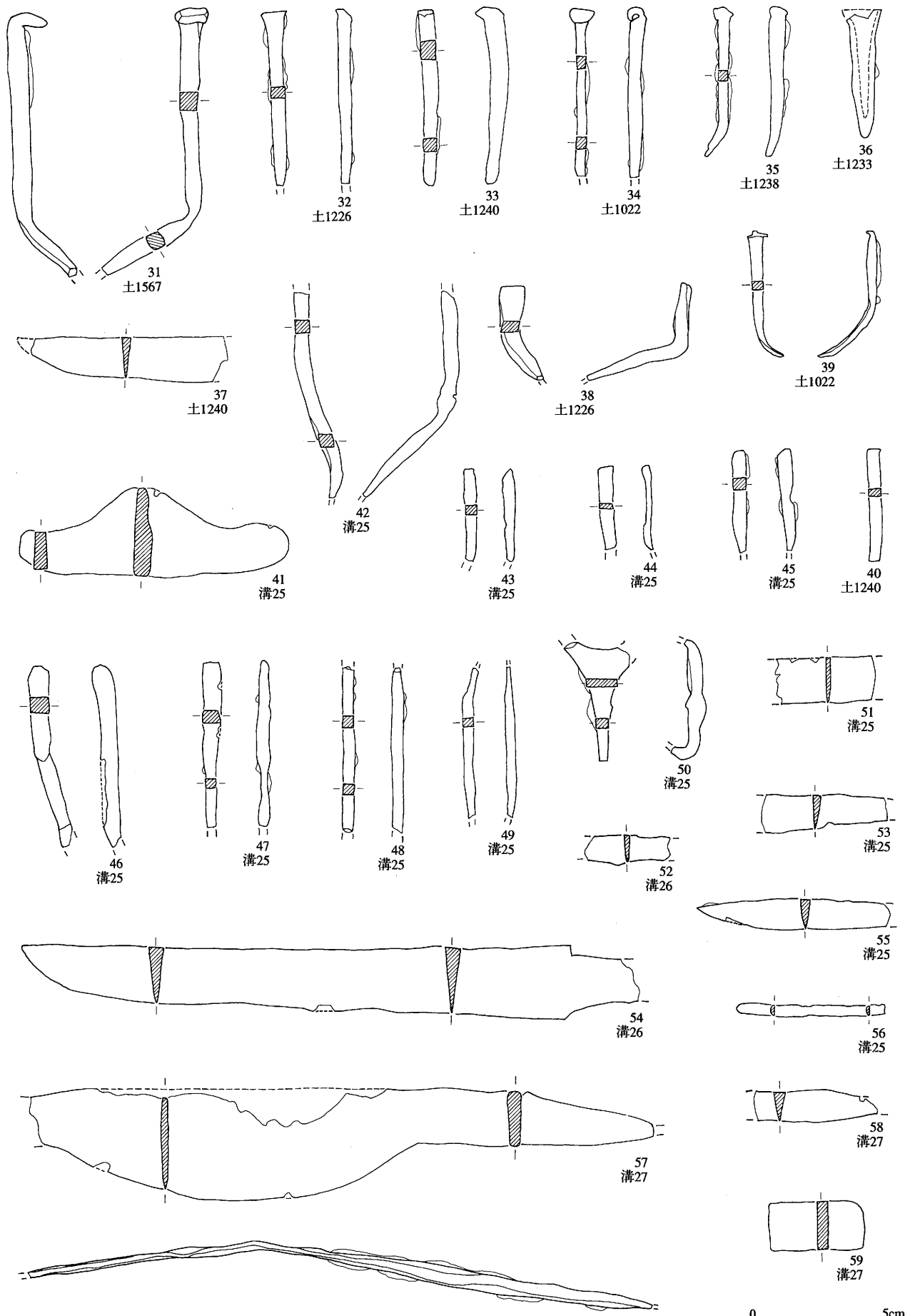
0 10cm

第168図 中・近世の遺物 (3)

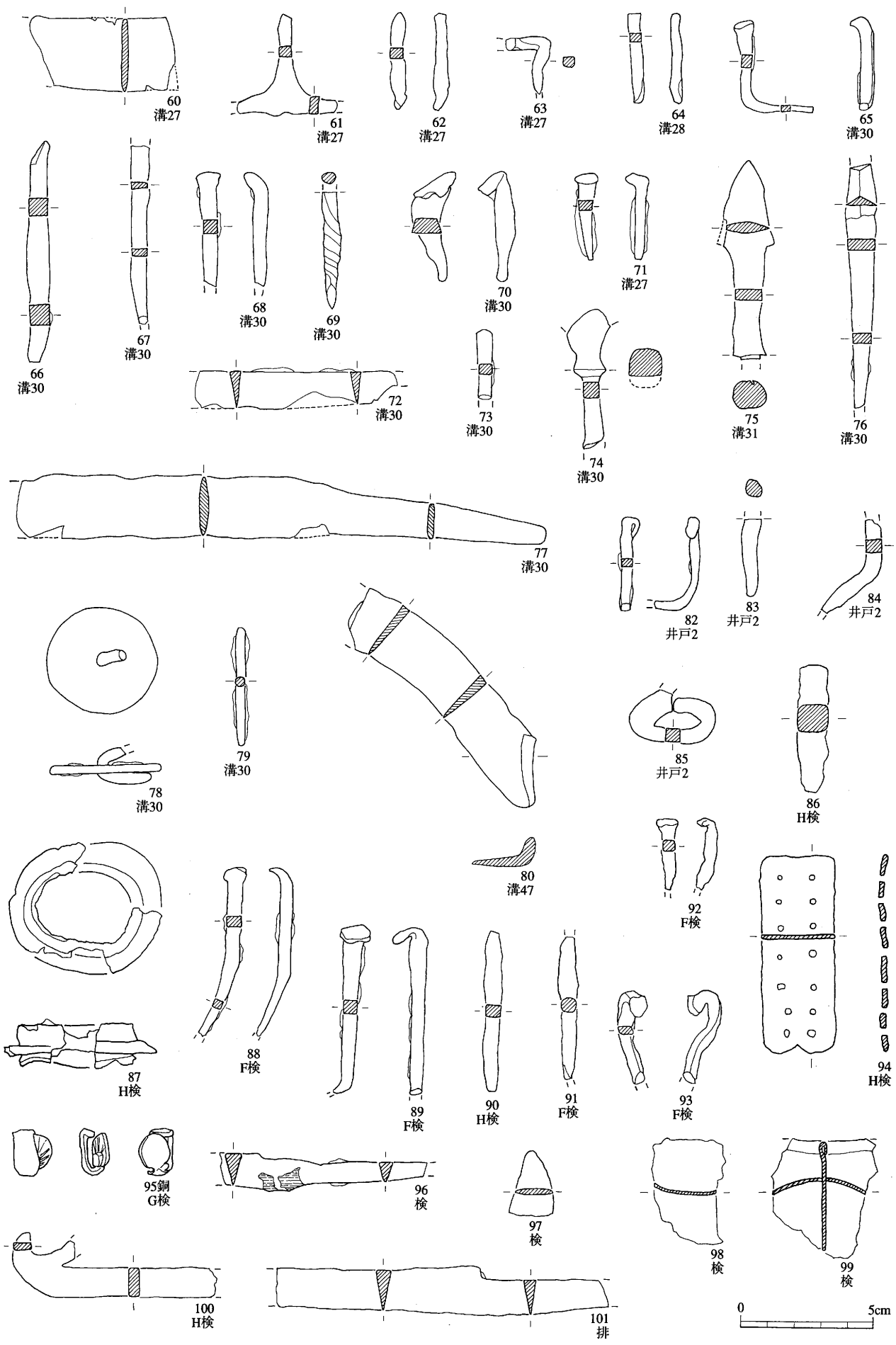
小池遺跡鉄器・銅製品



第169図 中・近世の遺物 (4)

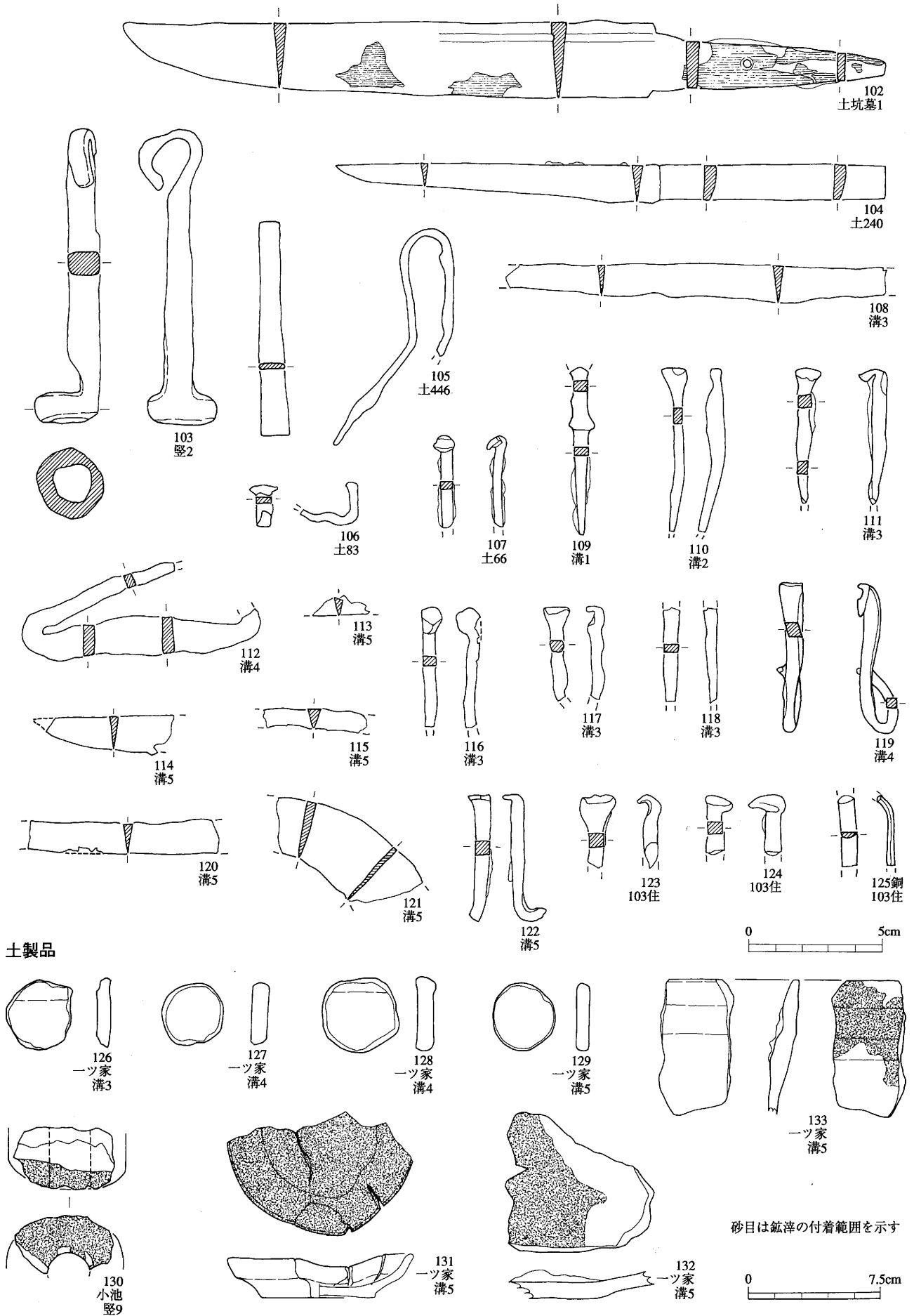


第170図 中・近世の遺物 (5)



第171図 中・近世の遺物 (6)

一ツ家遺跡鉄器・銅製品



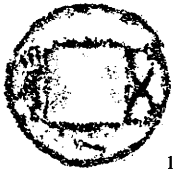
第172図 中・近世の遺物 (7)



小池 溝25

小池 溝30

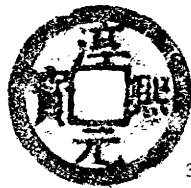
一ツ家 土1



1



2

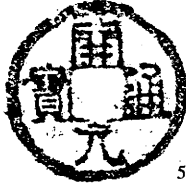


3

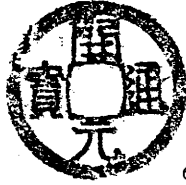
一ツ家 埋納銭



4



5



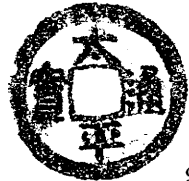
6



7



8



9



10



11



12



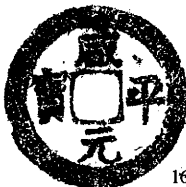
13



14



15



16



17



18



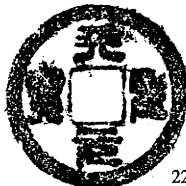
19



20



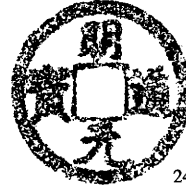
21



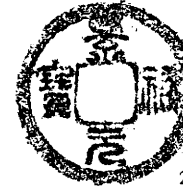
22



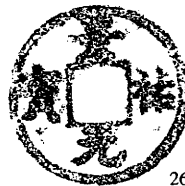
23



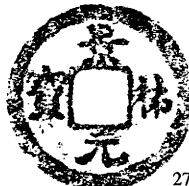
24



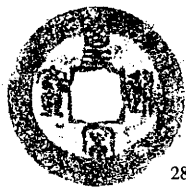
25



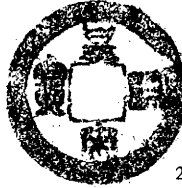
26



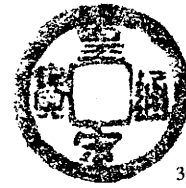
27



28



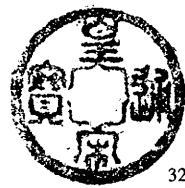
29



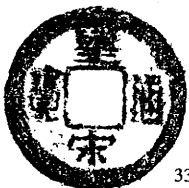
30



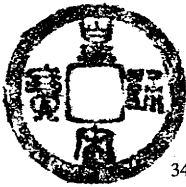
31



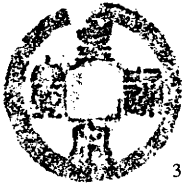
32



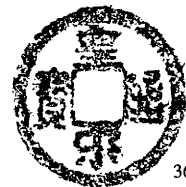
33



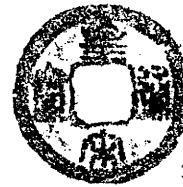
34



35



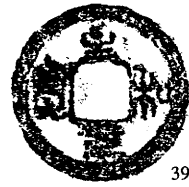
36



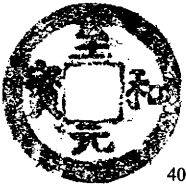
37



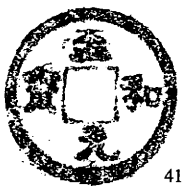
38



39



40



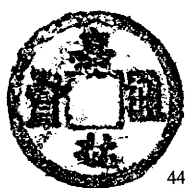
41



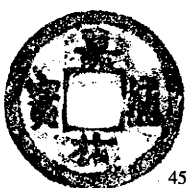
42



43

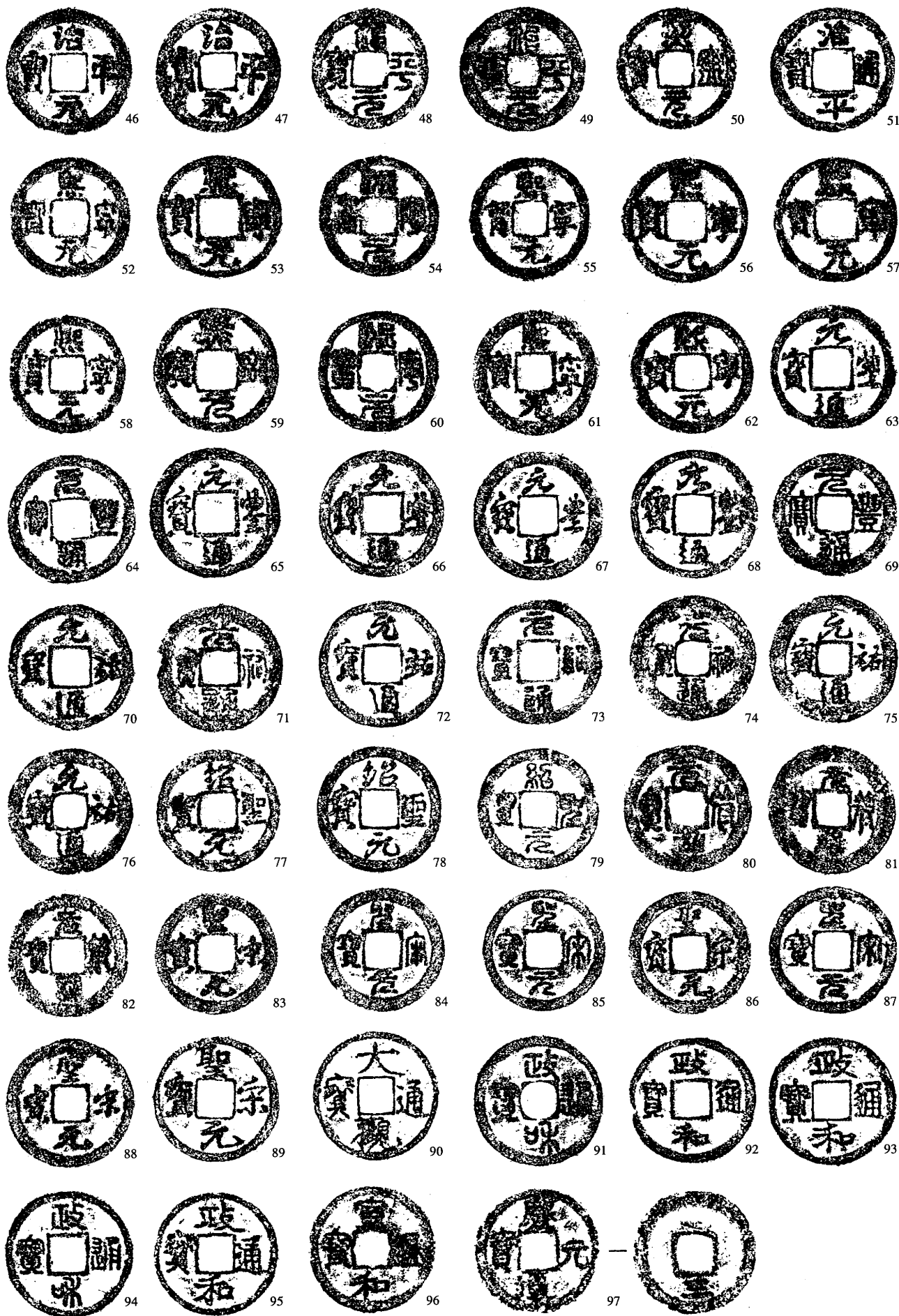


44

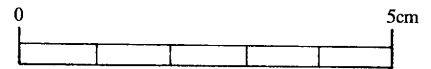
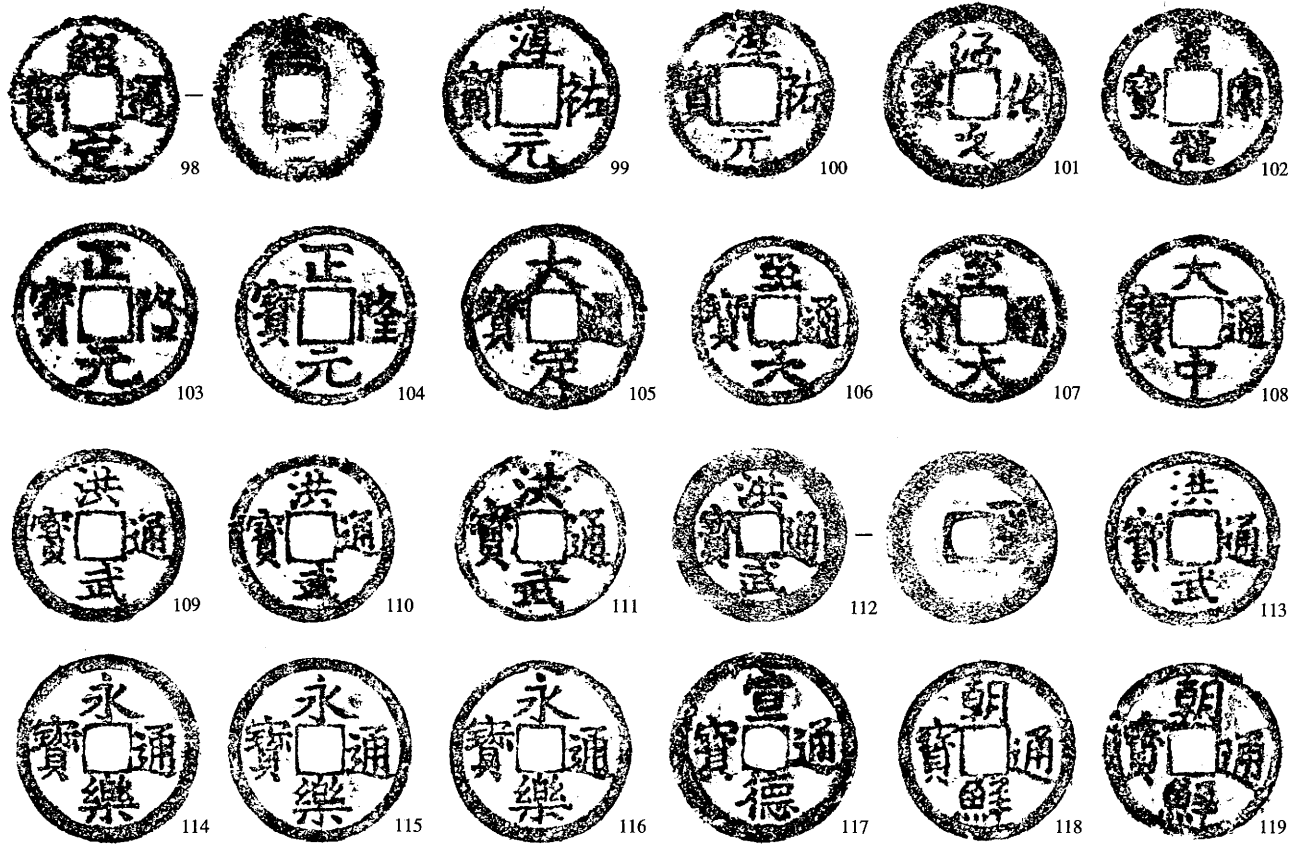


45

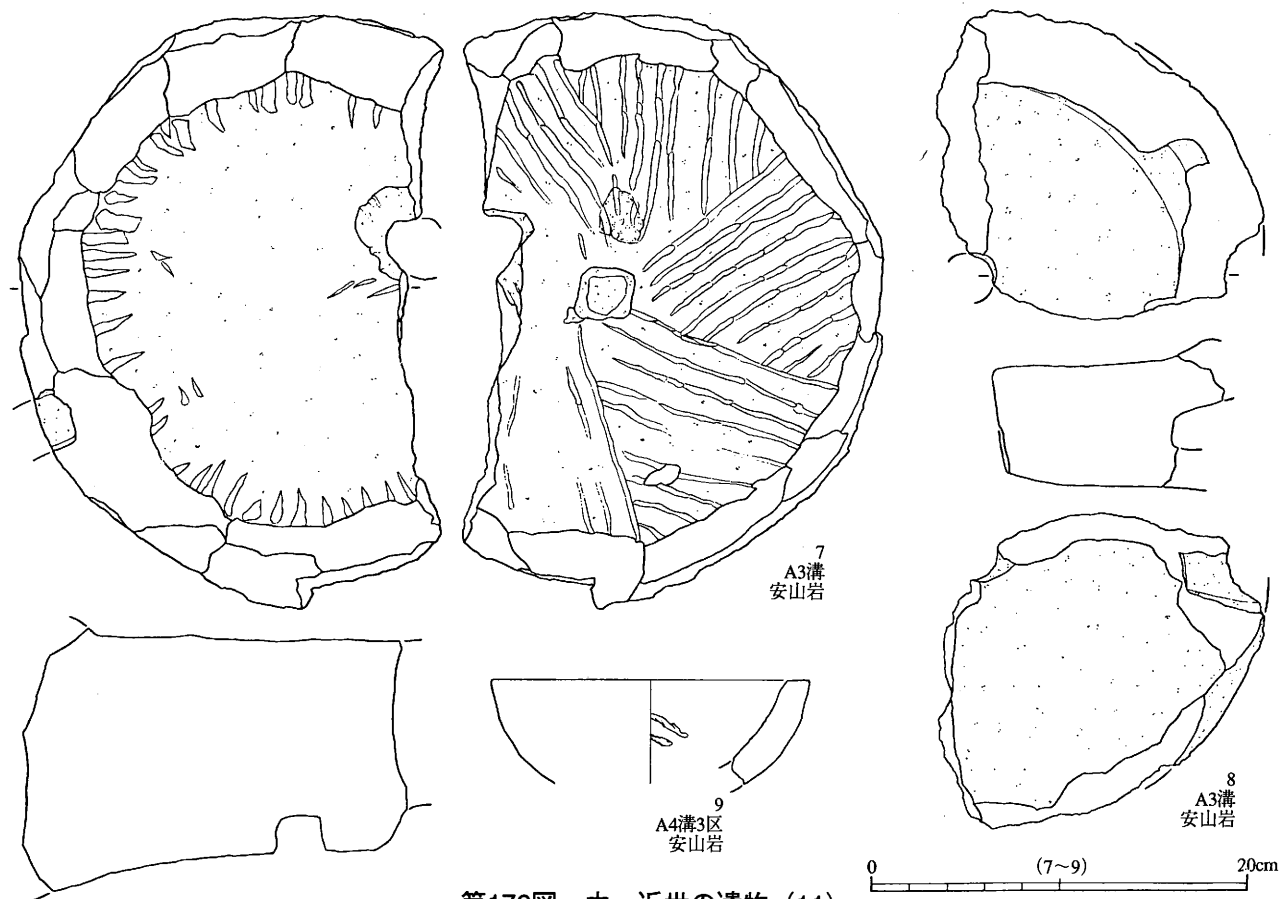
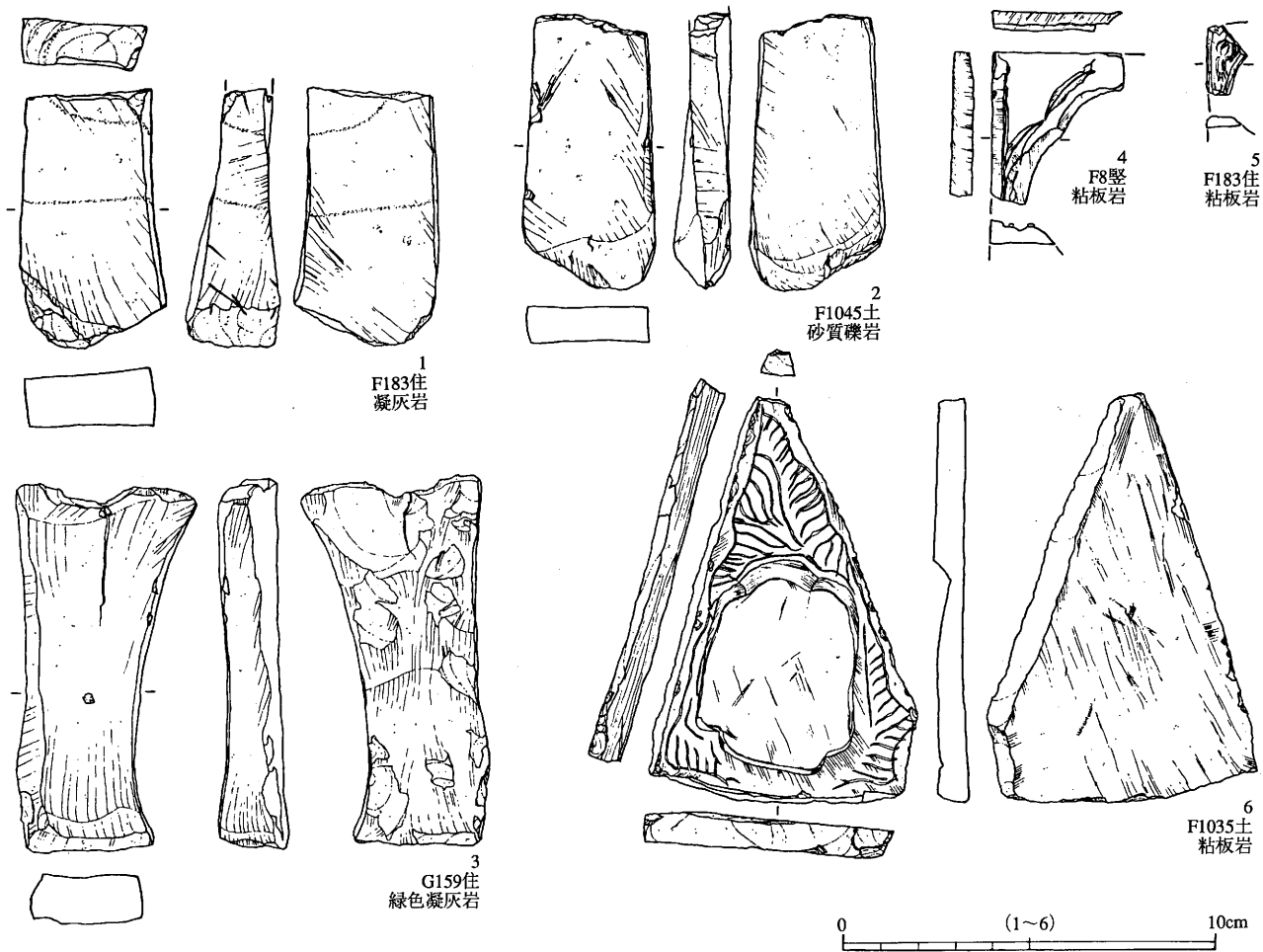
第173図 中・近世の遺物 (8)



第174図 中・近世の遺物 (9)



第175図 中・近世の遺物 (10)



第176図 中・近世の遺物 (11)

砥石状石器 (1~3)、硯形石器 (4~6)、白形石器 (7・8) 鉢形石器 (9)

## Ⅶ まとめ

### 1. 縄紋時代の集落について

本項では小池・一ツ家両遺跡における縄紋時代集落の動きについて、竪穴住居址を中心として時期毎に概観し、調査のまとめとしたい。なお両遺跡は塩沢川と舟沢川に挟まれた狭長な領域に立地する集落址である。両集落の間には当時何ら地形的障害は認められず、同一地形面で隣り合って位置しており、時期的にも併行関係にある。当然密接な関わりをもって居住活動が推移したことが予想される。また八ヶ岳西南麓の集落遺跡群がそうであるように、塩沢川右岸の台地上という観点から上流の雨堀遺跡、一ツ家遺跡に南接するエリ穴遺跡などの中期諸集落跡とも関わり、一領域を形成していた可能性も考えなくてはならない。従ってここでは小池・一ツ家遺跡を軸に据えつつ、周辺諸集落の動向についても併せてみてゆきたい。

なお集落の全体像に迫るには調査範囲があまりに狭く、何かと制約があったものの調査が不十分となつてしまい、加えて報告・考察も不完全となった点を担当者として深く反省し、今後の課題としたい。

#### ①前期～中期1段階（梨久保式Ⅰ段階）

小池・一ツ家の地が居住の場としてはまだ積極的に利用されない段階で、前期前葉の土器が一ツ家遺跡のB区から、前期後葉の土坑1基が小池遺跡F区から、そして中期1段階の遺物が次段階の遺構に混入してごく少量得られているにすぎない。塩沢川右岸領域での前期の居住域の一つは一ツ家遺跡東方700mにある清心遺跡に求められ、諸磯a・b式期の住居址2棟が調査されている（松本市文化財調査報告No.54）。

#### ②中期2段階（梨久保式Ⅱ段階）

一ツ家で居住活動が開始される。しかもb段階からc段階にかけて急速に集落が拡大し、東西に長く広範囲に12棟以上の住居址、土坑が検出された。その配置は調査部分から類推すると台地南縁（旧舟沢川?沿い）に沿って展開する傾向が強い。ただし台地北縁部（舟沢川沿い）の様相が不明であり、またA区とB区の間が空隙になる可能性も残され、集落全体の形態はいまひとつ捉えにくい。

この段階の住居址形態は直径3～5m程度の円形プランで中央に埋甕炉を設け、4～5本柱となる。遺構間での際立った差異はない。炉をめぐっては次段階も含めて廃絶時に炉体土器を抜き去るものがしばしばみられるが、炉の造り替えの場合は旧炉体は残される。住居廃絶時に限って再使用可能なものが抜き取られるのか、あるいは一ツ家101住での抜去した土器を床上に置き去りにし遺構を埋め立てる例に示されるように、何かそれ以外の精神的背景があるのか検討を要しよう。

塩沢川右岸におけるこの段階の集落址は1,900m上流の雨堀遺跡にも存在が確認されている。住居址の検出こそ1棟にとどまるものの、土坑群、捨て場から多量の土器が得られており、比較的大きな集落だったと推定される（松本市文化財調査報告No.20・23）。その時期的分布もb・c段階を主体とし、一ツ家遺跡と同時期である。両集落間は視認できる位置にあり、狭長な塩沢川右岸領域の東西に位置する相互に密接な関係をもって営まれた拠点集落として捉えることが可能である。

#### ③中期3段階（貉沢式期）

前段階から住居址数を大幅に減じ、一ツ家、小池それぞれに小集落が構えられるようである。その構造は調査範囲からだけでは断定できないが、小池の場合F区中央部を広場空間とし、南北縁に住居址を配した環状の形態とも捉えられる。一ツ家の場合も東寄りに位置する66・74住と西寄りに位置する103住との間を広場とみなせなくはない。連続する次段階の遺構の分布を重ねるとより鮮明である。

集落を構成する住居址は前段階と同様、円形プラン、4～5本柱を基本とするが、炉は埋甕炉に加えて小

型・方形の石組炉が出現している（一ツ家103住・小池208住）。炉体の素材が土器から石材へ転換された結果であろう。小池208住では屋内に袋状の貯蔵穴が設けられ、一ツ家66住や小池265住のように掘り込みの著しく深い住居址がみられるのも本段階前後の特色である。

この段階の集落址は今のところ塩沢川右岸のほかの調査遺跡には認められていない。

#### ④中期4段階（新道式期）

3段階と傾向は変わらず、小池、一ツ家それぞれに1～2棟を検出したにすぎない。個々の住居址は円形プラン、4～5本柱を踏襲し、炉は小型・方形の石組炉が定着、埋甕炉がみられなくなる。小池215住ではミニチュア土器、顔面把手付の深鉢が出土している。

ほかの遺跡としてはエリ穴遺跡で前段階から本段階に3棟の住居が営まれ、雨堀遺跡でも2棟が確認されている。これらの調査遺跡での所見をみる限りにおいて2段階における拠点的な二集落から3・4段階の小規模集落の散在へと領域内で集落形態や分布が変化したように受け取られる。

#### ⑤中期5段階（藤内Ⅰ式期）

小池で住居址1棟が検出され、試掘トレンチ内で土器が出土しているに過ぎず、小規模な集落と考えられる。塩沢川右岸領域のほかの遺跡ではこの段階の遺構は確認されない、空白に近い状況を呈している。

#### ⑥中期6段階（藤内Ⅱ式期）

小池で3棟の住居址が調査されている。本段階も一ツ家では遺構がみられない。住居形態は5～8本主柱の円形プランで、198住など床面中央部に設けられる石組炉は前段階に比較して大型化、使用石材も増える多角形状を呈するようになる。102住では次段階につながる小礫を用いた石組炉で、一部石材の代わりに土器片を用いている。198住では緑色凝灰岩製の大型大珠が出土している。

この段階の住居址は雨堀遺跡でも1棟が確認されている。3段階から本段階までこの領域内では拠点的といえる集落址は今のところ知られていない。

#### ⑦中期7段階（井戸尻Ⅰ式期）

小池で6棟以上の住居が営まれ、再び集落が拡大する傾向にある。しかし一ツ家では依然として住居址が見当たらない。遺構の配置はH区付近を広場空間とし、その北～南縁に住居が配される状況が看取される。

住居形態は大型・円形のものが目立ち、柱配置は6本内外である。床中央付近に石組炉が設けられるが、その形態は小礫を多数円ないし隅丸形状に配し、平面規模は若干拡大、掘り込みも深くなるようである。いずれの住居址も覆土中に多量の土器が廃棄されるのが特徴で、また118住ではベンガラを納めたものなどミニチュア土器3点、遺構掘り方の肩から有頭石棒の上半部が出土している。

この段階の住居址はほかにエリ穴、雨堀遺跡で各1棟が確認されるが、大規模な集落は見当たらない。

#### ⑧中期8段階（井戸尻Ⅲ式期）

小池遺跡で3棟、一ツ家遺跡で1棟新しい段階の住居址が検出されている。集落構造は不鮮明である。住居形態は前段階と規模、主柱穴など大差はない。炉も同様に小礫を円形に囲むものが床中央から若干奥寄りに配されるが、201住の炉はやや偏平な円ないし亜円礫の平坦面を上に向けて配した形態をなし、次段階にかけて盛行する形態と捉えられる。

遺物は前段階と同様、覆土中に多量の土器が廃棄される状況が窺える。

塩沢川右岸のほかの遺跡では今のところ本段階の遺構は確認されていない。

#### ⑨中期9段階（唐草紋Ⅰ段階）

遺構数は著しく少なくなり、両遺跡で各1棟の住居址、若干の土坑が検出されたのみである。集落の構造は判然としない。なお雨堀遺跡でも1棟の住居址が確認されているが、各遺跡ともにごく小規模な集落であったものと考えられ、拠点と呼ぶにふさわしい集落址は塩沢川右岸領域では今のところ見当たらない。

#### ⑩中期10段階（唐草紋Ⅱ段階）

次段階にかけて集落が急速に拡大、ピークに達する。本段階の住居址は塩沢川右岸の各遺跡で見られるが、その疎密には遺跡間で差異がある。住居址の検出数は小池12棟、一ツ家5棟、エリ穴4棟、雨堀6棟を数える。とりわけ小池遺跡がほかを抜きんでて規模の大きな集落ということができる。

この段階の遺構は住居形態、土器様相から二分され、古段階から新段階にかけて住居址数に拡大傾向が窺える。まず住居形態についてみると古段階は円ないし楕円形プラン、床面上奥壁寄りに長方形の大型化した石組炉が設けられる（小池116・172住、一ツ家81住など）。炉の掘り込みは浅く、石材も小振りのものが用いられる。入口側一辺のみ石材の平面を上に向ける場合が多く、焚口が意識される。

新段階は円形に加え隅丸方形ないし多角形状を呈するものが現れる。炉は大型化が著しく、挿鉢状の深い掘り方、大型の平石を傾斜させ壁に用いた方形の石組炉を特徴とする（小池134・173住など）。大半の住居が廃絶時に石材を抜き取られ、戸外に持ち出されるか炉内あるいは床上に廃棄されるのもこの段階以降にみられる現象である。石材の再利用としてではなくむしろ機能を停止した炉に対する意図的な破壊行為の結果と受け取られよう。もう1点新段階の大半の住居址から検出される屋内施設に出入口部の埋甕がある。そのほとんどは深鉢を正位に埋設するもので、逆位はわずかである。土器は底板ないしは胴下部を欠くものと底部を有するものの二者があり、在地の唐草紋系土器を用いている。時折蓋石が載せられる。これらの傾向は塩沢川右岸領域の各遺跡とも共通している。

次に各集落の状況みる。小池遺跡の場合H区を広場空間にして南に開口する馬蹄形集落が想定され、住居址群と広場空間の間に土坑が集中する傾向を窺うことができる。古段階は4棟、新段階が8棟ある。住居の出入口はすべて南側である。G区の134住のみ住居址群から大きく北に離れて単独で存在し、炉の石材がそのまま残される、出入口部東側の壁が張り出し、石柱ないしは石壇状の施設が設けられている点で様相を異にし、祭祀などの特別な性格を帯びた遺構であったものと解釈される。そのほか特殊なものとして117・202住ではミニチュア土器や土偶が出土し、埋甕を3基有している。187住ではピット内から釣手土器が出土し埋甕は逆位に埋設している、173住では炉石が完存し、埋甕も2基みられるといった点が指摘できる。F区で検出された2基の方形柱穴列は時期決定に苦しむが、おそらく本段階に営まれたものとみている。

一ツ家遺跡では集落形態は台地南辺に沿って帯状に住居址が連なる傾向がある。古段階1棟、新段階4棟を数え、各遺構とも出入口は南側に設けられる。古段階の81住は長方形石組炉と奥壁の間の柱穴脇に土鈴の入った小型の深鉢が置かれていた。

新段階の集落では住居址群の中央にある87住が突出して大型で、出入口部の埋甕も大型の把手付鉢を用いる点で珍しい。ほかの遺跡を含めても規模的には最大であり、中心的な役割を担ったのであろうか。東部にある57住は石材を斜めに配する点ではほかと共通するがやや小振りの石材を用いた円形の炉であり、方形炉中心の状況下、円形を志向する点で異質である。石材も抜去されず、埋甕は逆位埋設である。

このように両集落において埋甕のあり方、炉のあり方、出土遺物など、標準的なものとそうでないものの相違が比較的明確に読み取られ、集落を構成する各住居址の性格の差を物語っている。

#### ⑪中期11段階（唐草紋Ⅲ段階）

小池、エリ穴遺跡では集落が縮小し、ほとんど住居址がみられない。雨堀遺跡でもその数を減じている。逆に一ツ家遺跡では本段階で集落が最大規模になり、17棟以上の住居址が検出されている。集落の形態はやはり台地南縁に沿って帯状に住居址、土坑が展開するが、A区北側のトレンチ内からも多数の遺構が検出されており、台地中央部を広場空間とした巨大な馬蹄形集落となる可能性も高い。

住居址形態は隅丸方形ないしはホームベース形を呈するものが一般的で、隅寄りに柱穴を設けた5本柱となるものが多い。炉は奥壁寄りにあり、12新段階と同様、挿鉢状に掘り込まれた方形の大型石組炉が設け

られる。またほとんど例外なく廃絶時に石材が抜き去られる。南向きに設けられた出入口部の埋甕は大半が正位に深鉢を埋設し、土器は底部を有するものとそうでないものがみられる。逆位埋設は65・83・99住の3例があり、ともに底部を欠いた深鉢を用いる。99住では曾利式系の土器を用いている。ほかに特異な埋甕として入口側からみて炉の右側ないし左側の床面に底部穿孔を施した小型の深鉢を逆位埋設する例が65・93住でみられた。なお雨堀遺跡でも出入口部の埋甕は正位に埋設される傾向にある。

遺物は本段階から在地の唐草紋系統の土器に加え、加曾利E式など縄紋系の土器群が増してくる。特殊な遺物は4・30住から土偶が、93住からは土鈴が出土している。

#### ⑫中期12段階（唐草紋Ⅳ段階）

両遺跡ともに住居址数を急速に減じ、2～3棟程度の構成となる。特に一ツ家遺跡で集落の縮小が著しい。住居形態は基本的には前段階と変わらず、奥壁寄りに配された石組炉は例外なく石材が抜き取られている。出入口は南側に設けられる。埋甕は正位埋設がほとんどで、縄紋系の土器を用いる場合がある。小池206住、一ツ家63住では出入口部以外にも埋甕があり、前者は炉の左側、後者は奥壁下に設けられている。出入口部のものとは性格が異なるのであろう。

特殊な遺物としては小池206住から土偶、土鈴が出土している。

本段階の住居址はほかに雨堀遺跡で2棟が調査され、土偶などが出土している。塩沢川右岸領域内の各遺跡で一致して集落の縮小傾向が窺える。

#### ⑬中期13段階（唐草紋Ⅴ段階）

一ツ家遺跡では前段階と同様、集落の縮小期である。小池遺跡では再び住居址数が増加傾向にあり、7棟が検出された。10段階以来のH区を広場空間とする馬蹄形構造が維持されているように見受けられる。前段階に比べてやや小型の円形プランが多い。炉は114住や224住など石材を抜き取らないものが存在する。形態的にはやや小型化し、大型の平石を4枚方形に立てて壁とする深いものである。埋甕は3棟で検出され、深鉢を正位に埋設、蓋石の伴うものがある。

一ツ家107住もやや小型の方形を呈し、石組炉も小型化している。埋甕も小池の例と同様深鉢を正位に埋設する。雨堀遺跡も炉形態など共通する。

なお本段階をもって小池・一ツ家・雨堀の各集落は主たる居住活動を停止し住居址はみられなくなる。

#### ⑭後・晩期

小池遺跡ではH区に初頭～前葉の土坑と遺物の散布が、一ツ家遺跡でも初頭の土坑が若干みられるものの住居址は確認されず、集落は終焉を迎える。一方、エリ穴の台地上では後期初頭の遺構・遺物はほとんどみられないものの、前葉以後は居住活動が本格化し、以後晩期中葉に至るまで居住活動が継続される。

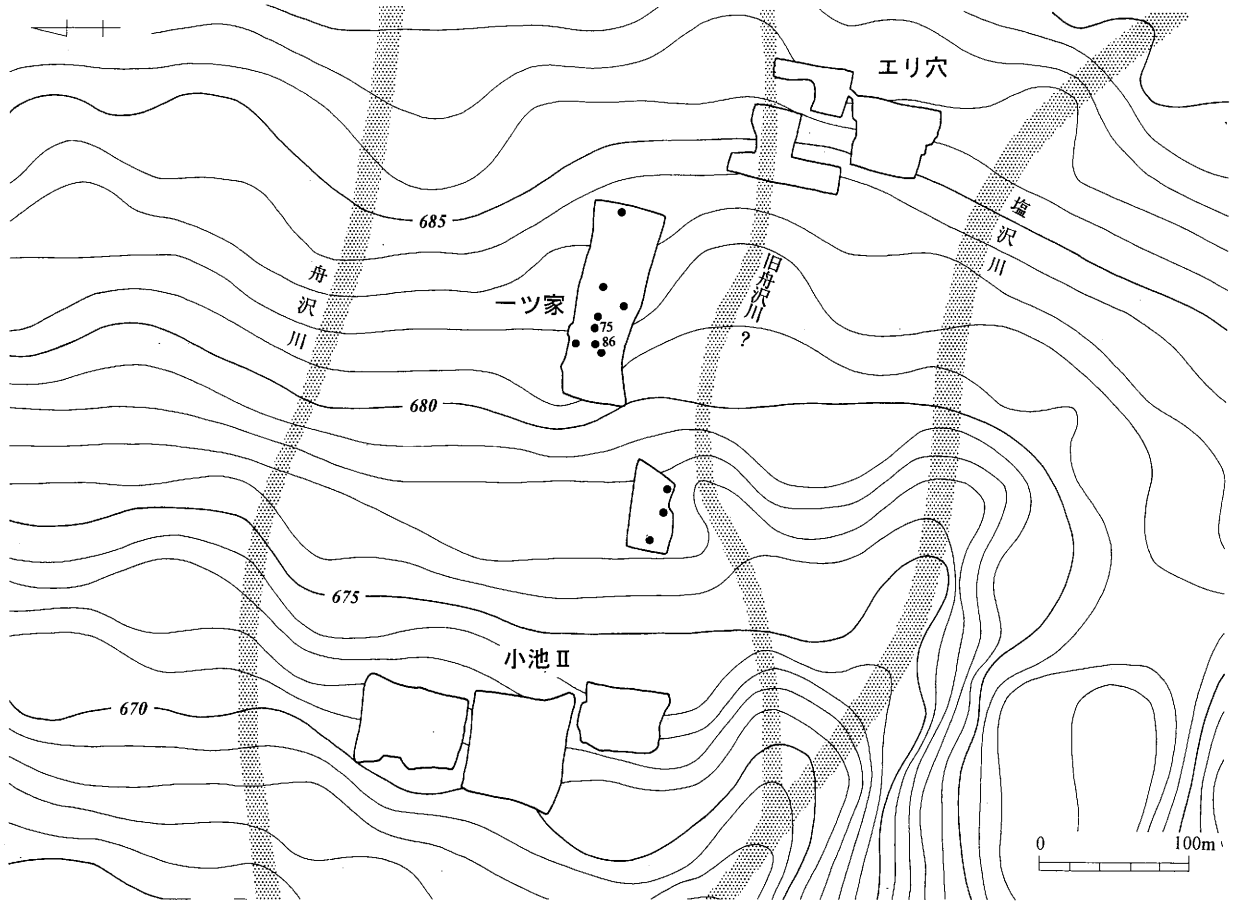
塩沢川右岸領域では後・晩期の集落址はいまのところエリ穴遺跡以外に知られていない。おそらく後期以後の活動拠点としてこの地に集約されるものと考えられるが、後期末～晩期中葉の2,500点を超える土製耳飾りの出土量に象徴されるように、それは塩沢川右岸の領域を超えた、より広域の集団の結集を意味するものとも考えなくてはならないであろう。少なくとも今現在、エリ穴遺跡に匹敵して長期に継続する後・晩期の集落址はこの周辺では見出されていないこともそのことを示唆していよう。

このように現在までの調査結果から小池・一ツ家遺跡をはじめ塩沢川右岸領域における中期の集落の動きを読み取ると、中期2段階、11・12段階に高揚があり、拠点的ともいえる大集落が形成されるが、それ以外の時期、とりわけ3～10段階については小規模集落が散在する傾向をおぼろげながら把握することができた。

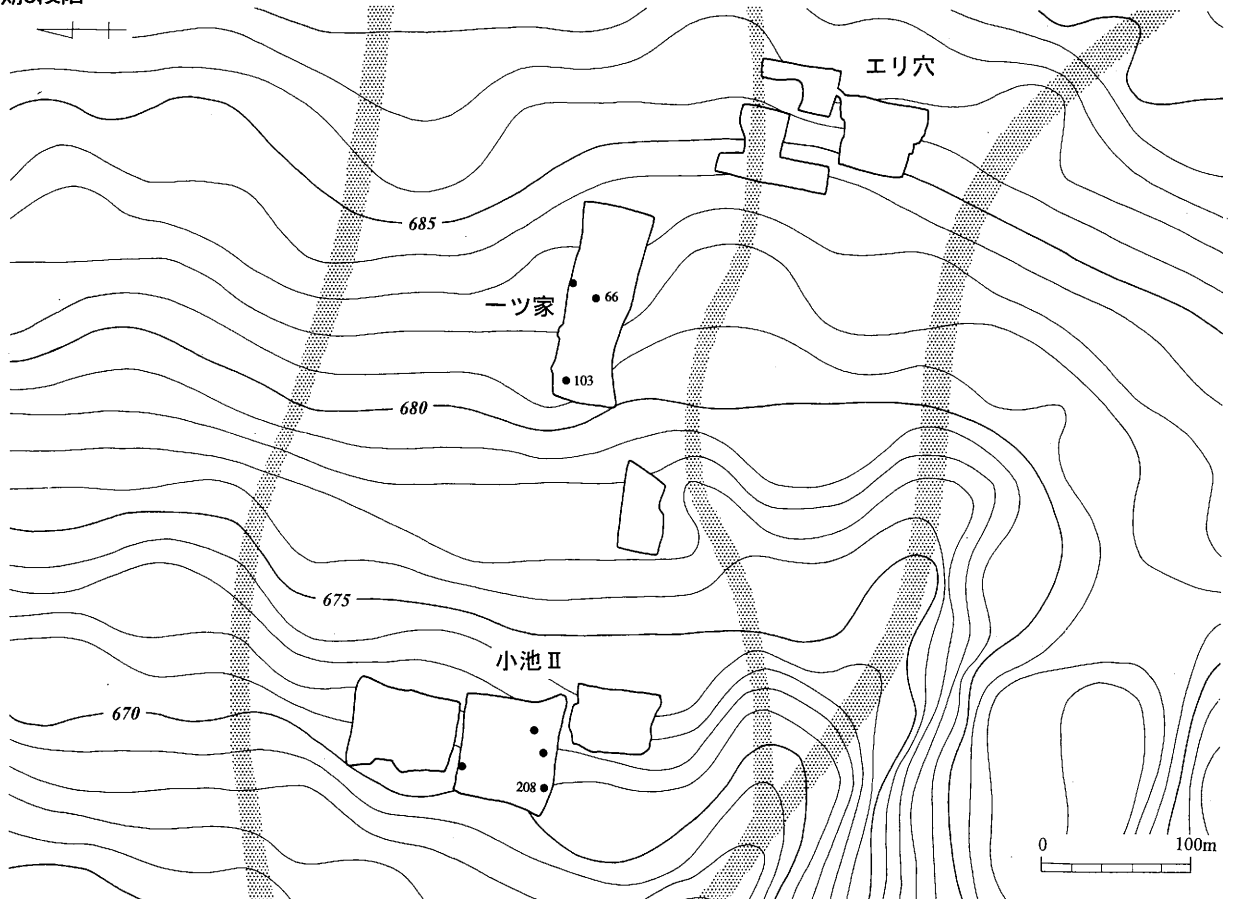
この散在期の状況は不明な点も多く、あるいは未知の大集落址が存在している可能性も残され、今後の検討課題となる。また各段階内でのより仔細な集落の動きや他地域の事例との比較検討も今回できなかった。これについてはあらためて別の機会に捉え直しを行ってみたい。



中期2段階

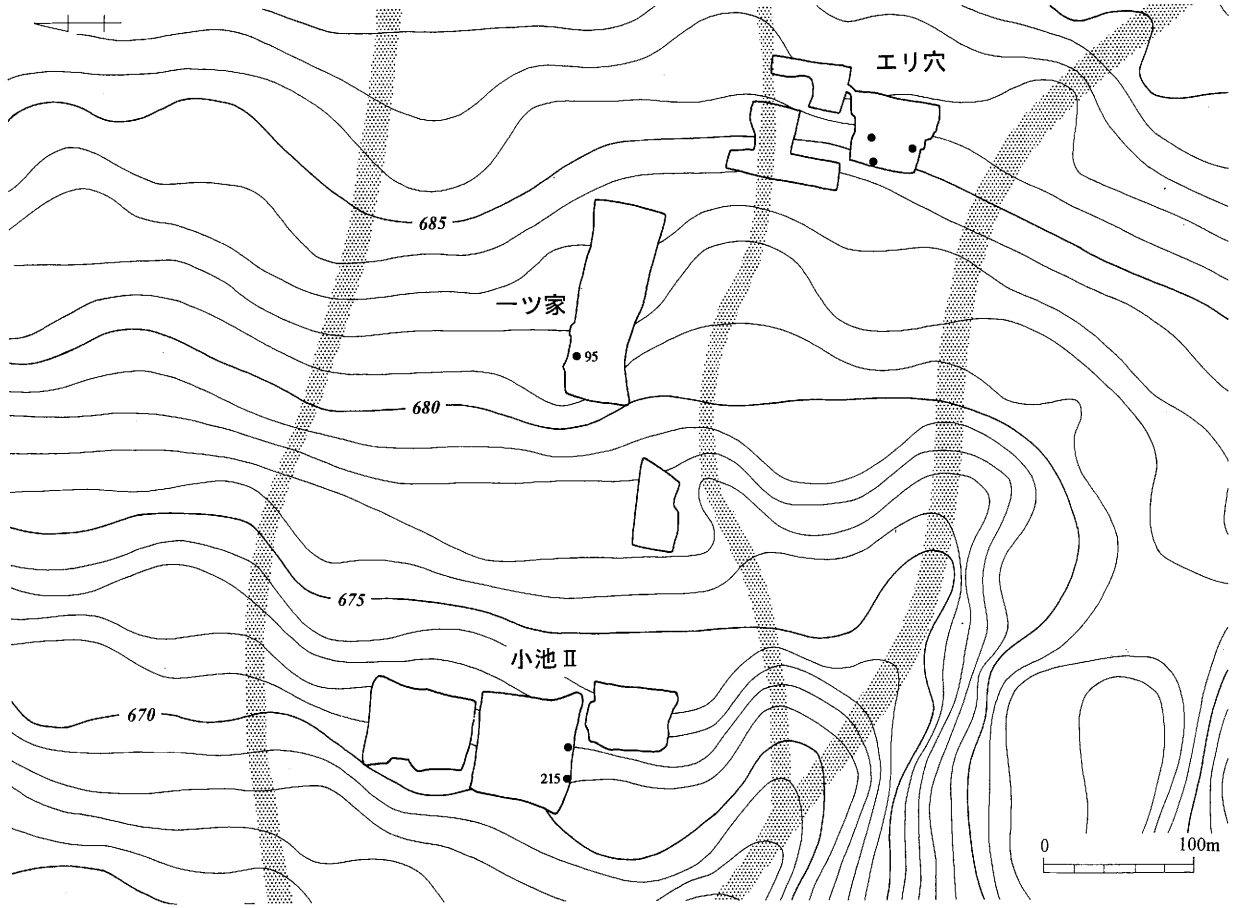


中期3段階

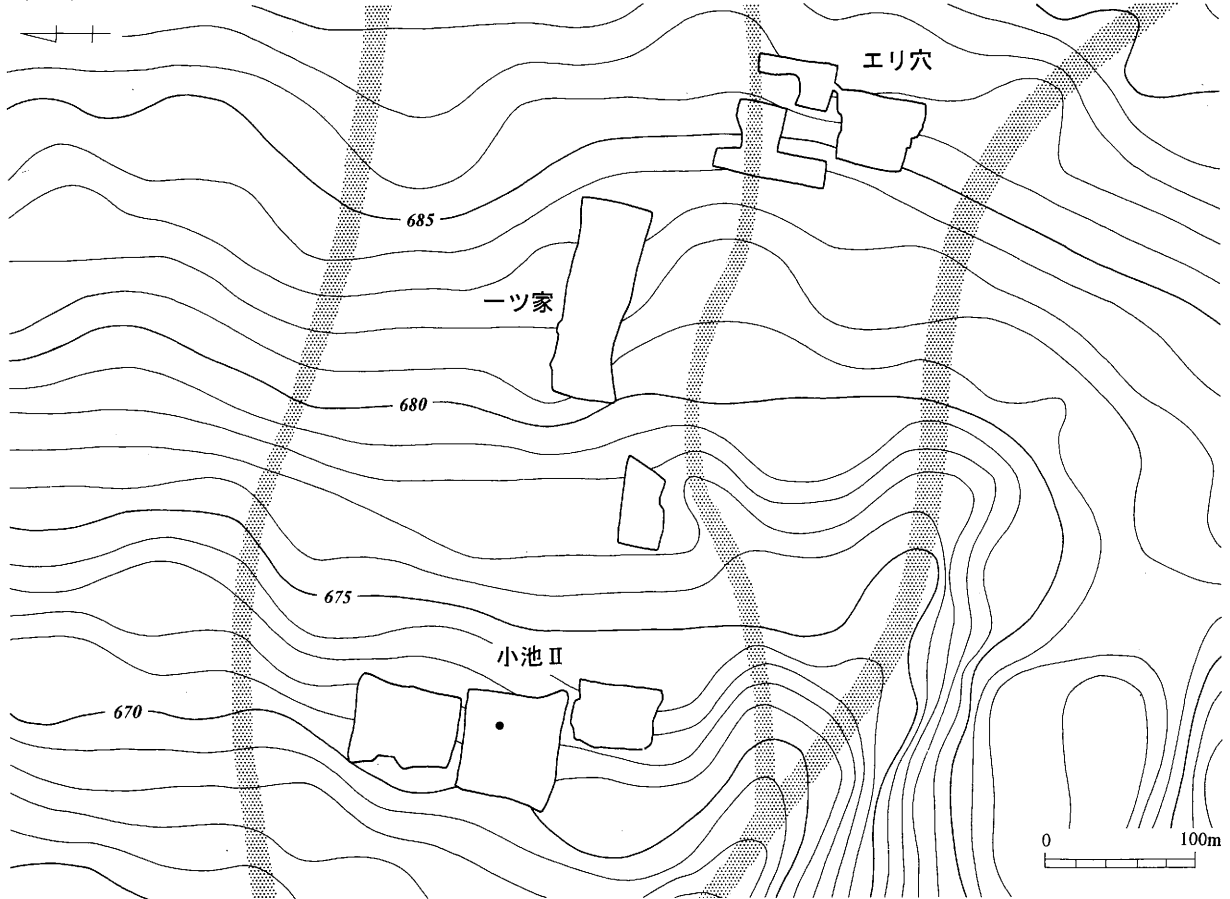


第177図 縄紋時代集落の変遷 (1)

中期4段階

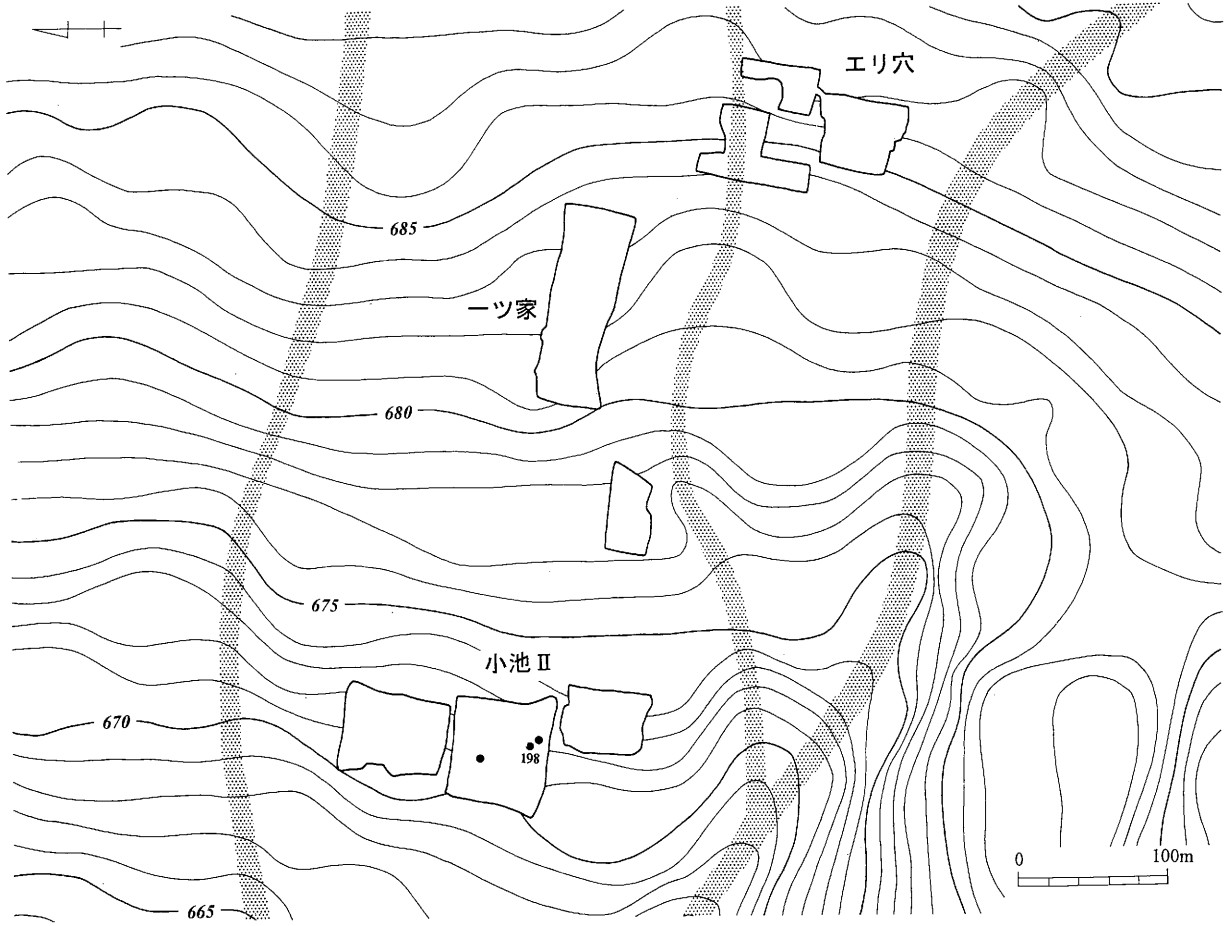


中期5段階

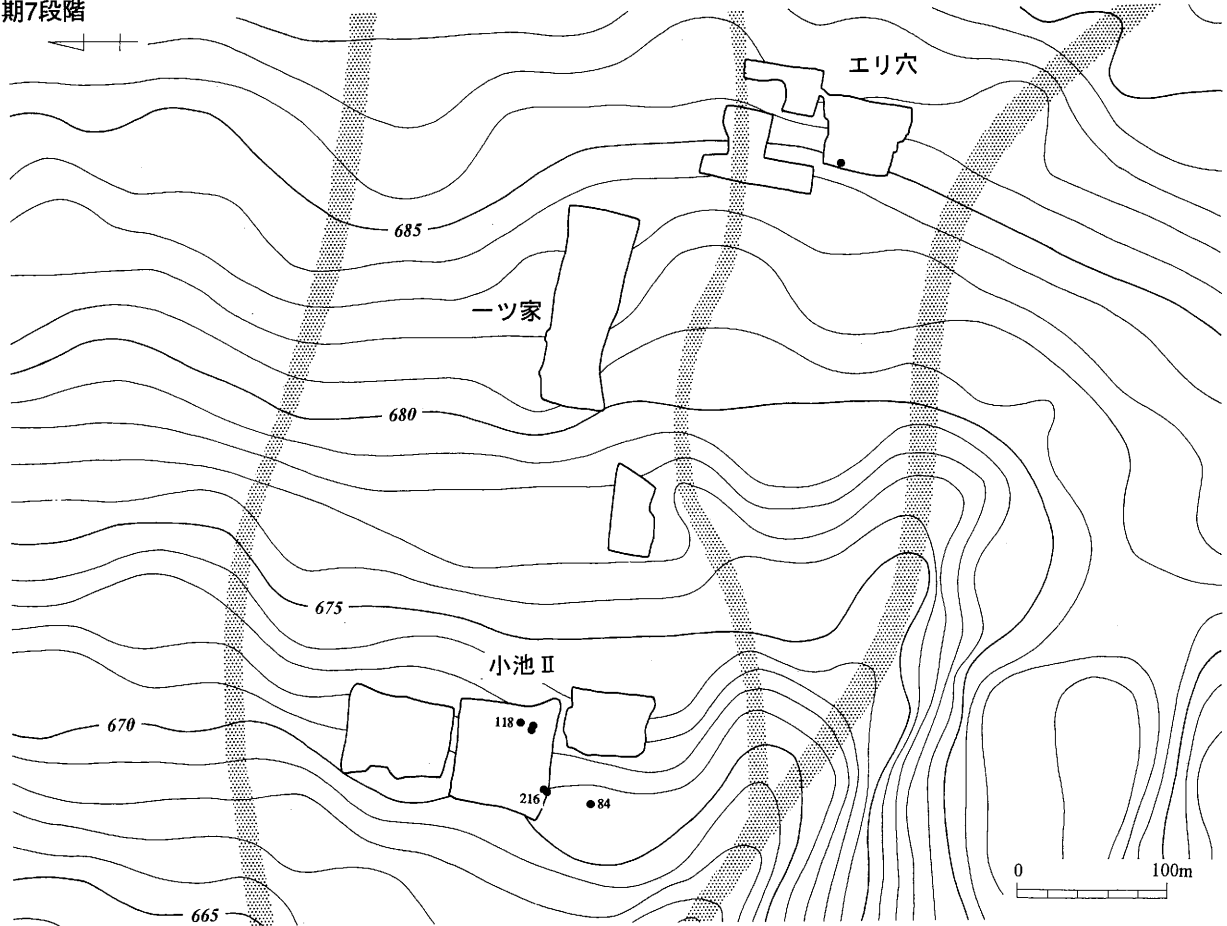


第178図 縄紋時代集落の変遷 (2)

中期6段階

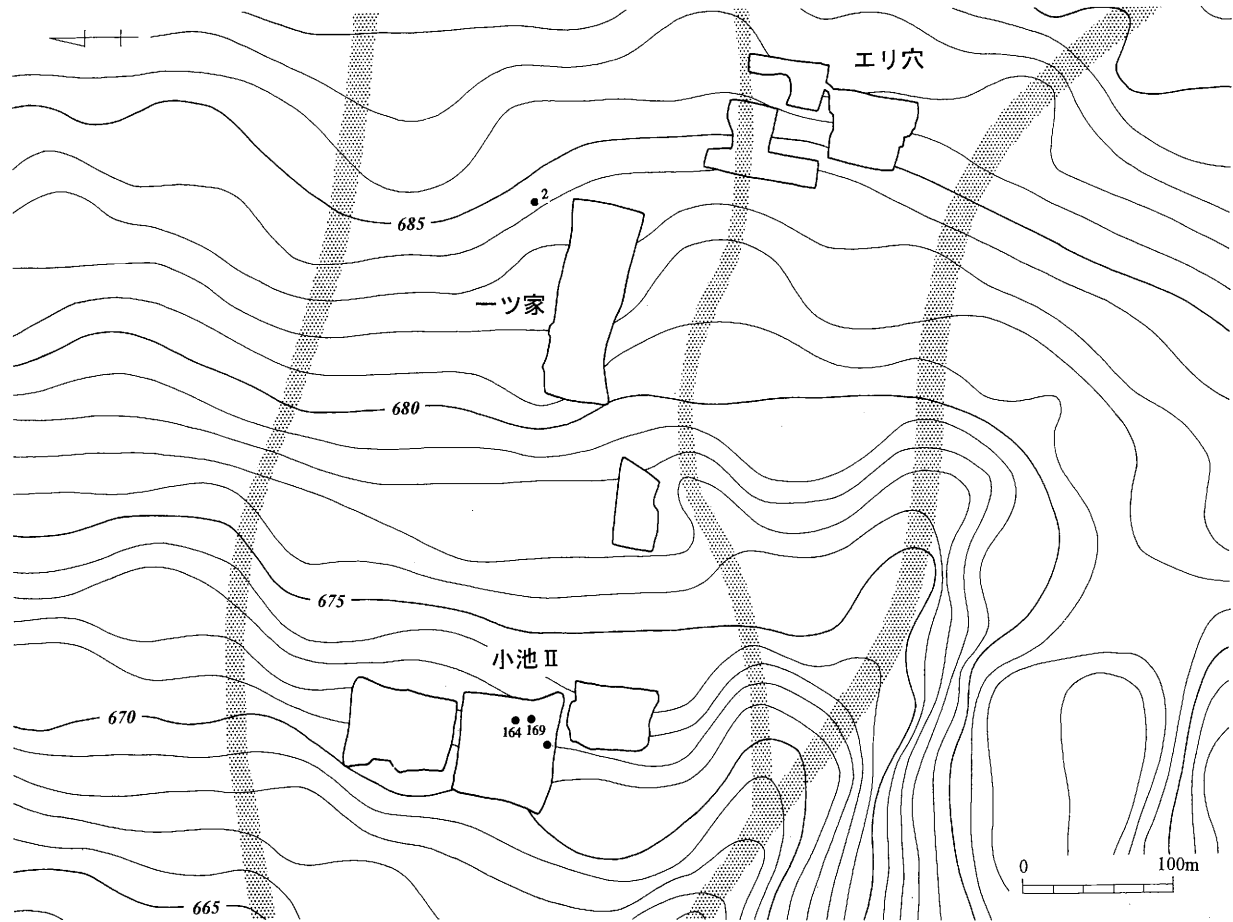


中期7段階

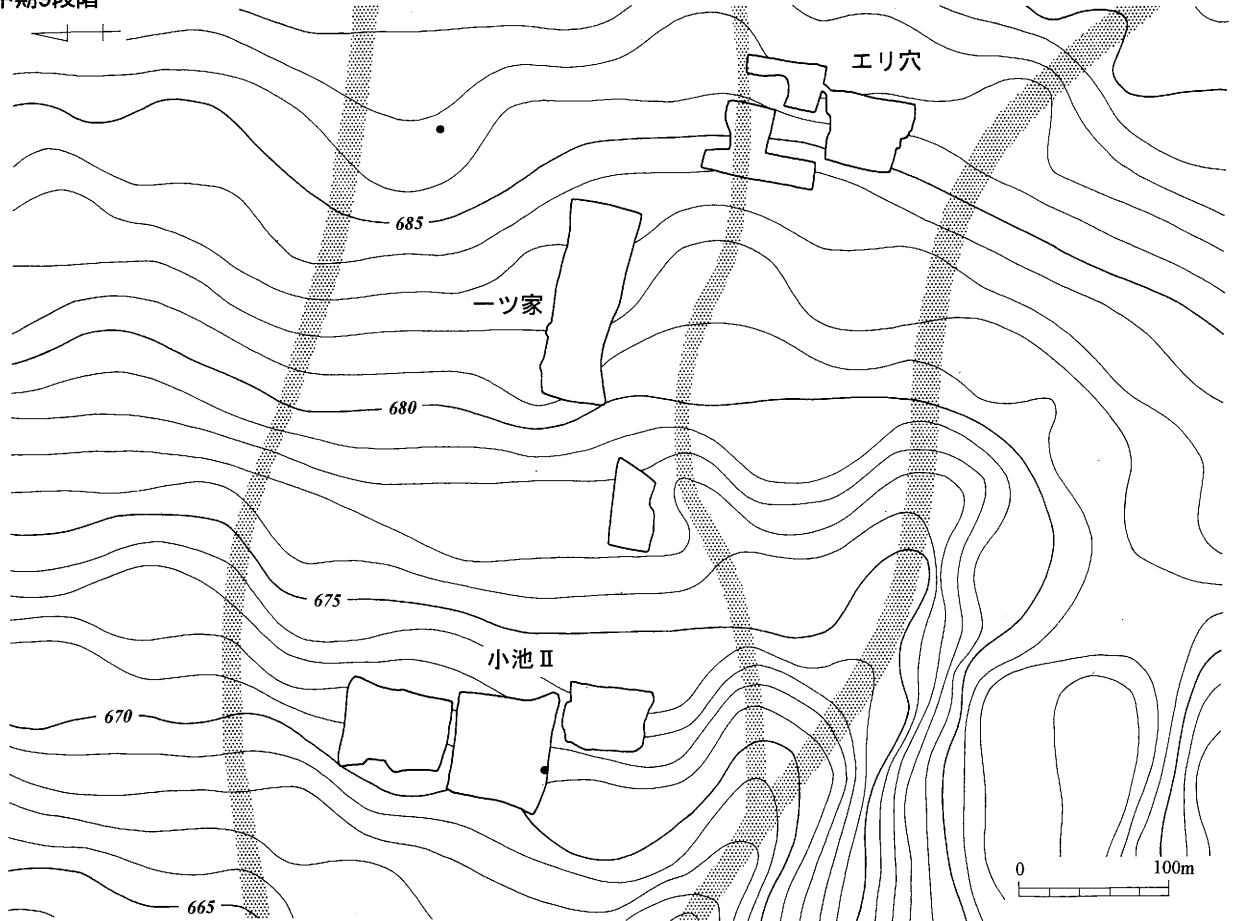


第179図 縄紋時代集落の変遷 (3)

中期8段階

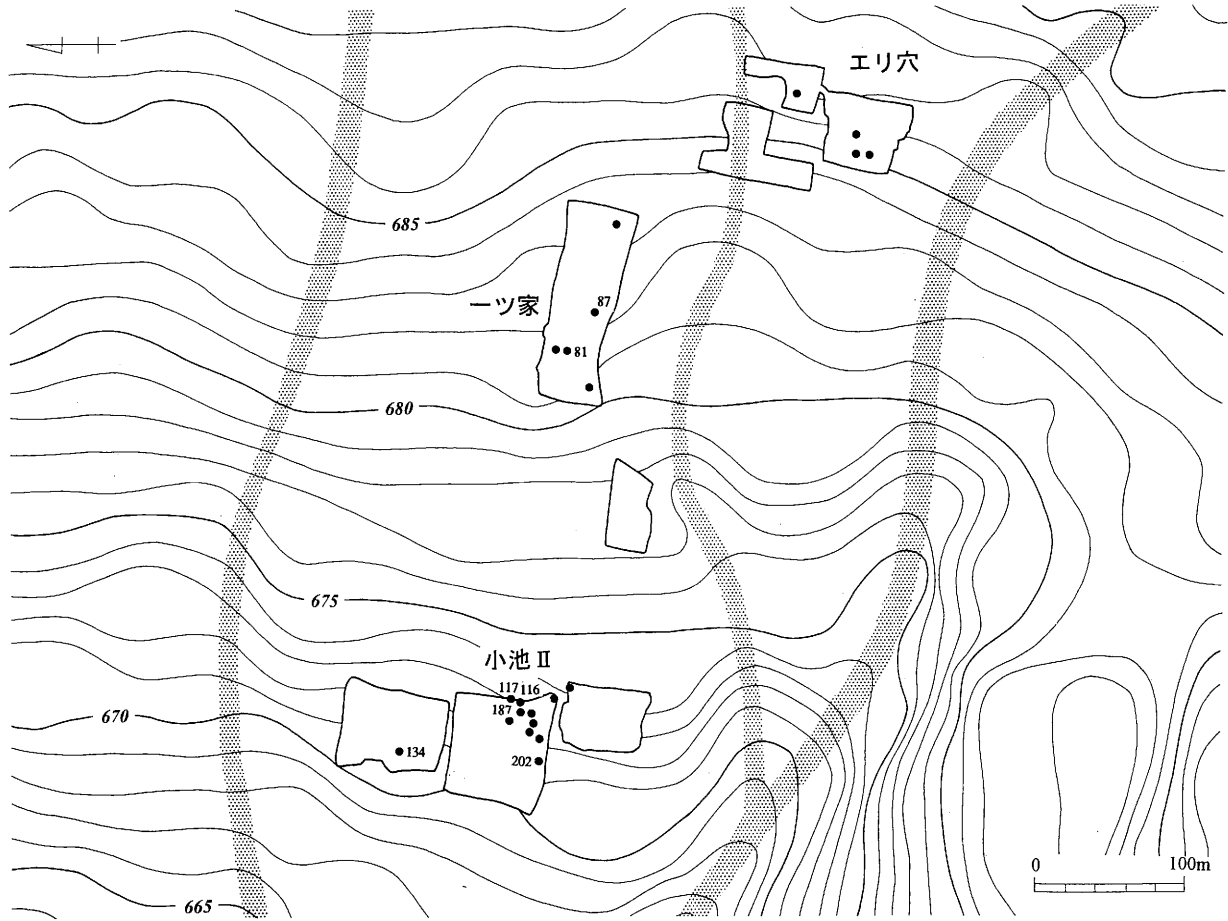


中期9段階

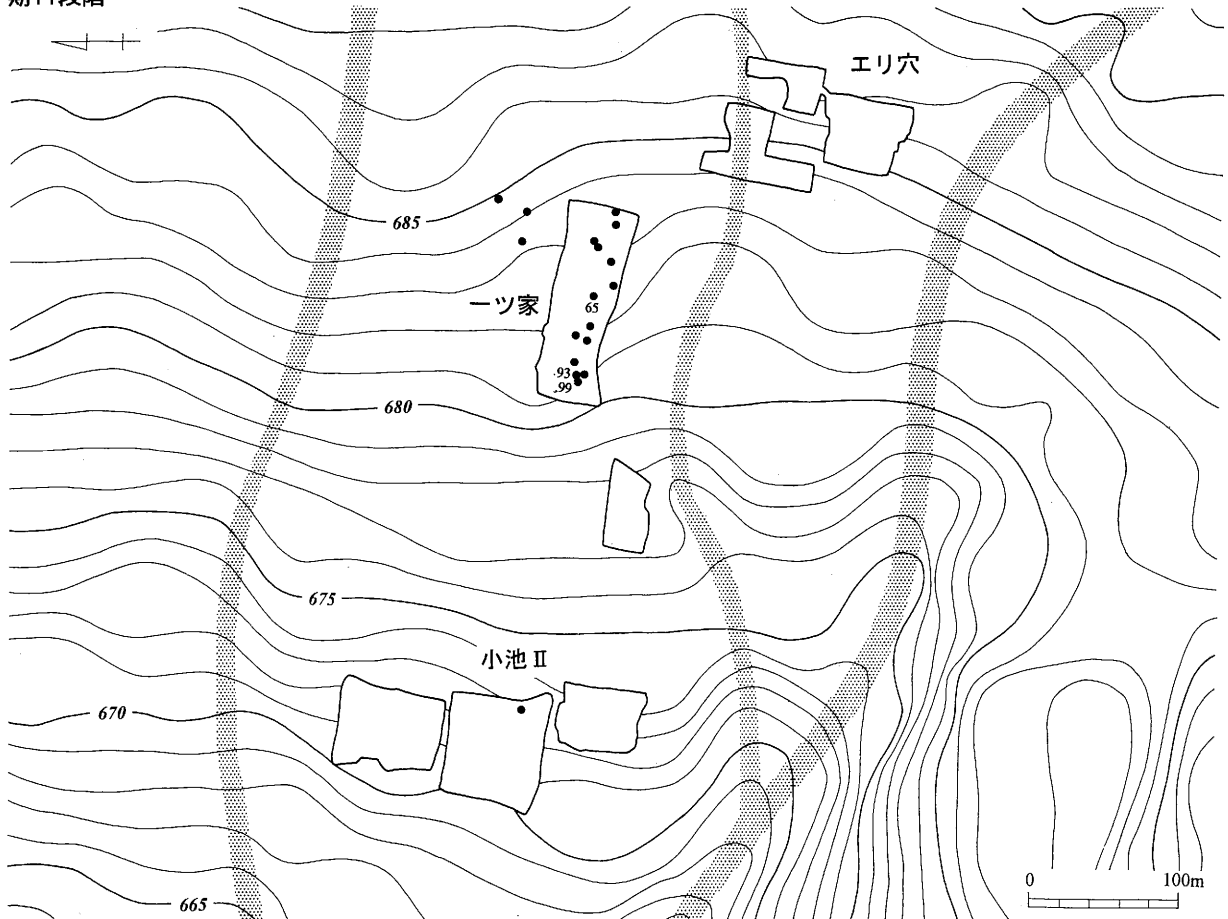


第180図 縄紋時代集落の変遷 (4)

中期10段階

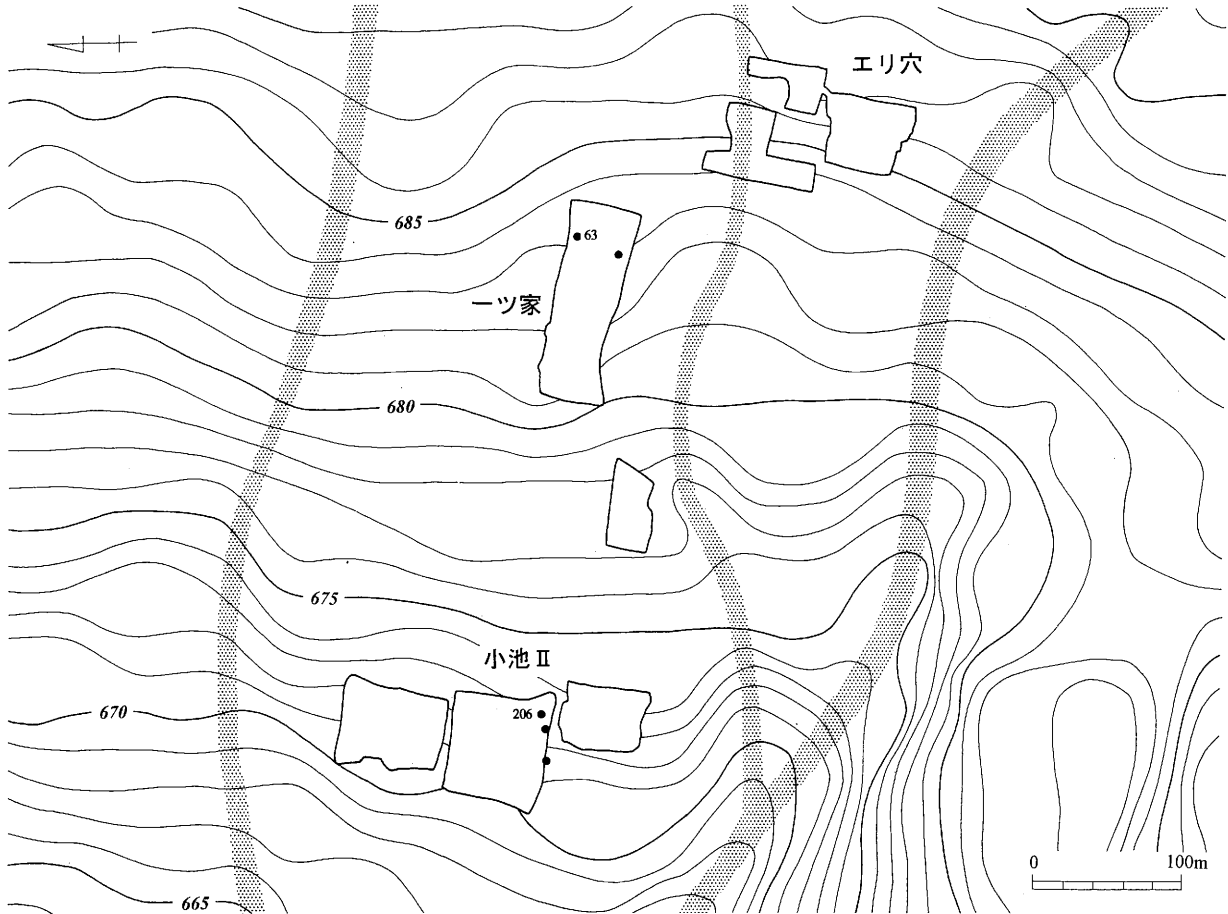


中期11段階

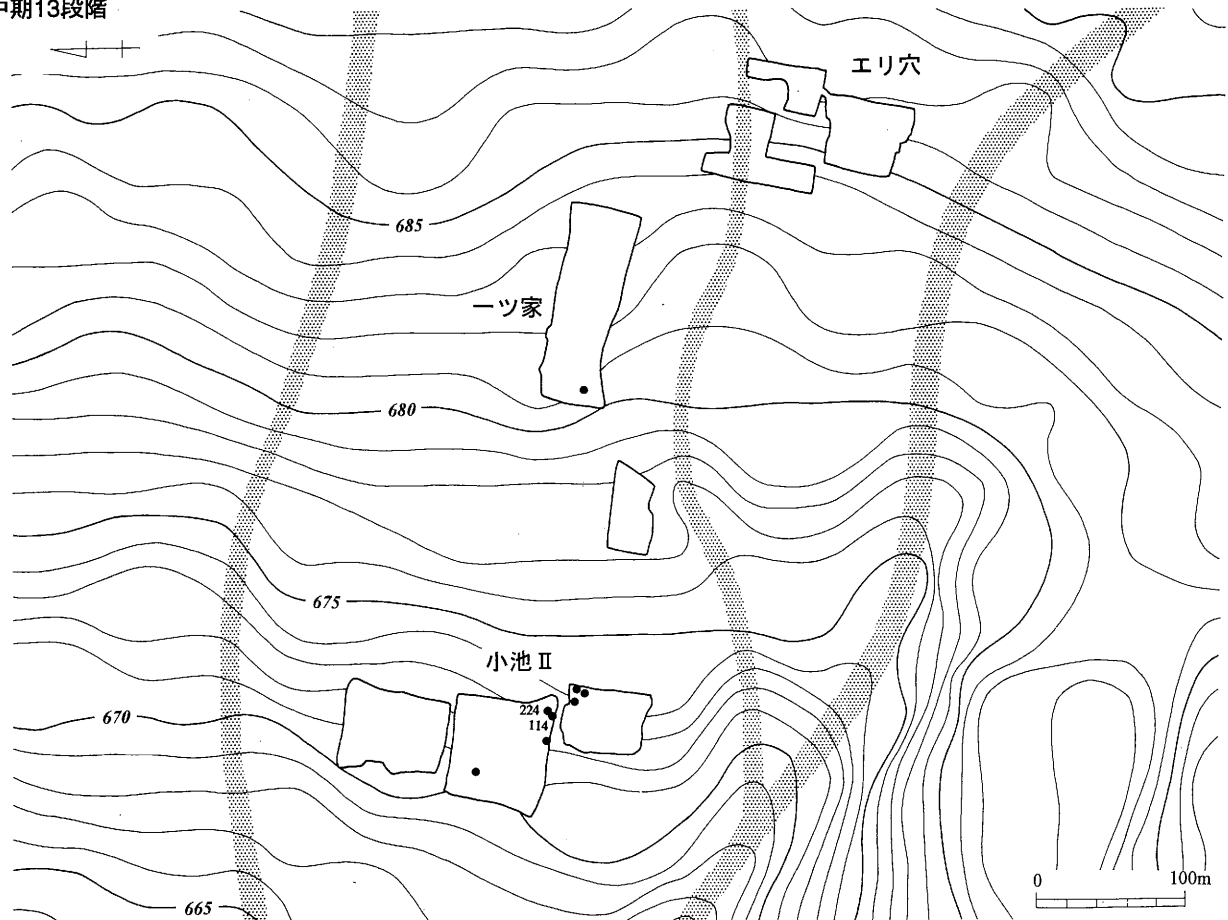


第181図 縄紋時代集落の変遷 (5)

中期12段階



中期13段階



第182図 縄紋時代集落の変遷 (6)

## 2.奈良・平安時代の集落について

今回の小池遺跡第2次・一ツ家遺跡の調査では、奈良・平安時代の多くの遺構・遺物が発見された。これに小池遺跡第1次調査で発見された遺構（第2図参照）をあわせると、合計229棟の竪穴住居址、12棟の掘立柱建物址になる。これらは、遺跡名称を分けてはいるが、広範囲に展開した同一の集落と捉えた方がよい。本項では、これまでの事実報告をまとめて、小池・一ツ家遺跡の奈良・平安時代の集落様相を考えてみたい。

### (1) 遺構分布の傾向

まず、両遺跡での竪穴住居址と掘立柱建物址の分布の傾向をみてみたい。

竪穴住居址は、小池・一ツ家遺跡の各調査区から検出されている。そのあり方は、2～3棟の重複関係が非常に多い。これは、ほぼ同位置での家屋の立て替えなどが多いことに起因するものと考えられる。このため竪穴住居址の位置は、ある程度定まったものがあり、それが踏襲されていったものと考えられる。住居址の規模をみると、一辺7m以上の大型住居は小池1次調査区（以下1次区と略す）に2棟（27・32住）、小池2次調査H区（以下H区と略す）1棟（246住）の計3棟みられるが、一般的に多くみられるのが一辺3.5～4mの小型住居である。

掘立柱建物址は、小池1次区に5棟、H区に6棟、一ツ家遺跡B区（以下一ツ家Bと略す）に1棟の合計12棟みられる。これらの分布をみると、建物址が全く建てられない空間（Ⅰ類）、竪穴住居址に混在して小規模な建物址が建てられる空間（Ⅱ類）、大型で特殊な建物が建てられる空間（Ⅲ類）の3種類の傾向が看取できる。Ⅰ類は、F・G・一ツ家A区が相当する。竪穴住居址などの遺構は多数みられるものの、建物址はまったくみられない。Ⅱ類は、H区の建物址が相当する。建物址の規模は、2間×2間（建6・9・10）と3間×2間（建7・8・11）で、すべて側柱式である。近在には大型竪穴住居址の246住や緑釉陶器が多く出土したF区86住などがみられ、246住と建9・11、86住と7・10建とはそれぞれ主軸を同一にするため、住居址の付属施設とも考えられる。Ⅲ類は、1次区でみられる5棟が該当する。6間×3間に南・西に1間分の庇、さらに西に3×1間の孫庇のつくもの（建1）や、6間×3間で南・西に1間分の庇がつき、一部が総柱になるもの（2建）などの特殊なもの、1間×2間（建3）、2間×2間（建4）、3間×2間（建5）などの建物址がみられる。特に建1・建2は長野県内最大規模であり、注目される。これらの建物址は建1と建3および建2と建4はそれぞれ棟方向を同一にするため、セット関係にあるものと考えられる。また、建5は建1とは90°棟方向を変えており建1を主殿とする脇殿的な性格も考えられる。これらの建物址は規模も大きく平面形状も特殊なものであるため、集落規模の大きさから、官衙的な施設・郡司層などの有力者の居館などの性格をもつ施設と考えられる。

### (2) 集落の変遷について

小池・一ツ家遺跡では、長野県埋蔵文化財センターで作成した松本平土器編年（文献1）を用いて、各遺構の時期比定を試みた。これらの結果から、小池遺跡第1次調査の結果（註）もあわせて時期ごとの遺構のありかたをみてみたい。

#### ①第Ⅰ期（総論編2～4期・8世紀初頭～8世紀後半）

小池・一ツ家遺跡では、土器編年2期（8世紀初頭）に集落が形成される。この時期の住居址は、小池1次区に2棟（13・19住）みられるのみで小規模である。3期も2～3棟と同様な集落展開がみられる。4期になると居住域が広がり、小池G・F区にも住居址がみられる。G区132住からは、甲斐型杯に「神」「火」の墨書がみられる。一ツ家遺跡周辺には、該期の遺構はみあたらない。

#### ②第Ⅱ期（総論編5～6期・8世紀末～9世紀前半）

該期には住居址数が増加する。小池遺跡の全面的に住居址が分布する。特に1次区には集中しており、建

1・建2などの特殊な大型掘立柱建物址もみられる（建1と建2には、やや時期差あり）。また、H区にも一辺7m以上の大型竪穴住居址（246住）がみられる。1次区に該期の中核があり、H区にも大型住居址を中心とした核がみられる。246住周辺からは「九」とかかれた墨書土器が出土している。一ツ家遺跡周辺には、まだ遺構はみられない。この時期に、長野県内最大の掘立柱建物址を中心に急速に発展する。

### ③第Ⅲ期（総論編7～8期・9世紀中葉～末）

この時期には最も住居址数が増大し、70棟の住居址を数える。小池遺跡の全面に住居址が分布し、一ツ家遺跡にも住居址がみられる。集落の範囲が最も広がった時期である。該期には、墨書土器が多数みられ、22棟の住居址（該期の住居址全体の31.4%）から墨書土器が出土した。文字をみると、「史」が5棟の住居址から出土しており、同じ文字を共有している。小池1区には、一辺6m以上の準大型住居址（27住）がみられる。

### ④第Ⅳ期（総論編9～10期・10世紀前葉～中葉）

Ⅲ期までは小池1次区を中心に集落の広がりをみせていたが、この時期からは小池2次調査地点のF・G・H区に住居址が集中する。墨書土器も1次区には全く出土せずF・G・H区のみにもみられたため、集落の中心がこの付近にあったと考えられる。F区には一辺6mの準大型住居（86住）があり、ここからは緑釉陶器が小片を含め6点出土してことから、該期の中核的存在と考えられる。86住の西26m地点には、該期（総論編9期）の有力者の墓である土坑墓1が検出されており、86住の存在とあわせてこの付近に有力者が存在したことが推測される。また、10期にも小池1次区に有力者の墓と考えられる土82がみつかり、有力者を中心とした集落が存続していたことが考えられる。

### ⑤第Ⅴ期（総論編11～12期・10世紀後葉～11世紀前葉）

集落はこの時期から急速に衰退していく。住居址数が減少し、広い範囲に散在する傾向にある。住居址規模も小型なものばかりで構成される。8棟が該当するが、その半数は一ツ家に位置する。集落の中核が一ツ家周辺に移動したものと考えられる。

### ⑥第Ⅵ期（総論編13～15期・11世紀中葉～12世紀前葉）

さらに住居址が減少する。分布をみると一ツ家遺跡に集中しており、1次区には全くみられなくなる。前期と同様に集落の中心は一ツ家周辺にあるものと考えられる。一ツ家・土477からは、「是」と書かれた墨書土器が1点出土している。集落は、以後中世へ継続していく。

## (3) 集落展開の歴史的背景について

小池・一ツ家遺跡では8世紀初頭に集落の形成が始まり、8世紀末～9世紀初頭には長野県内最大級の掘立柱建物の出現や多量の緑釉陶器の出土などから急速に隆盛を極めることが窺える。その後、10世紀後半には衰退し、小規模な集落が12世紀前葉まで継続していく。このような変遷をたどる集落様相について、歴史的背景と関連付けて概観してみたい。

小池・一ツ家遺跡を含む周辺一帯は、古代には信濃國筑摩郡良田郷に含まれ、郷内には古代官道の東山道が通っており、覚志駅があったと考えられている。『延喜式』の記載には、信濃には十六の御牧が設置され、その位置は明確でないものが多いが、筑摩郡内には埴原（はいばら）牧と大野牧の二ヶ所が比定されている。このうち埴原牧は、その地名から本遺跡東側の鉢伏山麓の中山千石・古屋敷地籍と考えられているが、周辺の集落は9世紀後半以降にしかみられない。牧推定地から程近い小池遺跡では、8世紀前半から中頃には集落の形成が始まり、8世紀末～9世紀前半には巨大な掘立柱建物の存在や多量の緑釉陶器の出土から、急速に隆盛を極める。その後、10世紀代には衰退してしまい、南西500mほど離れた吉田川西遺跡（文献3）が代わって発展しはじめる。両遺跡を比較してみた場合に共通していえることは、古代にはそれほど水田



が発達しておらず、水田耕作だけでは集落の維持やこれほどの発展は困難であったと考えられる。このため、小池遺跡や吉田川西遺跡の有力者が農業経営よりもむしろ埴原牧の経営に関わっていたことが推定される。また、集落の時期的な変遷から、9世紀代は小池遺跡が経営の中心で、10世紀に衰退した後は吉田川西遺跡に経営権が移ったものと考えられる。それを裏付ける資料としては、吉田川西遺跡からは「榛原」(はいばら)という墨書がみられることや、小池・一ツ家・吉田川西遺跡の平安期の住居址から馬具が10点(一ツ家29・36住・小池196住・吉田川西7点)出土していることが注目される。大谷猛(文献2)によれば住居址出土の馬具については、牧との関連、律令体制弛緩のなかでの有力者の台頭、蝦夷征伐とその後の統治、律令体制下に組織された浮因集団との関連などを考慮に入れるべきであるとしている。本遺跡では、地理的に牧の推定地に近接しており、牧を背景にした集落とその統率者である有力者の存在が考えられる。これには、小池遺跡土坑墓1、土坑82、吉田川西遺跡SK128などの木棺墓に葬られた特別な人々が考えられよう。このような有力者を中心とした集落構成になっていった過程は、墨書土器の分布状況からも窺える。小池・一ツ家遺跡では、4期から墨書土器が出土しはじめる。4～6期は出土量も少なく、文字種類も様々である。ところが7～8期になると、「𪛗」の墨書が広い範囲で見られるようになる。この時期に共通の文字を使用する同集団が形成されていることが考えられる。そして集落の衰退とともに、墨書土器の出土もみられなくなる。

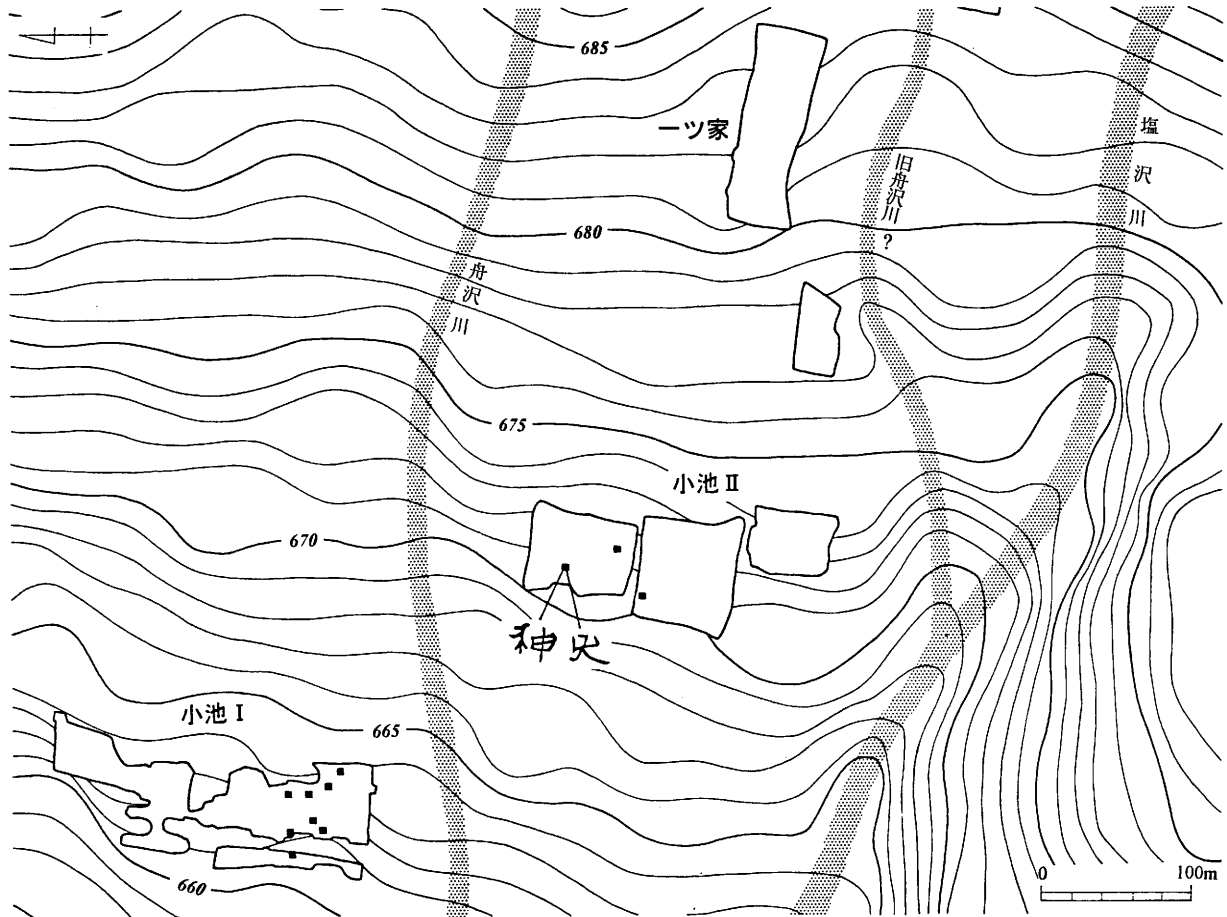
やがて牧の経営は、11世紀以降になると、中央政府が牧の馬すべてを把握するのをやめ、規定された馬の数を納めればよいという方針に変わり、牧の経営を現地の有力者に任せるようになった。このような経営体制の変化や律令体制の崩壊というような社会状況のなかで、10世紀以降の竪穴住居址から多量の鉄鏃が出土していることから、武装化が進んでいったものと考えられる。本遺跡にみられる有力者がいわゆる、律令体制崩壊期に富豪の輩とよばれた在地有力者として捉えられよう。小池・一ツ家遺跡に展開する奈良・平安時代の集落は、牧経営などを背景に力をつけた有力者を中心としたものであったと考えられる。

註 本報告は未報告である。概報として『小池遺跡』(1991年刊・松本市教育委員会)がある。

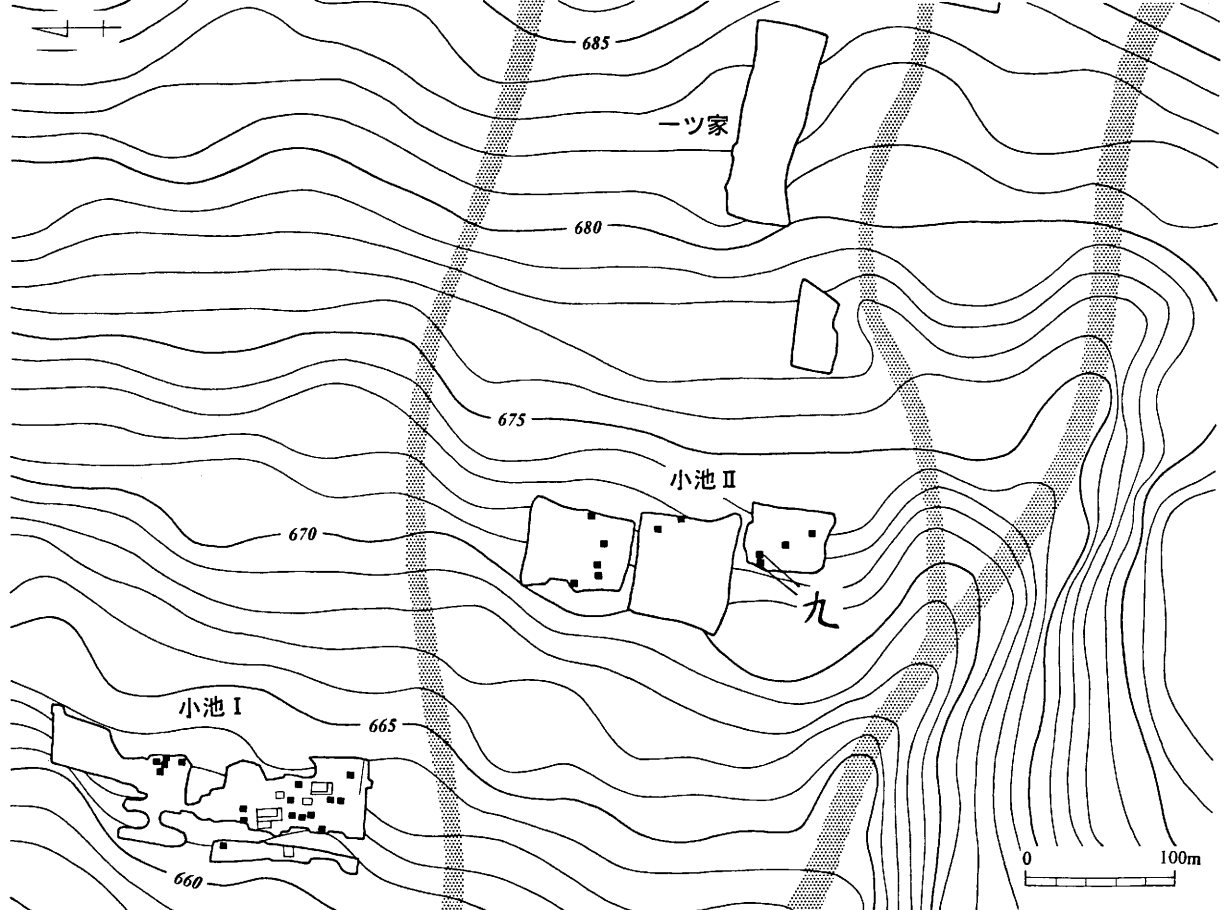
#### <引用・参考文献>

- 1 (財)長野県埋蔵文化財センター 1990 『中央自動車道長野線埋蔵文化財報告書4』総論編
- 2 大谷 猛 1984 「住居址出土の馬具」『学術研究紀要』第1集 東京都教育委員会
- 3 (財)長野県埋蔵文化財センター 1989 『中央自動車道長野線埋蔵文化財報告書3』吉田川西遺跡
- 4 松本市 1996 『松本市史』第二巻 歴史編Ⅰ 原始・古代・中世

古代2・3・4期

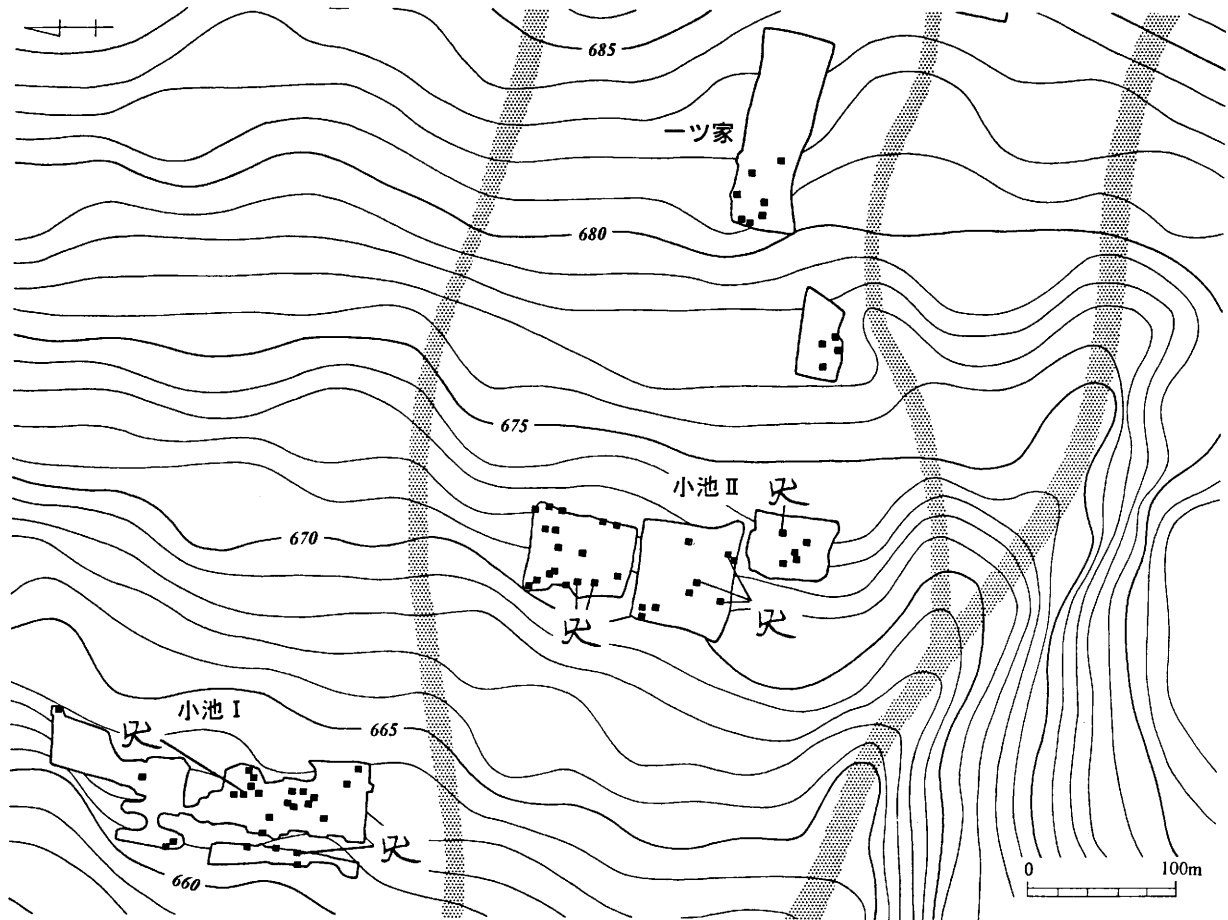


古代5・6期

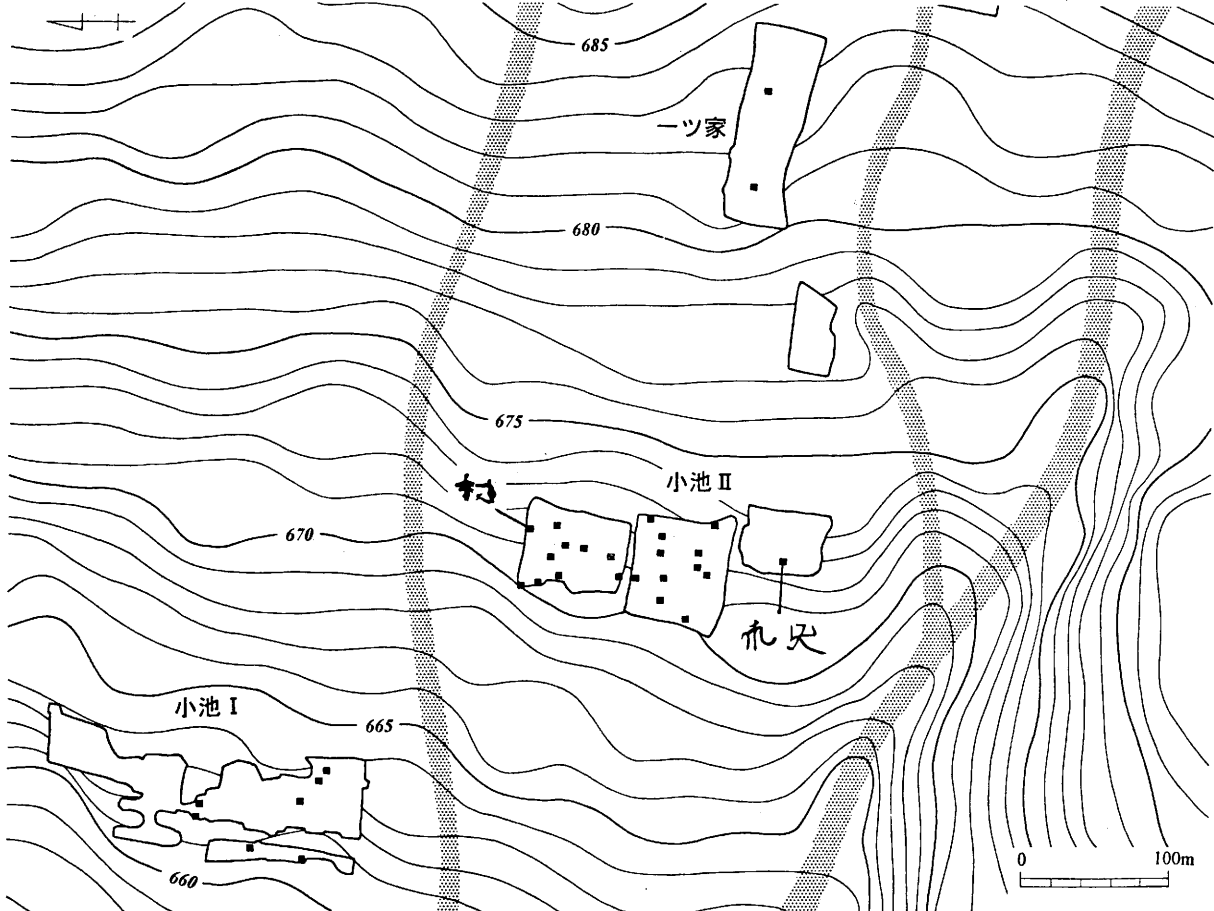


第183図 奈良・平安時代集落の変遷 (1)

古代7・8期

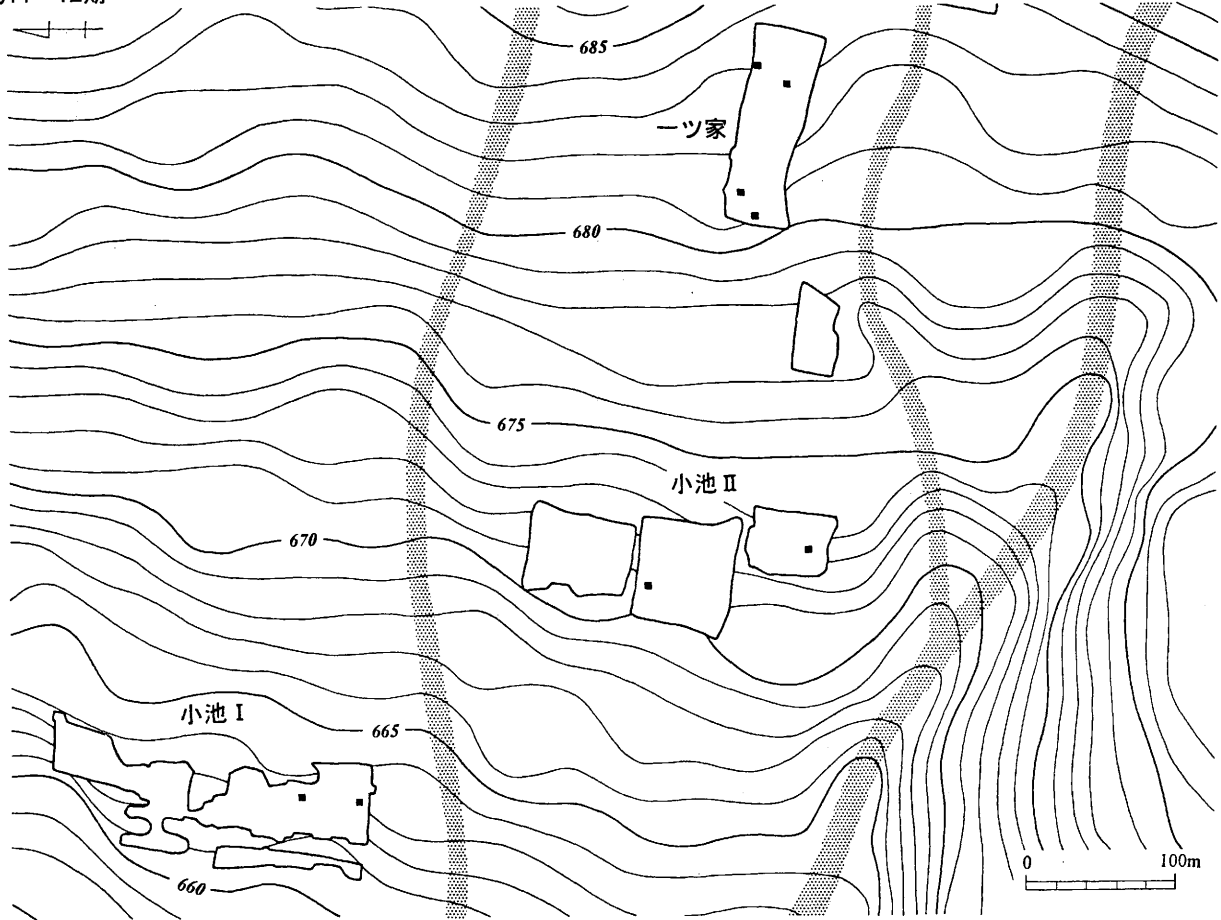


古代9・10期

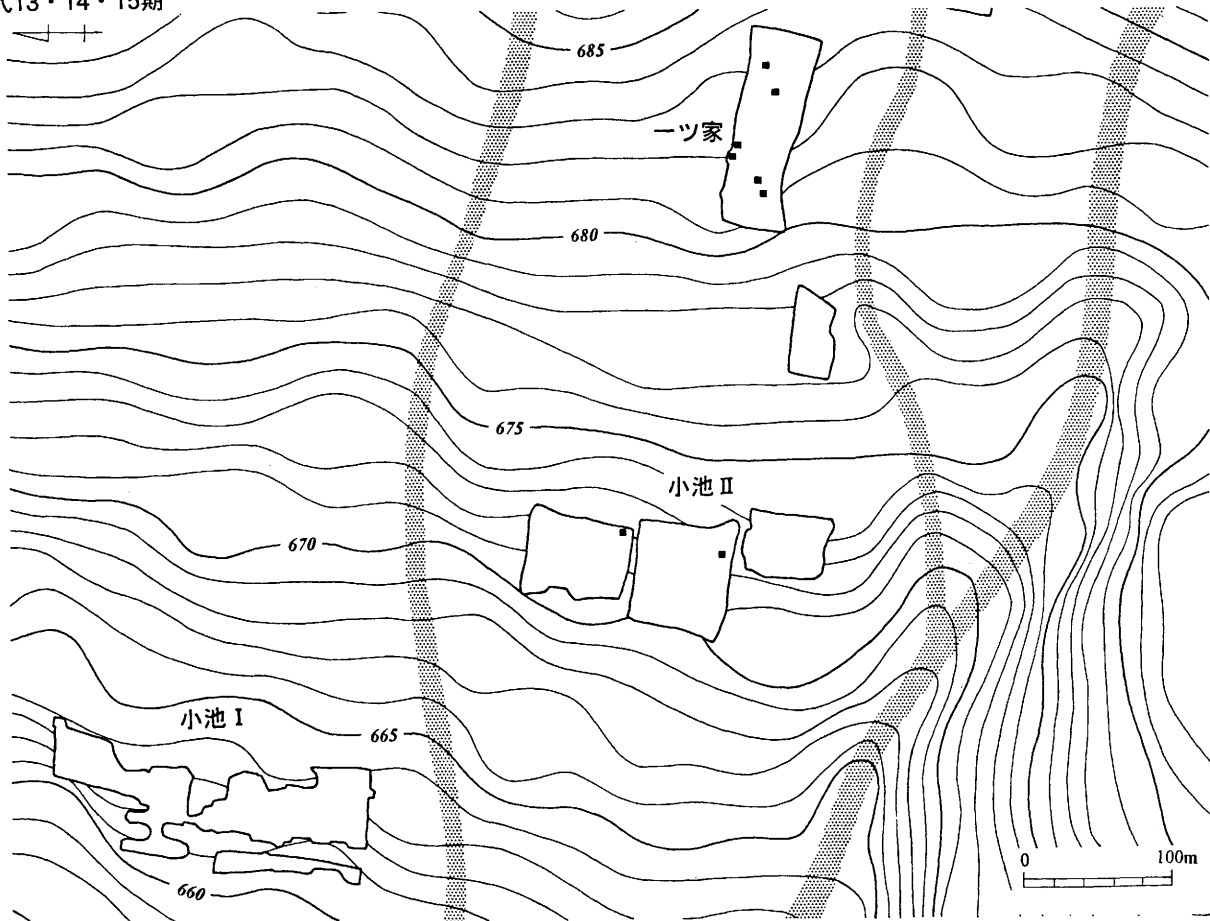


第184図 奈良・平安時代集落の変遷 (2)

古代11・12期



古代13・14・15期



第185図 奈良・平安時代集落の変遷 (3)

### 3.中・近世の集落について

---

小池・一ツ家遺跡では、中・近世の良好な遺構・遺物が発見された。出土した遺物の年代観や遺構の変遷などから、中世では小池遺跡で12世紀後半～14世紀前半、一ツ家遺跡で15世紀後半～16世紀中頃の様相がみられる。近世では、小池F区に17世紀前半の溝1条（溝29）、小池遺跡1区と一ツ家遺跡南東に位置するエリ穴遺跡において18世紀代の遺構がみつまっている。これらの遺構の在り方から、中世Ⅰ～Ⅳ期と近世の5つの画期にわけて、その変遷をまとめてみたい。

#### (1) 中世集落の変遷について

##### ①Ⅰ期（12世紀後半～13世紀中頃）

この時期の遺構は、小池遺跡F区に集中している。発見された遺構は、掘立柱建物址2棟（建15・17）、堅穴住居址2棟（183住・267住）・堅穴状遺構2棟（堅9・堅11）、溝1条（溝26）、土坑（小池：1045・1046・1080・1098・1103・1564・1831・1895、一ツ家：14など）、土坑墓1（一ツ家）などで構成される。これらの遺構は、13世紀代に比定されるものがほとんどで、12世紀代は遺物が出土しているものの、遺構の様相は判然としない。しかしながら、12世紀前葉の平安時代末に小規模に縮小した集落が、細々と12世紀末まで継続していた可能性がある。

13世紀代に入ると、遺構・遺物ともに増加する。発見された遺構のうち堅穴住居址としたものは、平面形が長方形を基本としており、規模は長辺5.7～8.3m、床面積20.4～26.3m<sup>2</sup>と大型である。これに対して堅穴状遺構は平面形が円形を基本としており、掘り方も深い。床面積は6～15m<sup>2</sup>と、堅穴住居址よりも小型である。掘立柱建物は2間×2間（建15）と4間×2間（建17）の2棟がみられる。建17は、その規模から該期の主殿的な施設と考えられる。これらの建物址・堅穴住居址・堅穴状遺構・土坑がセットになって屋敷地を構成するものと考えられる。

遺物では267住から鎧小札・溝26から短刀などが出土しており、武装化した人々が住んでいたことが推定される。

##### ②Ⅱ期（13世紀後半～14世紀前半）

この時期の遺構は、F・G区にみられる。礎石建物址1、掘立柱建物址14、95住、堅3・8・12・13、柵址1、土1062・1140・1240・1877・1890、溝27・30が該当する。遺構の在り方をみると、区画溝としての性格が考えられる溝27・30が人工的に形成され、その内側が居住域となっている。建物址では庇付きの礎石建物がみられ、該期中核的な施設と考えられる。1期でみられた住居址は1棟のみで、堅穴状遺構と建物址が主体となって構成される。

遺物で注目されるのは、堅12から鎧の座金・馬具・馬の歯が出土している。14世紀後半～15世紀前半までの間は、遺構・遺物ともにみられない。

##### ③Ⅲ期（15世紀後半）

この時期は、一ツ家遺跡において遺構・遺物がみられる。溝1・2・5・9・10、堅2、土46・48・56が該当する。これらの溝1と5に囲まれた空間と溝5に囲まれた空間が居住域と考えられる。双方ともに35～36m四方を測り、1段4畝ぐらいの広さがある。この区画の西側にある溝1・2は道路状遺構の側溝と考えられる。このような溝は、一ツ家B区にもみつまっているため、西側から調査区まで道が通っていたものと考えられる。この居住域の1画が、屋敷地1軒分に相当するものと考えられる。

該期の遺物は、破片も含めて49点みられる。組成をみると、土師器：皿1、内耳鍋：21、国産陶器：古瀬戸17、輸入陶磁器：5（白磁4、青磁1）で、内耳鍋と古瀬戸系陶器が多い。

#### ④IV期（16世紀前半～中頃）

該期に比定される遺構は、溝3・4、竪3、柵址である。溝3と4は時期差があり、溝4の方が古い。溝1・2は該期には埋没し、これらと軸を違える溝3に囲まれた空間に居住域がみられる。IV期から変遷する溝3・4・5には、流水の痕跡がみられる。遺跡周辺の内田地区は、高燥な自然条件からして農地を開発するにも水を得ることが重要であった。その意味では、区画溝としてだけでなく用水を得るための機能も考えられる。本址の東150mに位置する、近世の豪農の屋敷地として保存されている馬場家住宅をみると、周囲に馬場の堰とよばれる独自の用水が、牛伏川から舟沢川をまたいでひかれていた。このような点から、一ツ家遺跡は、有力農民の屋敷地としての位置付けが考えられる。

出土遺物の構成は、土師器：5（皿）、内耳鍋：11、国産陶器：瀬戸大窯10、輸入陶磁器：（青磁2、白磁1）と内耳鍋と国産陶器の割合が多い。

#### (2) 小池遺跡出土の中世陶磁器について

本遺跡では、VI-4-（1）で述べられたように、多量の土器・陶磁器が出土した。特に小池遺跡では出土総数203個体以上もの出土量がみられる。これらの組成を比較検討し、本遺跡の特性を考えてみたい。

本遺跡でみられる土器・陶磁器の内訳は、輸入陶磁器136個体、古瀬戸系陶器13個体、山茶碗・捏鉢・常滑産壺・三筋壺などの東海系無釉陶器28個体、中世土師器皿22個体、在地産搦鉢3個体、不明1個体である。小池遺跡では、12世紀後半から14世紀前半までの長期間継続しており、2つの時期に分けてその組成を比較してみたい。

##### ① I 期（12世紀後半～13世紀中頃）

出土した種別・器種は、土師器：皿14点、鍋1点、国産陶器：瓷器系（碗2点、捏鉢7点）、常滑・渥美系（壺3点）、瀬戸（水注1点）、輸入陶磁器：青磁（碗40点、皿2点）、青白磁（合子1点、梅瓶2点、水注1点）、白磁（碗2点、皿2点）である。種類では輸入陶磁器が多く、全体の64.2%を占める。次いで国産陶器39.1%、土師器19.3%という割合になる。陶磁器の種別構成を比較すると、青磁67.7%、瓷器系14.5%、青白磁6.5%、白磁6.5%、常滑4.8%、瀬戸1.6%となり、青磁が最も多くみられる。輸入陶磁器の器種構成では、碗類が多く84%を占め、次いで皿類8%、壺類4%、その他4%である。

この時期の特徴は、輸入陶磁器が非常に多いことがあげられよう。しかし、そのほとんどが青磁で占められる。器種では碗の比率が高い。また、僅かではあるが高級品の青白磁の梅瓶2点（包含層）、合子1点（183住）、水注1点（土1895）がみられることは注目される。国産陶器では、瓷器系・常滑産・瀬戸産の単純な構成がみられる。

##### ② II 期（13世紀後半～14世紀前半）

種別・器種は、土師器：皿6点、国産陶器：瓷器系（捏鉢8、壺1点）、瀬戸（水注6点、卸皿2点、皿1点、花瓶1点）、須恵質（搦鉢3点、捏鉢1点）、輸入陶磁器：青磁（碗18点、杯1点）、白磁（碗7点、皿4点）で構成される。I期と同様に、輸入陶磁器が多量にみられるものの、国産陶器の瀬戸産もI期より飛躍的に増加する。器種構成では碗類が非常に多い。I期でみられた瓶類・合子・水注は、青白磁から国産陶器の瀬戸産、瓷器系にみられる。

さて、本遺跡出土の土器・陶磁器についての特徴を整理し、その組成について考えてみたい。まず、本遺跡の出土陶磁器の傾向としてを2点の特徴があげられる。まず、第1に輸入陶磁器が大量に出土していることである。I期で出土した土器・陶磁器のうち、64.2%を占め国産陶器や土師器などを圧倒的に上回る。II期でも、50.7%で半数を越える。この時期は、ほかの遺跡でも出土量が増えるとはいえ、群を抜く多さである。破片個体数が非常に多いことから、大量に消費されたということが指摘できよう。

第2点として、青白磁の梅瓶・合子・水注などの高級輸入磁器が出土していることである。

このような特徴の背景について考えてみたい。服部実喜氏によれば、都市鎌倉と周辺地域の間には、食器などの各分野で質・量の格差がみられるとしている<sup>(註)</sup>。鎌倉では、多種・多様な陶磁器を価格や用途・使用の場に応じて購入し、使い分けるとともに、しかも大量に消費する。周辺地域では、食器組成が比較的単純で、少量のものを長期間使用する傾向が指摘されている。そして、具体的に遺跡の性格や居住者の階層の差を表すものとして食器や貯蔵具の瓶類の有無があげられるとしている。これらの価値・価格の高い輸入陶磁器や、茶・花・香などの食器以外の用途を持つ陶磁器については、階層差が反映される。これらは、流通網に乗っていないか、のっていても流通量がごく限られていた可能性が高い。また、これらを必要とする非日常的なものの有無などは、階層性の現れや、非日常的な（ハレ）の空間をもっている屋敷地の性格が考えられる。これらのことから、本遺跡の出土品の特徴を考えてみたい。まず、大量消費する輸入陶磁器と、高級品である青白磁合子・梅瓶・水注がみられることは、鎌倉に類似する生活様式をもっていたことがいえよう。また輸入陶磁器をある一定の流通量を確保できたこと、そして高級品も入手可能でそれを必要とした階層の人物ということを考えれば、領主層も十分に考えられよう。このような組成や、遺構のありかた、鎧の小札や座金、馬具、短刀類などの武装化したことを示す出土品などから、本遺跡周辺に勢力があった在地領主層の居館的な性格が考えられよう。

### (3) 歴史的背景について

中世における小池・一ツ家遺跡には、溝に囲まれた居館または屋敷地が存在していた。特に小池遺跡の出土遺物には、鎧の小札・短刀・馬具などが出土しており、武装化した有力者の居館であった可能性が指摘できる。また一ツ家遺跡では、近隣に江戸末期の豪農の屋敷である馬場家住宅（松本市重要文化財）も位置しており豪農の屋敷との関連も考えられよう。これらのことを、文献史料等で知られている事象ともからめて遺跡の性格を考えてみたい。

本遺跡が位置する寿小池や内田周辺のことを史料上最初にみられるのが文治2年（1186）3月13日条の『吾妻鏡』である。このなかに、「北内」牧「南内」牧という記載がされているが、これが前項で述べた奈良・平安時代の埴原牧が、南側に移動して形成された牧と言われている。この史料からは、この牧の管理者が勅使牧を管轄している左馬寮への貢馬（くめ）を滞納していたことがわかる。また、小池郷は春近領とされており、春近領年貢は禁裏呉服料にあてられていた。こうした春近領は、鎌倉幕府成立以後は源頼朝に没収され、関東御領となるが、小池付近の春近領がどのように関わったかは不明である。

次にみられるのが、嘉元3年（1305）小池郷の赤木氏への鎌倉幕府の下知状である。赤木氏は板東平氏の子孫である白川氏が赤木郷（小池郷の南側に位置する）に入って赤木氏と称したものである。白川氏は、小池郷や吉田郷にも進出し、それぞれ小池氏、吉田氏と称している。その後赤木氏は、鎌倉時代の終わりには備中（岡山県）穴田郷に移り住んでいる。

鎌倉時代末の嘉暦4年（1329）の諏訪上社の「嘉暦之頭役状」には、内田牧と呼んでいるので、このころも牧として機能していたものと考えられる。地頭は、埴原とともに波多氏であった。この波多氏については、次のような史料がみられる。応永25年（1418）に作られた牛伏寺の釈迦三尊の本尊の胎内銘に「中興修理信州国筑摩郡波多腰大和守清勝当歳六十二」とある。同じく応永29年には、小池にあった牛伏寺の地蔵堂に弟の小池左馬亮信道とともに奪衣婆像を寄進しており、その胎内銘には「大旦那波多大和守清勝 歳六十六才誌之」とある。これらから、波多氏が15世紀前半にはこの地域に大きな勢力を持っていたことがわかる。

また、波多氏の跡を継いで中内田を村井氏、南内田を和田氏、北内田を平瀬氏が領した。この所領状況を表す記載は、文明18年（1486）まで続く。

南北朝時代の小笠原氏の諏訪下社への安堵状では、「春近領 塩尻東西 小池東西」という記載がみられる。鎌倉末期には小池を一つに呼んでいるのに、南北朝期以後は小池東西と呼んでいる。一つの郷を東西などと分けて呼んでいるのは、多くは領家分と地頭分とを分ける下地中分をしたことによる。小池郷も鎌倉時代から南北朝時代の間に下地中分が行われたようである。

これらの史料から、中世鎌倉時代には小池・一ツ家遺跡の周辺には地頭あるいは土豪層の有力者が居住していたことがわかる。

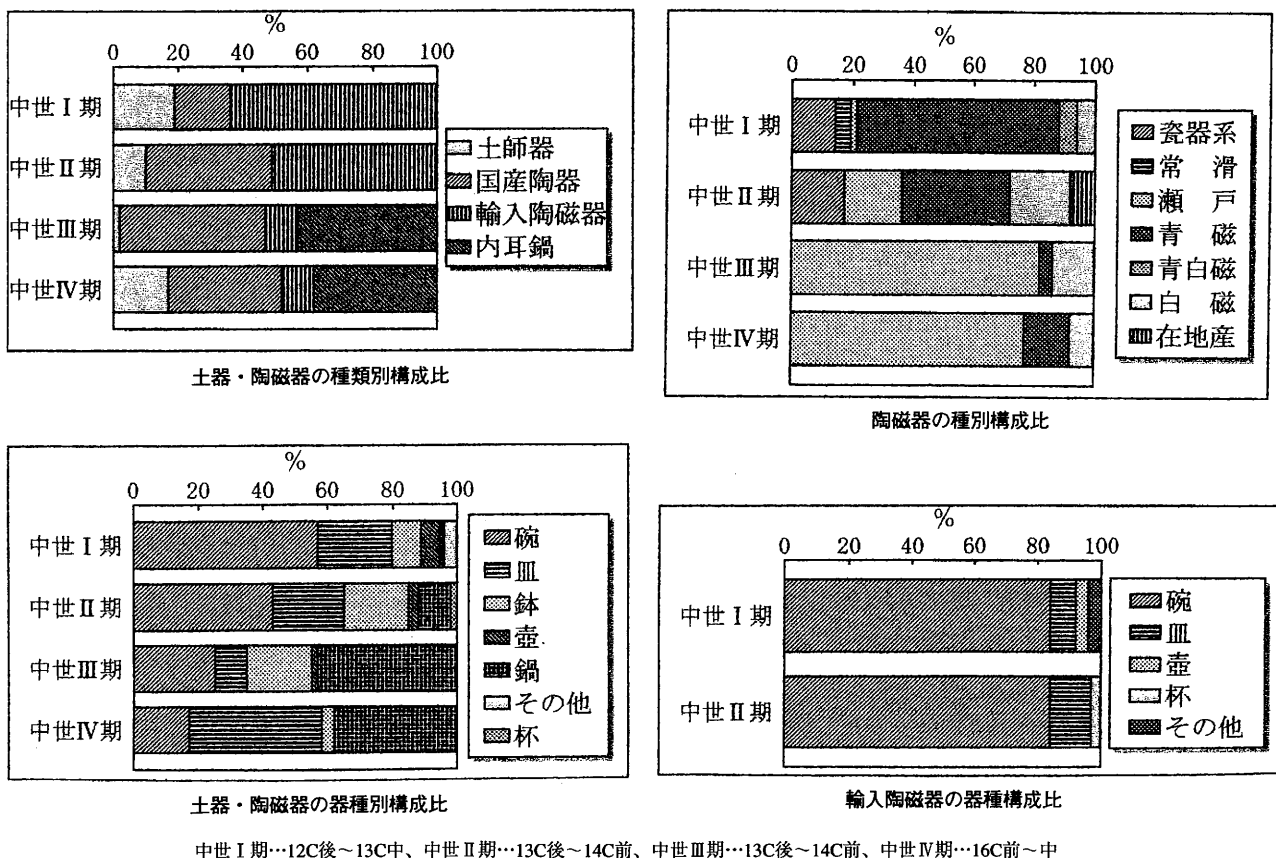
#### (4) 近世（17世紀～18世紀）の集落様相

小池遺跡1区・F区と一ツ家遺跡の南東に隣接するエリ穴遺跡C区（未報告）に遺構分布がみられる。小池1区・エリ穴遺跡では、いずれも18世紀代の屋敷跡と考えられる遺構（建物址・土坑・ピット・井戸・溝など）、小池F区では17世紀前半の溝状遺構が発見されている。遺物は、瀬戸・美濃系陶器（志野皿・灰釉碗・拳骨茶碗など）、肥前系磁器（染付湯呑み碗、皿など）等が出土した。これらのように、周囲に溝が巡る近世の屋敷は、近接して馬場家住宅がみられる。このため小池遺跡、一ツ家遺跡、エリ穴遺跡周辺には、農村集落の屋敷跡が点在しているものと考えられる。

註 服部実喜 「都市鎌倉と周辺の陶磁器」『貿易陶磁研究』No.15を参考・引用した。

#### <引用・参考文献>

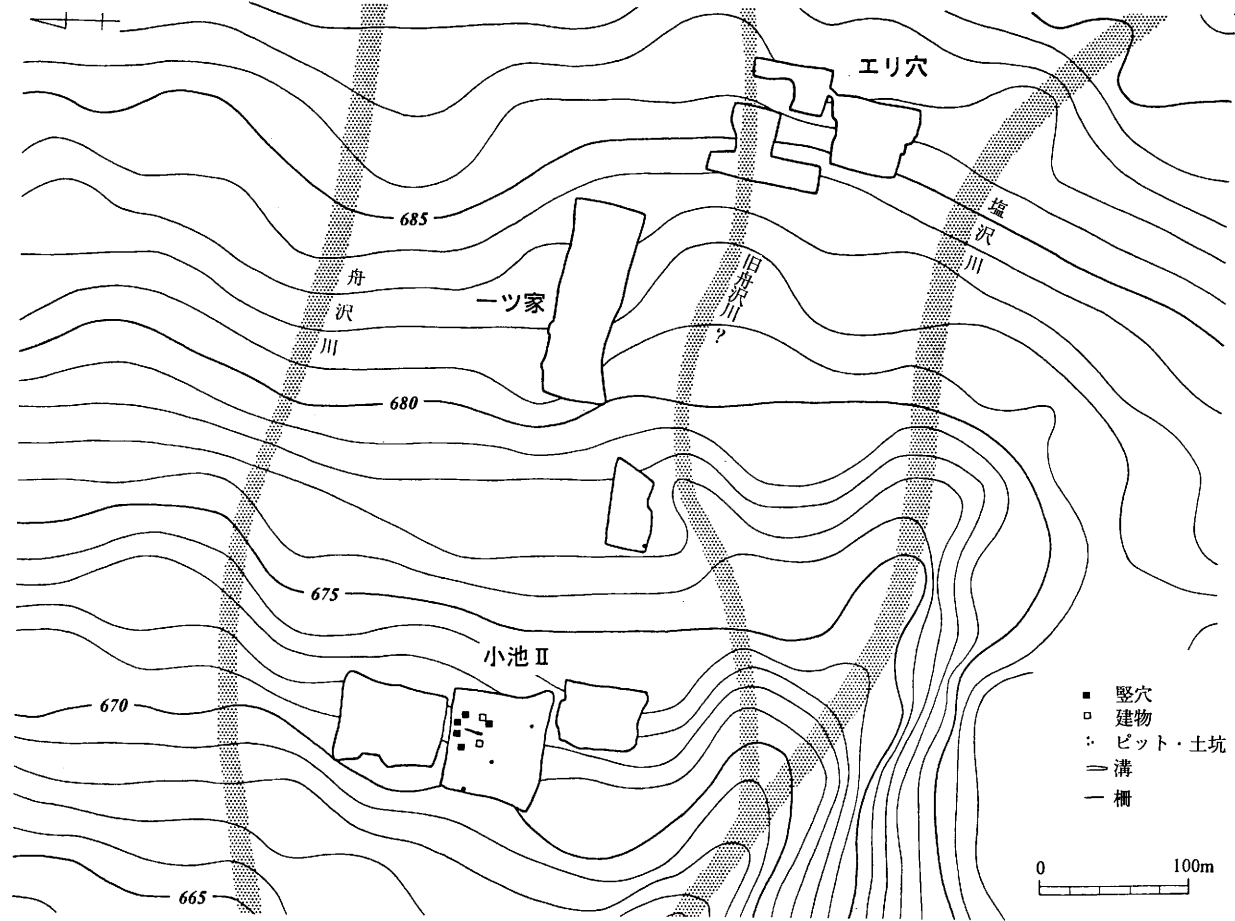
松本市 1996 『松本市史』第二巻歴史編Ⅰ 原始・古代・中世



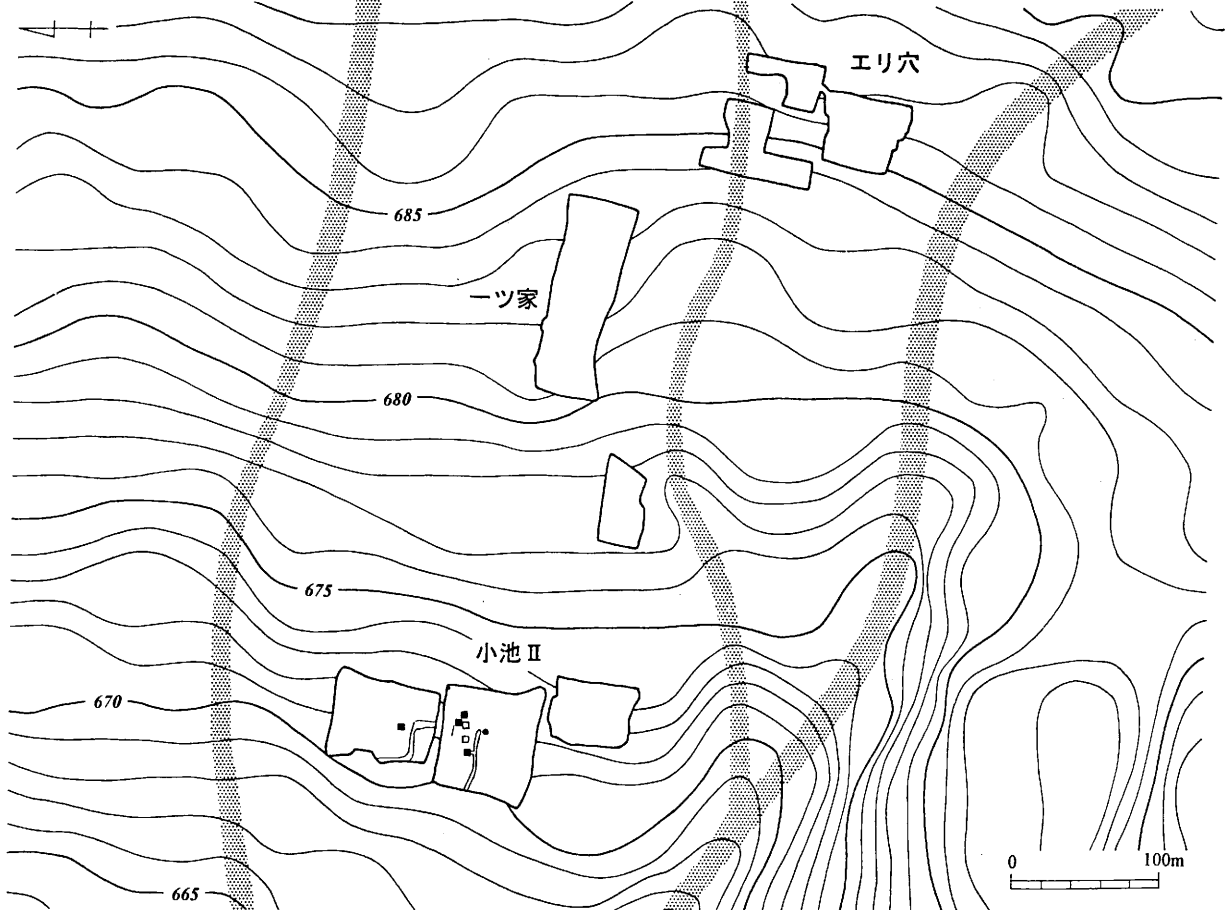
第186図 土器・陶磁器の時期別構成比



中世Ⅰ期（12C後～13C中）

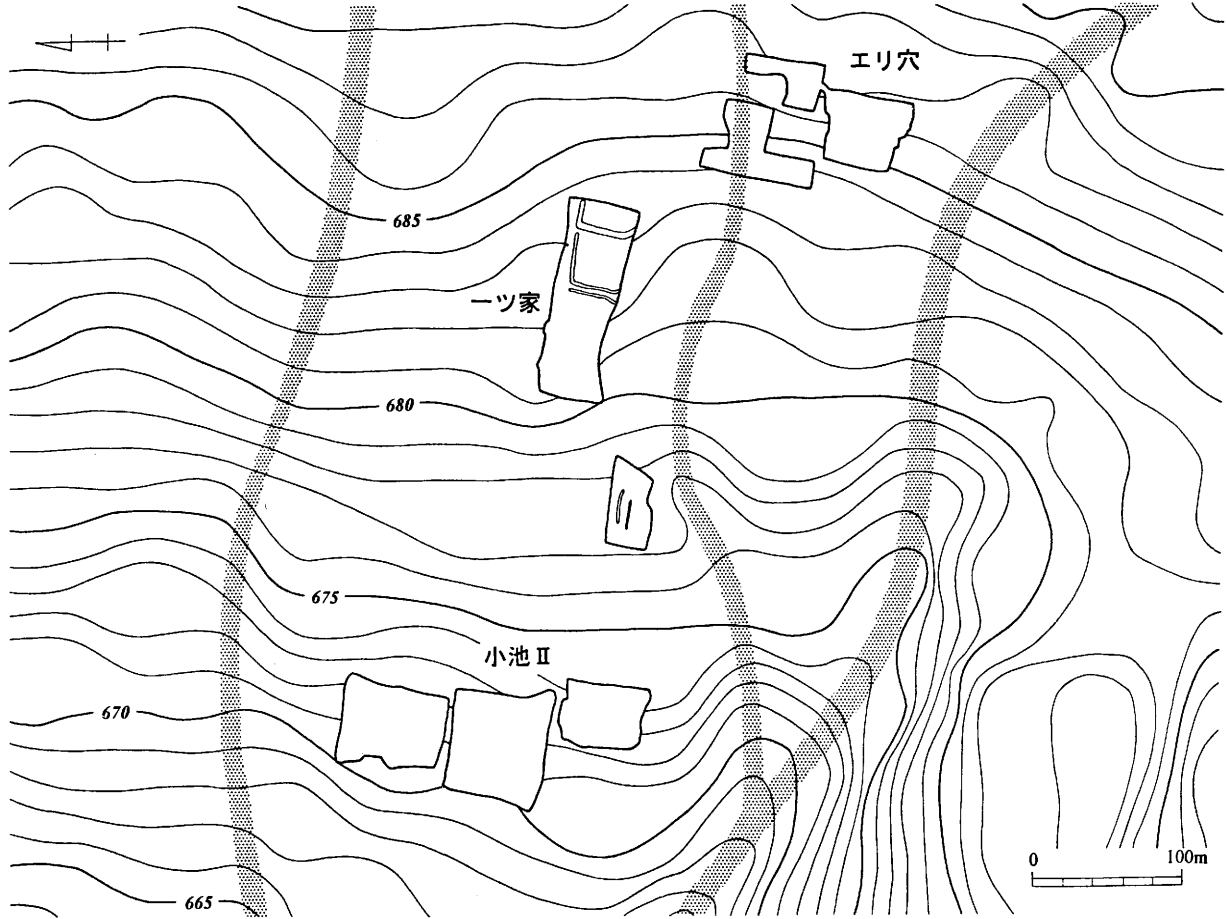


中世Ⅱ期（13C後～14C前）

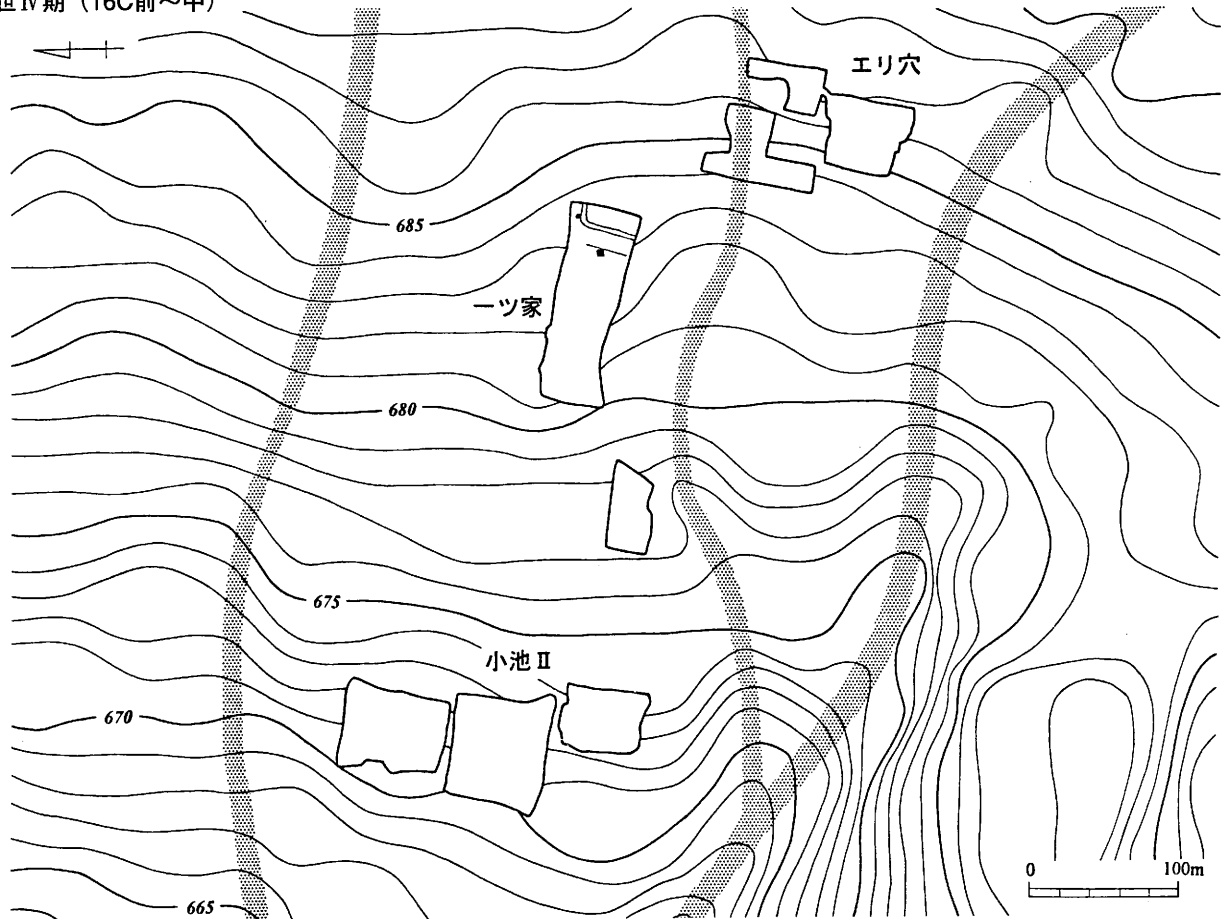


第187図 中・近世集落の変遷（1）

中世Ⅲ期（15C後）

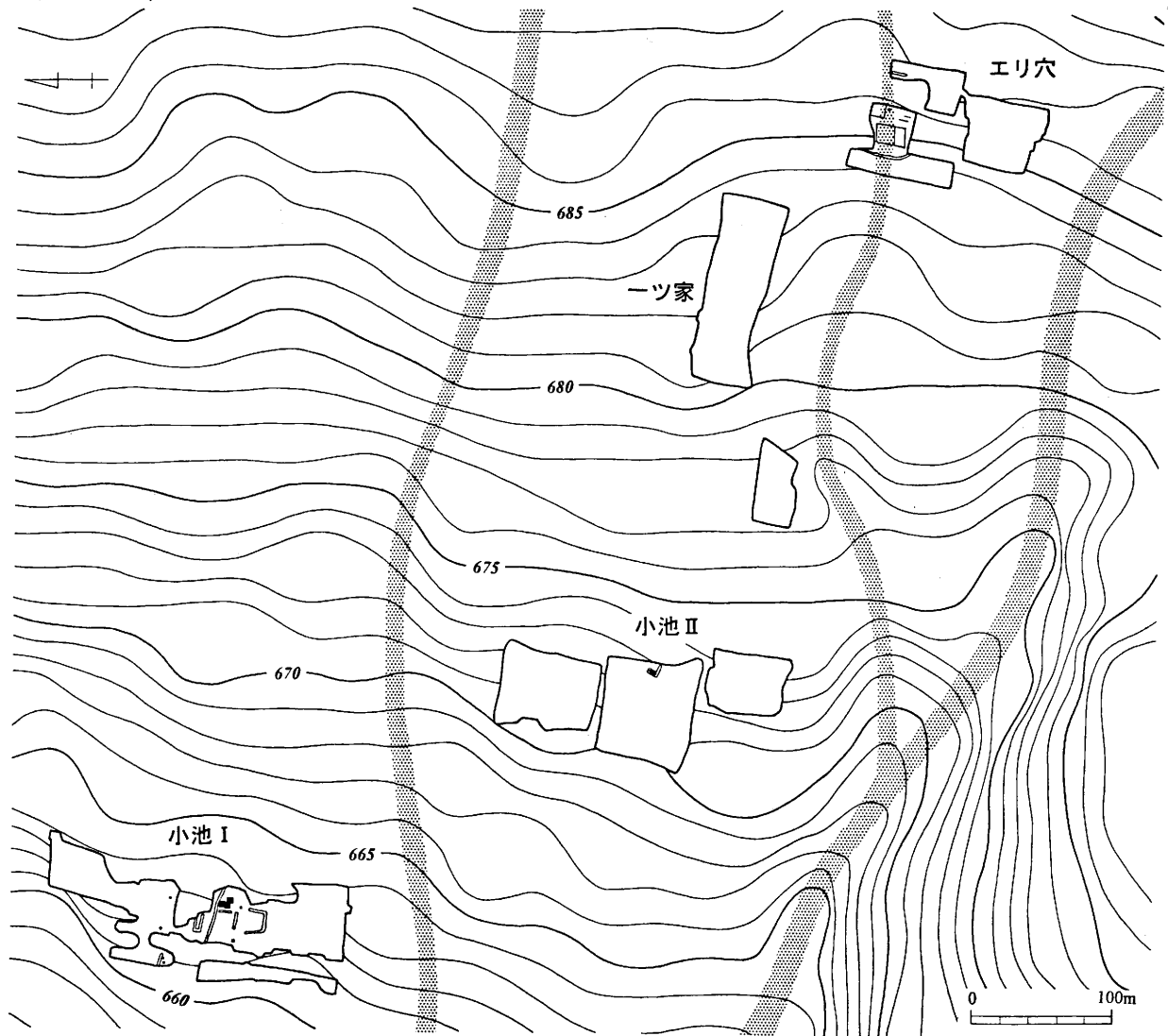


中世Ⅳ期（16C前～中）



第188図 中・近世集落の変遷（2）

近世 (17C~18C)



第189図 中・近世集落の変遷 (3)

小池遺跡Ⅱ・一ツ家遺跡緊急発掘調査報告書抄録

ふりがな	こいけいせき・ひとつやいせききんきゆうはくつちようさほうこくしよ							
書名	小池遺跡Ⅱ・一ツ家遺跡緊急発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	松本市文化財調査報告							
シリーズ番号	No.126							
編著者名	竹原 学・竹内靖長・太田圭郁・野村一寿							
編集機関	松本市教育委員会（松本市立考古博物館）							
所在地	〒390 長野県松本市丸の内3番7号（松本市中山3738-1・TEL 0263-86-4710・FAX 0263-86-9189）							
発行年月日	平成9（1997）年3月31日（平成8年度）							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
		市町村	遺跡番号					
小池	長野県松本市 内田・寿小赤	20202	331	36度 09分 55秒	137度 59分 00秒	19940725～ 19941201	9,592	内田圃場整備事業に伴う事前調査
一ツ家	長野県松本市 内田	20202	464	36度 09分 52秒	137度 59分 10秒	19941107～ 19941221	6,860	内田圃場整備事業に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
小池	集落跡	縄紋  奈良・平安  中世  近世	竪穴住居址 49棟 方形柱穴列 2基 屋外埋甕 5基 土坑 ビット 竪穴住居址 112棟 竪穴状遺構 5基 掘立柱建物址 6棟 土坑墓 1基 土坑 ビット 竪穴住居址 3基 竪穴状遺構 8基 礎石建物址 1棟 掘立柱建物址 3棟 柱穴列 1列 井戸址 1基 火葬墓 1基 土坑 ビット 溝状遺構 18条 溝状遺構 1条	土器・石器・石製品 土製品（土偶等） 土器・陶器（土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器） 鉄器・銅製品・石器（砥石） その他（墨書土器等） 土器・陶磁器（土師器・須恵質土器・青磁・白磁） 鉄器・銅製品・銭貨 石器（砥石・硯・石臼・石鍋） 陶器	縄紋時代中期、奈良～平安時代の集落跡、中世の集落跡を検出した。 縄紋時代中期は環状集落の約1/3を調査、多数の土器・石器一括資料を得た。 奈良～平安時代は第1次調査と併せ、大規模な集落跡と判明、中世の集落は礎石建物、区画溝等とともに多数の輸入陶磁器、武具等を出土し、有力者層の存在を窺わせる。			
一ツ家	集落跡	縄紋  古墳 平安  中世  近世	竪穴住居址 67棟 屋外埋甕 5基 土坑 ビット 竪穴住居址 1棟 竪穴住居址 38棟 掘立柱建物址 1棟 土坑 ビット 方形区画 2区画 竪穴状遺構 5基 掘立柱建物址 1棟 柱穴列 12列 墓址 3基 土坑 ビット 溝状遺構 11条 埋納銭 1基 土坑墓 2基	土器・石器 石製品 土製品（ミニチュア・土偶等） 土器（土師器）・鉄器 土器・陶器（土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器） 鉄器・銅製品 銭貨（寛平大寶）、墨書土器等 土器・陶磁器（土師器・須恵質土器・青磁・白磁・陶器） 土製品（埴塼等） 鉄器・銅製品・銭貨 石器（硯） 人骨・銭貨	縄紋時代中期、平安時代、中世の集落、屋敷跡を検出した。			

松本市文化財調査報告 No.126

小池遺跡Ⅱ・一ツ家遺跡

—緊急発掘調査報告書—

発行日 平成9年3月31日

発行者 長野県松本市教育委員会

〒390 長野県松本市丸の内3番7号

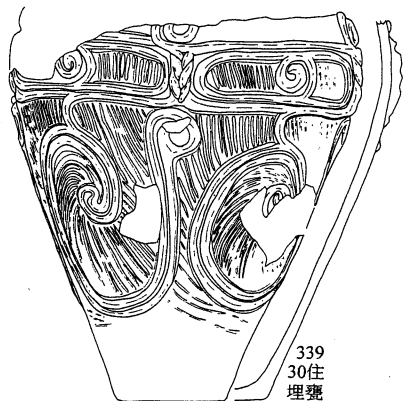
印刷 精美堂印刷株式会社



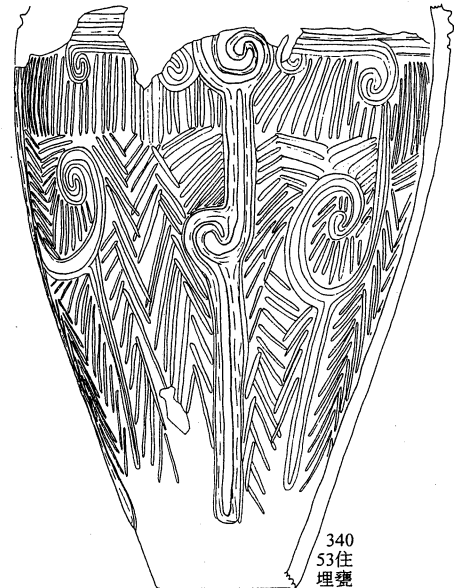
337  
64住



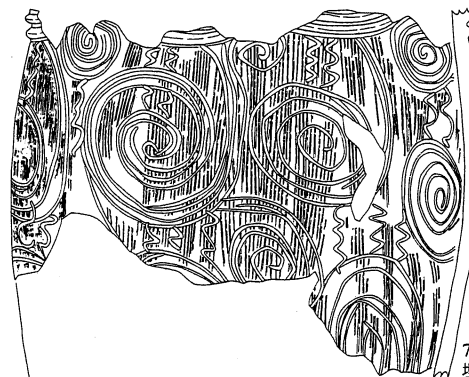
338  
73住  
埋甕



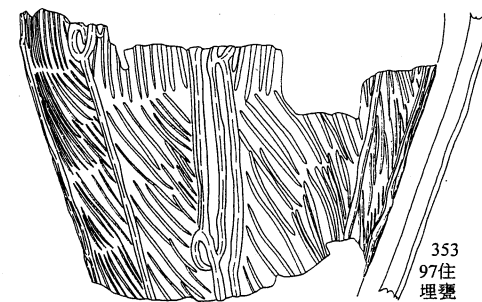
339  
30住  
埋甕



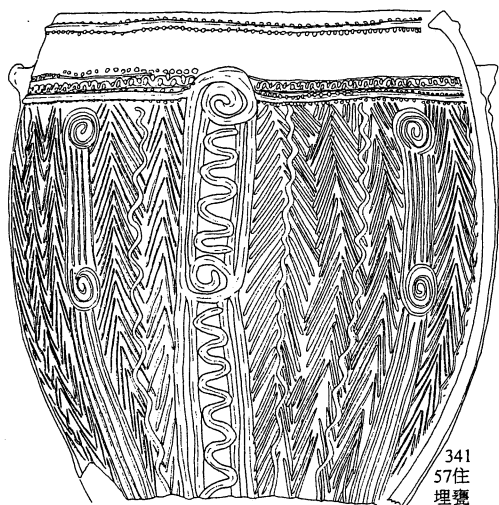
340  
53住  
埋甕



352  
72住  
埋甕



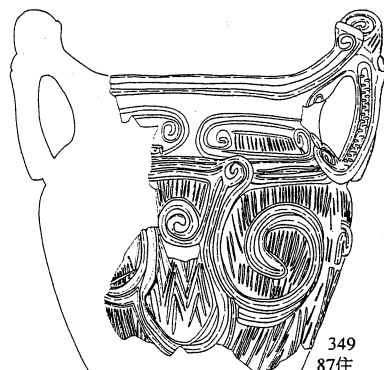
353  
97住  
埋甕



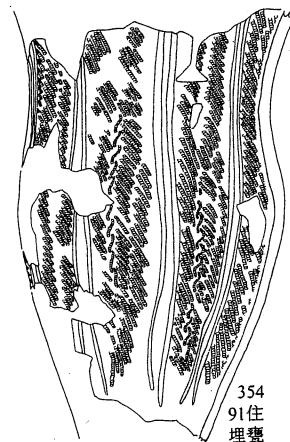
341  
57住  
埋甕



348  
87住



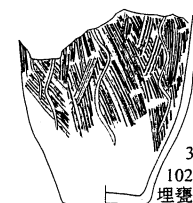
349  
87住



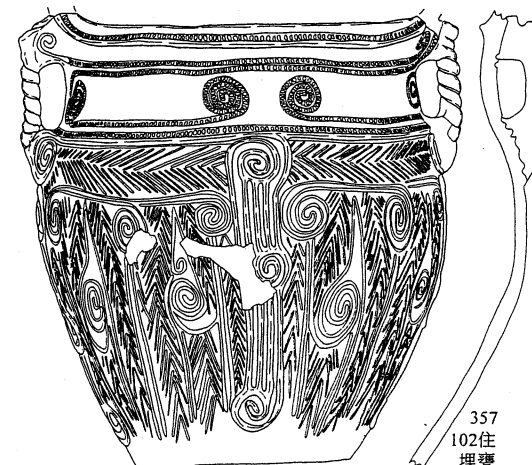
354  
91住  
埋甕



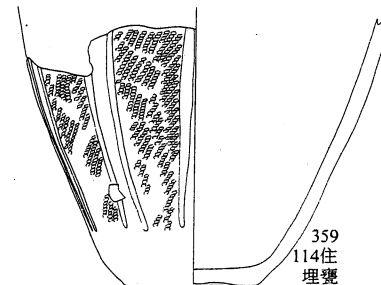
355  
埋甕4



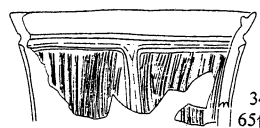
356  
102住  
埋甕内



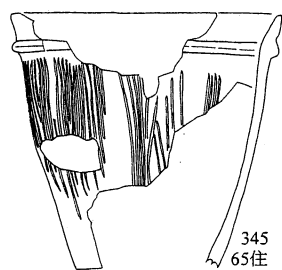
357  
102住  
埋甕



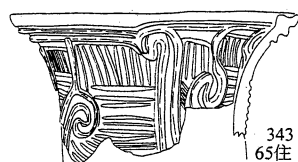
359  
114住  
埋甕



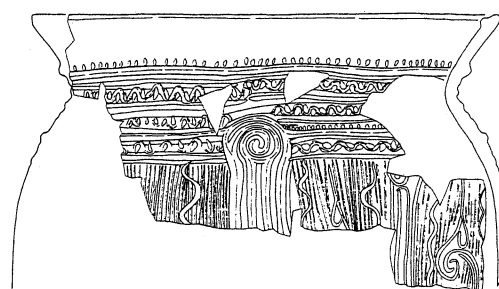
342  
65住



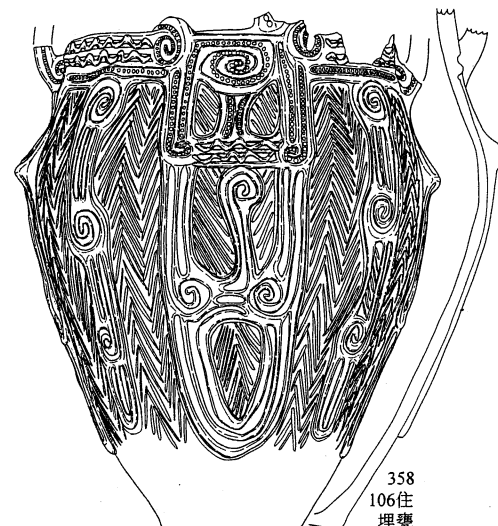
345  
65住



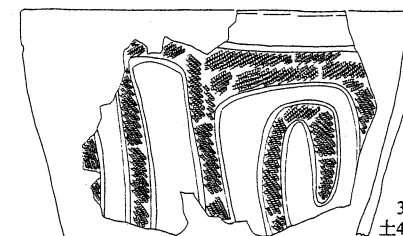
343  
65住



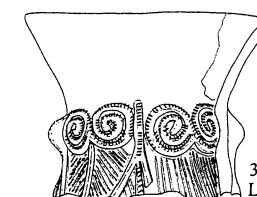
350  
87住



358  
106住  
埋甕

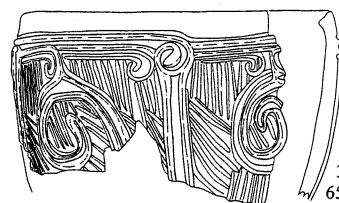


360  
土475

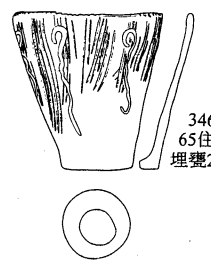


361  
LM

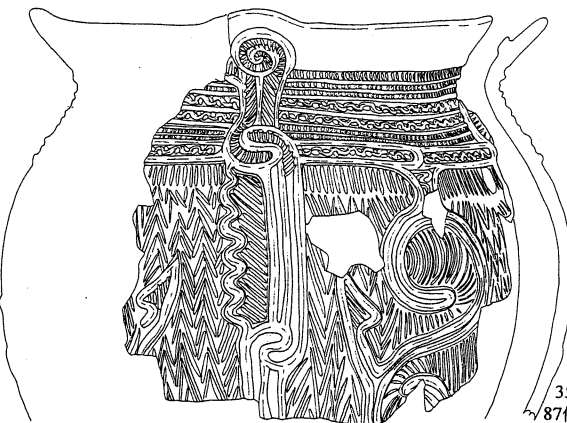
0 10cm



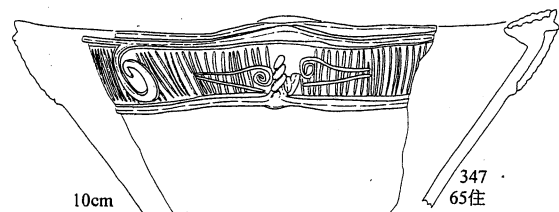
344  
65住



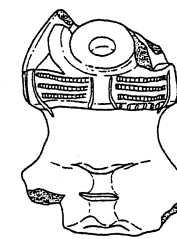
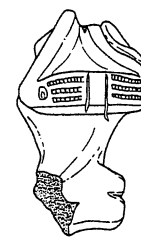
346  
65住  
埋甕2



351  
87住



347  
65住



362  
2住

※362のみ縮尺 1/3

0 10cm

